

# これが 統一原理だ

加藤 裕

ὅτι ἐξ αὐτοῦ καὶ δι' αὐτοῦ καὶ εἰς αὐτὸν τὰ πάντα·  
αὐτῷ ἡ δόξα εἰς τοὺς αἰῶνας, ἀμήν.  
πρὸς Ῥωμαίους 11:36

すべてのものが神から発し，神によって成り，神に至るのです。

この神に，栄光がとこしえにありますように。アーメン。

ローマ人への手紙11章36節

# まえがき

これまで、世界基督教統一神霊協会（現在の正式名称：「世界平和統一家庭連合」、正式な略称：「家庭連合」、以下「統一教会」と表記）という組織やその創立者とされている文鮮明<sup>ムンソンミョン</sup>氏の活動について批判する文献はあっても、その理念の全ての基本であり、土台となっている「統一原理」に関しては、あまりしっかりした批判書はなかったのではないかと思う。

そこで私は、統一教会と共通の理念を持った組織である「全国大学連合原理研究会（J-CARP）」に所属していた経験を活かして、統一原理が記されている『原理講論』を詳細に検討してみたところ、これが想像以上に非論理的であることがわかった。本書は、その研究成果である。本書によって、統一原理は絶対的真理どころではなく、一つの仮説としても全く成り立たないことがご理解いただけると思う。

本書は、光言社から1992年7月10日に発行された、世界基督教統一神霊協会著『原理講論』第3版第22刷（以下『原理講論』と表記）を底本として批判を展開している。私がこの版を所有しているからであるが、他の年次に出版された版においては、本書で示した頁数や行数が異なる場合があると思う。その点は私にはどうしようもないので、読まれる際には注意していただきたい。

また本書は、『原理講論』中の全ての不適切な箇所、誤り、矛盾点を指摘したものではない。しかし、根本的な誤りや矛盾についてはきちんと指摘しておいたので、本書によって、統一原理が全くのでたらめであることは充分明らかとなるだろう。

尚、本書は『原理講論』等の資料と共に、できれば最初から順を

追って読まれたたい。なぜなら、『原理講論』は既出の内容を前提として話が進んでいくからである。

本文中には統一原理のことを単に原理とだけ書いている部分が多くある。それは、統一教会のメンバーがよくそういう言い方をするし、私自身もそう書くほうがすっきりする場合が多いので、略させてもらった。

また、本書での聖句の引用には『聖書 新改訳2017』（© 2017 新日本聖書刊行会）を使用させていただいた。

この第7版を執筆するにあたり、まず私の状況の変化を説明する必要があるのではないかと思う。

第6版までを出版したときの私はクリスチャン（キリスト教徒）ではなく、他のどの宗教も自分の信仰としては持っていなかった。しかし、2010年6月から地元のプロテスタント教会の日曜礼拝へ集うようになり、ついに私は、イエス・キリストを信じてクリスチャンになった。また、その信仰表現として、2011年7月31日にその教会で洗礼を受けた。

それから8年が経過し、聖書の学びを続ける中で、以前自分が書いた本書を改訂したいと思うようになった。

実際、改訂作業を始めてみると、思った以上に改訂箇所が多く、とうとう、全面改訂に至った。というわけで、この第7版は、第6版の全面改訂版として位置づけられると思う。

統一原理は、聖書から論じている箇所が非常に多いので、クリスチャンとしての立場からの見解も述べておいた。ただ、ひとえにクリスチャンといっても、様々な立場・見解の方々がおられるので、ここで私自身の立場を表明しておきたい。

私は、「聖書は原典（原本）において、誤りのない神のことばで

ある」という聖書信仰に立っている。また、神のご性質を考えれば、聖書は一貫して字義通りに解釈すればよいという「ディスペンセーションナリズム」の立場に立っている。ディスペンセーションナリズムの詳細に関しては、巻末の参考文献を参照されたい。聖書の全体像を明確に理解できるようになるだろう。

聖書をさらに深く学びたいという探究心旺盛な方は、私が信頼しているハーベスト・タイム・ミニストリーズのWebサイト (<https://harvesttime.tv/>) をご覧いただきたい。非常に多くの有益なコンテンツが無料で公開されている。

以下の指摘の一部は、村上<sup>ひそか</sup>密牧師によるものである。村上先生には、私が統一原理の誤りを理解するのに大変お世話になった。深くお礼を申し上げたい。しかし、本文中の記述で、もし不適切な箇所があるとすれば、それは全て私の責任である。

また、いろいろとヒントを与えてくれた現役メンバーや脱会者の方々、そして聖書の記述に対する質問に答えてくださった牧師のみなさんにも、深くお礼を申し上げたい。

本書をご覧になる方々が、統一原理の真実を知ることができるようになってほしい。

最後に、本書を執筆する力を与えてくださった、あわれみ深く、恵み深い、まことの神に感謝しつつ。

2019年7月

加藤 裕

# 目次

まえがき .....	3
総序 .....	8
前 編	
第一章 創造原理 .....	35
第二章 墮落論 .....	82
第三章 人類歴史の終末論 .....	121
第四章 メシヤの降臨とその再臨の目的 .....	141
第五章 復活論 .....	151
第六章 予定論 .....	158
第七章 キリスト論 .....	161
後 編	
緒論 .....	168
第一章 復帰基台摂理時代 .....	177

第二章	モーセとイエスを中心とする復帰摂理	184
第三章	摂理歴史の各時代とその年数の形成	191
第四章	摂理的同時性から見た 復帰摂理時代と復帰摂理延長時代	196
第五章	メシヤ再降臨準備時代	202
第六章	再臨論	205
付録1	原理の神の非存在証明	226
付録2	韓鶴子女史に関する資料	228
付録3	キリスト教とは	232
あとがき		234
参考文献		238

# 総序

21頁5～6行目

「人間はだれでも、自己の欲望が満たされるとき、幸福を感じずる」  
→逆に空しさを感じることがあるので、正しいとは言えない。

21頁12行目

「いったい、不義なる欲望のままに行動して、本心から喜べるような幸福を味わい得る人間がいるであろうか。」

→現代社会において一般的に倫理に反すると言われるような行為をして、心の底から幸福を感じる人がいるのは事実。例えば、DV（ドメスティック・ヴァイオレンス）の加害者の中には、そういう人がいる。

そもそも「不義」とか「本心」という言葉を創造原理の言葉としてとらえるなら、創造原理を正しいと前提する限りでは、反語形式のこの文は正しい。しかし創造原理が正しいかどうかは、この段階ではまだわからないので、この文も正しいかどうかはわからない。つまり、人々を説得するための内容としてこの文をここで出すのは、不適切である。

21頁13行目

「このような欲望を満たすたびごとに、人間はだれしも良心の呵責かしやくを受け、苦悶かしやくするようになるのである。」

→良心の呵責かしやくを受けるとは限らない。

21頁13～14行目

「その子供に悪いことを教える父母がいるであろうか。」



「その子弟を不義に導く教師がいるであろうか。」  
→いる。例えば文鮮明氏本人がまさにそうである。

22頁4～5行目

パウロは、ローマ人への手紙1章18節～3章20節で、全ての人が罪人であることを論証している。全ての人が罪人であるという教理はパウロが作り出したのではなく、旧約聖書に啓示されている教理であることを示すために、パウロは旧約聖書から聖句を引用している。

22頁8～11行目

「ここにおいて、我々は、善の欲望を成就しようとする本心の指向性と、これに反する悪の欲望を達成させようとする邪心の指向性とが、同一の個体の中でそれぞれ相反する目的を指向して、互いに熾烈な闘争を展開するという、人間の矛盾性を発見するのである。」  
→パウロがローマ人への手紙7章で言っているのは、イエス・キリストを信じて新生したクリスチャンが、聖霊によらないで、自力で聖化を達成しようとするのは悲劇だということである。つまり、イエス・キリストを信じていない人には無関係の箇所なのである。  
『原理講論』は聖書の文脈を無視している。

22頁17行目～23頁3行目と墮落論によって、あなた（読者）は生まれた時から既に墮落（矛盾性を内包）していることになる。しかし22頁14～16行目では「いかなる存在でも、矛盾性を内包したままでは生成することさえも不可能」「生まれるというそのこと自体不可能」とある。つまり、あなたは生まれることもできないはず。しかし現に存在している。よって、矛盾する。ゆえに、上述の内容と併せて、総序の矛盾性に関する説明は完全に間違っている。

この人間の矛盾性について、太田朝久著『「原理講論」に対する

補足説明』(初版, 広和, 1995年) 171頁では, 存在論的にではなく, 目的論的に考えるのが望ましいとあるが, 同書の補足のよう修正しても, 正しい文章として成り立ってはいない。人間は, 目的論的な矛盾を抱えたままでも, 生まれることはできるから。人間の持つ矛盾性は, 計算機のように0か1かのどちらかしか選択できないというデジタルなものではなく, アナログなものである。

話がずれるが, 上記の『「原理講論」に対する補足説明』について, 少し説明しておく。著者自身が同書の中で述べているように, この本での見解は, 太田氏個人の見解にすぎず, 統一教会の公式な見解ではない(同166頁)ことに注意していただきたい。つまり, 同書における指摘内容は, 正式に認められたものではないのである。にもかかわらず, 同書では, 「まさにこれが正しい理解の仕方である」と言わんがばかりの書き方をしている。単なる個人的な見解なら, もっと謙虚な書き方ができるはずだろう。同書は太田氏の個人的な見解を述べただけであるから, 信用の対象にはならない。

同書についてもう少し詳しく述べると, 第一部(聖書批評学の観点からの, 統一原理の正当化の試み)と第二部(『原理講論』に対する補足説明)の二部構成になっているのだが, その中で太田氏は, 第二部の内容は, 第一部の内容を前提としているので, 第二部だけを取り上げて使用するのを止めて欲しい(同167頁)と言っている。そこで第一部の内容を簡単にまとめてみると, 「新約聖書には数多くの記述ミスがある。また, 新約聖書ではクリスチャンに都合の良いように旧約聖書の聖句が引用されていて, それがユダヤ教徒にとってつまずきの石になった。これらと同様のことが『原理講論』にも当てはまり, 『原理講論』における表現上の記述ミスや聖句の引用問題がクリスチャンをつまずかせている」となる。しかし『原理講論』をしっかりと検討してみると, その間違いは根本的なものであ

り、単なる記述ミスでは済まないレベルのものである。そして聖句の引用問題に関しては、キリスト教は論点先取の虚偽をおかしている（イエスがメシアであることを前提として無理に聖句を旧約聖書から引用している）ので、『原理講論』も同様に論点先取の虚偽をおかしていても構わない（自分たちに都合の良いように引用されていても良い）、というのである。しかし統一原理は、宗教と科学を統一された一つの課題としているという以上、論理的に正しくなければならぬので、論点先取の虚偽をおかしてはならないはずである。よって、太田氏の言う「第二部の内容は、第一部の内容を前提としているので、第二部だけを取り上げて使用するの<sup>きべん</sup>は止めて欲しい」というのはただの詭弁にすぎないことがわかる。彼は、反対牧師は詭弁を使ってメンバーを説得していると非難しているが、本当の所は、それは太田氏自身なのである。

#### 23頁1行目

「キリスト教では、墮落と呼ぶ」

→キリスト教で「墮落」というのは、簡単に言えば「神のように賢くなりた<sup>だざい</sup>いと思<sup>い</sup>、神の領域を侵したこと。または、その墮罪後の状態」を意味する。よって、『原理講論』のこの部分の説明は、正確ではない。

#### 23頁2～3行目

「このような観点から見るとき、我々は、人間は墮落したのだという結論に到達する。と同時に、だれしもこの結論に対しては反駁する余地がないということをもまた知るのである。」

→人間は、何よりもまず生物である。そして生物としてのヒトは、自らが属する環境に対して、自分にとって最もメリットがあると感じるような生き方を選択している、と考えられる。そのため、一見

矛盾したような行動をとったり、矛盾した感情を抱いていると感じることがあっても、その根っこでは、一つの共通した目的があると言えるだろう。例えば、矛盾した感情については、どちらが自分にとってよりメリットがあるだろうか、という情的な重みづけの程度の差によって表すことができる。よって、人間には本質的に矛盾はない。

また、人間が矛盾しているように感じて、それが墮落のせいだとする論理的な必然性は得られない。実際、『原理講論』での論証は、推論の過程における矛盾性についての説明が間違っているので、結局、人間が墮落したという結論は、総序の記述からは得られない。

#### 23頁7～8行目

「例えば、有神論と無神論とについて考えるとき、二つのうちいずれか一つを善と見なせば、他の一つは悪ということになる」  
→その神学あるいは哲学・思想の内容によるので、そんなことは言えない。

#### 23頁8～9行目

「我々はいまだどちらが正しいかということに対する絶対的な定説をもっていない」  
→「絶対的な定説」という言い方はない。絶対的なら真理であり、定説なら、今後変更される可能性があるかもしれない。よって、言葉の使い方が間違っている。

また、「どちらが正しいか」と言っていることから考えて、神観には有神論と無神論の2つしかないと考えているように思える。しかし、考え得る西洋的神観には主に次の4つがある。

- ・ 有神論：神による「無（神自身ではない）から有（被造物）」の

創造を認める。神は被造世界を超越しており，創造後も被造物（自然界や歴史等）に関与する。（例：ジャン・カルヴァンの神観）

・理神論：有神論とは，創造後は関与しない，という点で異なる。自然はそれ自身の法則によって自己展開する。（例：ジョン・ロックの神観）

・汎神論：神は自然に内在している。自然そのものが神。神の創造も超越も認めない。（例：スピノザの神観）

・無神論：神の存在を否定する。（例：デイヴィッド・ヒュームの神観）

注）統一思想の神観：神は「有（神自身）から有（被造物）」の創造をする。「無（神自身ではない）から有（被造物）」の創造ではないので，神と被造物は本質的に同一である。被造物そのものが神というのではない。被造物は，神の一部（神相）から分立された，目的を持ったエネルギーによって構成されたもの。

24頁2行目

「神などというものは果たして存在するのか」

→ここで神の存在について問いを出しており，「神の二性性相」の文中（『原理講論』42頁3行目～46頁7行目）で，ア・ポステリオリな論証（観察や経験に基づいて，その原動者の存在を導く方法）によって神の存在証明を行っていると考えられる。しかし，ア・ポステリオリな推論というのは結局，帰納法であり，帰納法によっては論理的な必然性は導かれないので，神の存在の必然性を証明することは論理的に不可能である。よって，ア・ポステリオリな論証を用いている以上，創造原理では，神の存在の必然性は証明されない。

あるいは，文鮮明氏が神から啓示を受けたのが証拠だというメンバーがいるが，これほど不確かな証拠はない。なぜなら，文氏は嘘

ばかりついているので、信憑性がないから。

24頁8行目

「外的真理を探究してきたのが科学」

→この「真理」という言葉が論理的真理のことであれば間違いではないが、実際は絶対的真理のことを示している。しかし科学は絶対的真理を探究するものとは言えない。なぜなら、ある理論が絶対的真理だと証明するには、あらゆる視点、つまり無限の視点から検討しなければならないが、有限の視点しか持てない人間には、そんなことはできないから。『原理講論』は間違った科学観を持っている。

25頁2～3行目

「肉身の快樂にふける俗人の喜びと、清貧を楽しむ道人の喜びとは、全く比べものにならない」

→両者は全く異質の感情であり、共通の尺度がない。共通の尺度がなければ比較はできないので、「比べものにならない」などとは言えない。

25頁10～11行目

「科学の対象は、外的な結果的な現象の世界から内的な原因的な本質の世界へと、その次元を高めなければならない」

→明らかに間違った科学観である。なぜなら、科学というものは現象を記述するのがその役目だから。現象の目的について考えるのは科学の範疇<sup>はんちゆう</sup>ではなく、哲学の範疇<sup>はんちゆう</sup>である。

26頁8～10行目

「あらゆる宗教は、暗中模索していたそれぞれの時代の数多くの心霊の行く手を照らしだしていた蘇生の光を、時の流れとともにいつ

しか失ってしまい、今やそのかすかな残光のみが、彼らの残骸を見苦しく照らしているにすぎない」

→きわめて偏った見方である。事実ではない。

26頁11行目～28頁4行目

事実ではない。キリスト教に出会って「救われた」と証言する人は現在でも数多い。特にここ20年間でイエスを信じたユダヤ人の数が急増しているという事実を無視してはならない。

27頁15行目

「キリスト教の教理では、これはすべての罪の中でも最も大きな罪として取り扱われている」

→正統的なキリスト教では、<sup>かんいん</sup>姦淫は罪であるが、最大の罪とされているわけではない。「最大の罪が何か」については聖書に明記されていない。明記されていないということは重要なことではないということである。あえて言うなら、自分を神とすること、つまり、高ぶり（<sup>ごうまん</sup>傲慢）が最大の罪なのかもしれない。

28頁8行目

「心と体が完全に一つになってこそ完全なる人格をつくることができる」

→意味不明。心と体は常に一つの全体としてあると考えるべきであろう。（『原理講論』45頁1～2行目も参照せよ。）

28頁12～13行目

「今日までの宗教は来世を探し求めるために、現実を必死になって否定し、心霊的な喜びのために、肉身の幸福を蔑視してきた」

→具体的にどのような現実のことを言っているのか、この文からは

わからないので、不適切な表現である。

29頁3～5行目

「科学の発達に伴い、人間の知性が最高度に啓発された結果、現代人はすべての事物に対して科学的な認識を必要とするようになったにもかかわらず、旧態依然たる宗教の教理には、科学的な解明が全面的に欠如しているという事実」

→なぜ最高度と言えるのか？ 科学が人間を賢くするという考え方は傲慢で、的外れである。

また、統一原理にも科学的な解明は全面的に欠如しているという事実がある。例えば、デカルト以来の心身問題に対して科学的な解明は何一つとしてなされていない。万有原力を示す方程式すらない。

29頁7行目

「信ずるということは、知ることなしにはあり得ない」

→そうであれば、『原理講論』を論理的に正しく知ることによって、統一原理は全く信ずるに値しないことが誰にでも明確にわかる。

29頁15行目～30頁2行目

宗教と科学を対立できるかのように考えているが、明らかに誤り。なぜなら、宗教は生き方についての指針を示すものであり、科学は現象の記述をするもの。両者は全く本質が異なる。ゆえに、共通の土台の上で、比較したり並列して論ずることはできない。

29頁17行目～30頁2行目と31頁4～5行目

上記のとおり、宗教と科学は全く本質の異なるものであり、共通の土台を持たないので、この2つを「統一する」ことは事実上不可能である。そもそも統一するという考え自体が間違っている。



別の言い方をすれば、科学には反証可能性がつきものであるが、宗教の根本教理には反証可能性があってはならない。科学理論は絶対的ではないが、宗教の根本教理は絶対的でなければ宗教とは言えない。(絶対的でなければ信仰できなくなる。) よって、この両者を統一するという考え自体が誤りなのである。

そして、原理においても、実際には統一された一つの課題として解決されていない。宗教的見解によれば、人類の歴史は6000年であるが、文鮮明氏や統一教会のメンバーは科学的見解として「実際はもっと長い」と言う。しかし、「実際は」という言葉により、宗教的見解である「6000年の歴史」を現実としては否定してしまうことになる。よって、宗教と科学は統一されていない。

また、野村健二著『浅見教授の批判に答える』(初版, 光言社, 1989年) 85頁から、「くい違ったならば、ためらうことなく前者を選ぶ」はずが、実際には科学的見解の方を採っている。矛盾している。

さらに、6000年を現実として否定するということは、それを構成している12数, 4数, 21数, 40数までも否定してしまうことになる。よって、復帰摂理を否定することになる。すると、文鮮明氏がメシアであるということにも根拠がなくなる。

29頁17行目

「科学を探し求めてきた宗教」

→宗教は科学を探し求めてはいない。探し求めるのは人間である。

30頁1行目

「宗教を探し求めてきた科学」

→科学は宗教を探し求めてはいない。上に同じ。

30頁5行目

「真理は唯一であり、永遠不変にして、絶対的なもの」なのに、「新しい真理」という言い方は矛盾する。概念の意味の同一性が保たれていない。これは、「時代により、宗教の真理も修正される可能性がある」ことを正当化するための、悪質な情報操作である。真理が唯一で、永遠不変で、絶対的なものなら、それは、時代によって変わるなどない、ということの意味する。

### 30頁6～8行目

「聖書は真理それ自体ではなく、真理を教示してくれる一つの教科書として、時代の流れとともに漸次高められてきた心霊と知能の程度に応じて、各時代の人々に与えられたものであるために、その真理を教示する範囲とか、それを表現する程度や方法においては、時代によって変わらざるを得ないのである。」

→何が真理かを教えてくれる教科書なら、その根本内容に誤りや矛盾があっては、真理を正しく教えられないのだから、その根本内容においては誤りや矛盾があってはならない。ここで言われる聖書とは、旧約聖書と新約聖書の両方を指しており、これらが真理を教えてくれる教科書だと考える以上、聖書の根本内容を受け容れなければならない。その根本内容とは、旧約聖書の時代も新約聖書の時代も、人は常に「恵みのゆえに、信仰によって救われる」（これを「信仰義認」と言う。エペソ人への手紙2章8～9節）というものである。この原則は、どんな時代であっても変わることのない真理であると、聖書は教えている。しかし統一原理では、人が救われるためには信仰だけではダメだと教えている。これは矛盾である。

また聖書によると、現在の我々に求められるのは、イエスのみがメシアである、という信仰である。（正確に説明すると、コリント人への手紙第一15章3～4節に書かれた福音を信じることによって我々は救われるのである。その福音とは、「キリストは、聖書に書い

てあるとおりに、私たちの罪のために死なれたこと、また、葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおりに、三日目によみがえられたこと」である。この福音を信じることによって我々は救われると聖書は教えているのである。)しかし、統一教会で言われる再臨のメシア、つまり、文鮮明氏は、実際にはイエスのみをメシアとせず、自らを再臨のメシアとしている。これは矛盾である。(使徒の働き1章11節には「このイエス」が再臨すると書かれているので、再臨のメシアはイエス本人であることがはっきりとわかる。文鮮明氏はイエス本人ではないから、文鮮明氏が自らを再臨のメシアだと主張するのは嘘になる。つまり、文鮮明氏は自称再臨主であり、偽メシアなのである。)

統一原理も時代によって変化すると考えるメンバーもいる。しかし、表現方法は変わっても、根本的な部分まで変更されることはあり得ないはず。例えば、今まで「彼には原罪はない」と言っていたのが、急に「彼にも原罪はある」と言うことはあり得ないはず。そんなふうに根本的に真理が変わるのなら、その真理は「嘘」と呼ばなければならない。『原理講論』169頁6～8行目でも同様。(本書129～130頁や136～137頁も参照せよ。)

文鮮明著『御旨と世界』(光言社、1985年)によると、次のようなことが書かれている。

398頁2行目と同頁5～6行目

「今日、我々は論理なくしては何事も信ずることができません。神は真理であり、真理は論理的であります。」

「神の言われることは、二十世紀の人間にとって、科学的であり、論理的であり、説得力のあるものでなければなりません。」

→「統一原理は論理的でなければならない」という意味である。

437頁2～5行目

「この統一教会の真理が、唯一の真理であるというその自信をもたねばならない。それから、変わらない、天然、霊界も、地界も、あるいは歴史を通して、永遠に変わらない真理である。誰も、国も変えることができなければ、世界も変えることができない。神様も変えることができない。先生自体もね。この真理によって、従っていく道であるというんだね。だから変わらない。過去、現在、未来において変わらないという真理である」  
→「統一教会の真理」＝『原理講論』の内容と考えるべき。なぜなら、文氏自身、『原理講論』の内容を基にして話をしているから。ここでは「先生自体も変えることができない」と言っている。つまり、絶対不変であると言っているのである。

593頁15行目

「先生は、真理を理論的に解明し発表した」  
→この「真理」とは当然「統一原理」のことであり、発表されたものは『原理講論』の内容と見なして良いだろう。

613頁16行目～614頁1行目

「先生もすべてを絶対的に確実にするためには…徹底的に実験し試験し尽くしました」  
→文氏自身によるこの発言から、発表された『原理講論』には根本的な誤りがあるはずがない。しかしよく検討してみると、実際は根本的に間違っている。よって、文氏が嘘をついているか、間違ったことを本気で信じているとしか考えようがない。

31頁10～11行目

「無知からはいかなる情緒をも生じ得ない。また、無知と無情緒からはいかなる意志も生ずることはできない」

→人間が無知に陥った（『原理講論』23頁15行目）ということは、同時に無情緒になり、無意志になったことになる。では、そんな人形のような状態から、どのように無知を克服しようとするのか？感情も意志もないなら、無知を克服しようとするなどあり得ない。しかし24頁6～7行目には、「無知を克服しようとして真理を探し求めてきた」とある。これは矛盾である。総序の中では、「無知」という言葉の意味の同一性が保たれていない。

31頁13～14行目

「神の实在性に対しては、聖書をいかに詳しく読んでみても、明確に知る由がない。」

→世界の創造主としての神が実在することは、自然界や良心を通して明確に知ることができると聖書は教えている（ローマ人への手紙1章18～20節）。

32頁8～10行目

「しかし、我々の前には、避けることのできない最後の闘いがまだ一つ残っている。それは、とりもなおさず、民主主義と共産主義との内的な理念の闘いである。」

→総序では、民主主義と共産主義の理念の闘いが最後の闘いだと言っているが、これは『原理講論』後編の復帰原理を前提して、そう言っているだけである。つまり、論点先取の虚偽である。

現実を見る限り、この両者の闘いが最後の闘いになるとは、必ずしも考えられない。

32頁12～13行目

「それでは、この最終的な理念の闘いにおいて、どちらに勝利がもたらされるかといえは、神の存在を信ずるすべての人は、だれしもそれは民主主義だと答えるであろう。」

→どのような神を信じているかによって、理想とする政治形態も異なる。聖書の神を信ずるなら、民主主義も共産主義と同様に滅びるだけである。

32頁15行目

「今まで民主主義世界において主唱されてきた唯心論」

→別に唯心論は主唱されてきていない。

33頁2～4行目

「いかに霊的な事実を否定する人であろうと、それらのことが科学的に証明されるならば、信じまいとしても信じざるを得ないのが人間の本性である。」

→信じない人は、どんな証拠を見せられても決して信じようとはしない（ルカ16:31）。イエスが、旧約聖書で預言されていた約束のメシアであることは十分に証明されているが、信じようとならない人は非常に多い。

33頁13～14行目

「この真理によって到達する世界は、あくまでも神を父母として侍り」

→なぜ神が父母と呼ばなければならないのか？ これも論点先取の虚偽である。

33頁15～17行目

「自分一人の利益のために隣人を犠牲にするときに覚える不義な満

足感よりも、その良心の呵責からくる苦痛の度合いの方がはるかに大きいということを悟るときには、決してその隣人を害することができないようになるのが人間だれしもがもつ共通の感情である。」  
→わかっている、苦痛の大きい方を選ぶことがあり得る。

#### 34頁5～6行目

「今まで神を信ずる信徒たちが罪を犯すことがあったのは、実は、神に対する彼らの信仰が極めて観念的であり、実感を伴うものではなかったからである。」

→そもそも実感を伴っていないければ、神を信ずる信徒にはならない。クリスチャンが罪を犯す理由は、まだ聖化の途中だからである。イエス・キリストを信じた瞬間から一切、罪を犯さなくなるとは、聖書は教えていない。

#### 34頁6～7行目

「神が存在するということを実感でとらえ、罪を犯せば人間は否応なしに地獄に引かれていかなければならないという天法」

→そのような天法は、どこにあるのか？

#### 34頁12～13行目

「先に、人間が墮落しているという事実と、この墮落が、人間創造以後に起こったことでなければならぬという事実を明らかにした」

→総序の論理では、そのような事実は明らかになっていない。このように、『原理講論』では、証明されてもいない「事実」が数多くでっち上げられている。

#### 35頁6～12行目

人間の墮落の原因や創造目的等の問題は、聖書を一貫して字義通りに解釈すれば解決する。字義通りに解釈するとは、比喻や象徴として読むように聖書が要求している場合にのみ比喻や象徴として読み、それ以外の箇所は、たとえどんなに信じがたくとも、文字通りに解釈する、という意味である。この方法で作られた神学体系を「ディスペンセーションナリズム」という。

35頁9～10行目

「全知全能の神が、彼らが墮落するということを知っていながら、どうしてそれを食い止めることができなかつたのか」  
→できなかつたのではない。神は人間に与えた自由意志を尊重し、おりやり自分の思い通りにしようとはなさないのである。

35頁13行目

「被造世界に秘蔵されている科学性」  
→「科学性」ではなく「法則」。

35頁13行目

「それらを創造された神こそ科学の根本でなければならない」  
→「科学の根本」でなく、「法則の根本」。

36頁11行目

「今まで難解な問題と見なされてきた三位一体の問題に対しても、根本的な解明がなくてはならない」  
→三位一体という概念は人間の理解を超えているが、旧約聖書にも新約聖書にもはっきりと啓示されているので、聖書を神のことばと信じるなら、三位一体も信じるべきである。

三位一体を定義すると、次のようになる。「神は、実体において



唯一の神でありつつ、父と子と聖霊という三つの位格において存在する。」

36頁12～13行目

「神が人類を救うに当たって、何故そのひとり子を十字架につけ、血を流さねばならなかったのかという問題も、当然解かれなければならない」

→聖書を字義通りに読めばわかる問題である。

36頁13～15行目

「イエスの十字架の代贖だいしよくによって、明らかに救いを受けたと信じている人々であっても、有史以来、一人として、救い主の贖罪しよくざいを必要とせずに天国へ行けるような罪のない子女を生むことができなかったという事実」

→これは聖書の教理が正しいことを前提にしているが、その根拠は説明していない。

また、罪はなくなるものではない。罪は赦ゆるされるものである。よって、統一原理が言う「罪の清算」という考えは成り立たない。ゆえに、復帰摂理は存在しない。すると、文鮮明氏がメシアであるということも否定される。(本書114～115頁も参照せよ。)

統一原理は、蕩滅条件とうげんを立てることによって復帰していくと主張しているが、それは「行いによって罪が清算される」ということになる。しかし、ローマ人への手紙3章20節によると、「人はだれも、行いおこなによっては神の前に義と認められない」とある。よって、行いによる罪の清算という考えは聖書に立脚してもいない。

原理が聖書に立脚している証拠として、『受難の現場』(世界基督

教統一神霊協会韓国・歴史編纂委員会編，世界基督教統一神霊協会ユヒョウウオン日本・歴史編纂委員会訳，初版，光言社，1986年）166頁の劉孝元氏との質疑応答の中で次のように述べられている。

問：この原理は聖書に立脚してつくられたものなのか。そうでなければ，つくられた原理に聖書の句節を引用したものなのか。

答：神様から受けた啓示と聖書の中にある一貫したみ旨を総合して体系化させたものである。厳格に聖書に立脚している。

『原理講論』を執筆した本人が「原理は厳格に聖書に立脚している」と言っているのだから，原理は聖書に立脚していると考えねばならない。しかし，実際には全く聖書に立脚していない。

37頁5～6行目

「今まで我々が信じてきた十字架の代贖と，完全なる贖罪との間に，結果として現れた事実の面で不一致があるというこの矛盾」  
→『原理講論』の執筆者は，そもそも聖書の教理を誤解している。イエスの十字架による贖罪死は完全である。しかし，そのイエスを信じた瞬間に罪の性質が全くなくなるという教えは聖書にはない。神の人類救済計画の中に矛盾は何もない。

37頁12～15行目

「だれしもが共通に理解できるように，『あからさまに』解いてくれるものでなければならない（ヨハネ16:25）。このような真理であってこそ初めて比喻と象徴によって記されている聖句を，各人各様に解釈することによって起こる教派分裂の必然性を止揚し，それらを統一することができるのである。」

→このことから、絶対的真理としての統一原理は、人によって解釈が異なることなど、あってはならない。統一原理を真理であると信じる者の意見は細部に至るまで全て一致していなければならない。しかしこれは事実と反する。実際には、統一教会のメンバーそれぞれが、統一原理に対して異なった解釈をしている場合がある。よって、統一原理は真理ではないことが証明された。

また、聖書のみことばは比喩と象徴によって記されているわけではない。比喩や象徴として読む必要がない箇所まで、比喩や象徴として読んでしまうせいで、解釈が異なり、教派が分裂してしまう。聖書は一貫して字義通りに読めばよいのである。

また、ヨハネ16：25は、イエスが11人の使徒たちに語られたことばで、使徒の働き2章の五旬節（ペンテコステ）の日以降、成就した。

37頁16～17行目

「この最終的な真理は、いかなる教典や文献による総合的研究の結果からも、またいかなる人間の頭脳からも、編みだされるものではない。」

→「いかなる教典」には聖書も含まれるはず。しかし『浅見教授の批判に答える』52頁で野村健二氏は、「統一原理は聖書が『神の言葉』であることを基本的には認め、そのことを前提としてその教理と神学を展開している」と言っている。『原理講論』を読んでも彼の言っていることは確かであり、聖書から「難問題」（『原理講論』37頁12行目）を取り出し、それが統一原理を編み出すのに大きな役目を果たしている。これは矛盾である。

37頁16～17行目

「この最終的な真理は、いかなる教典や文献による総合的研究の結

果からも、またいかなる人間の頭脳からも、編みだされるものではない。」

38頁1～2行目

「この真理は、あくまでも神の啓示をもって、我々の前に現れなければならない」

→これらは理性によって統一原理が編み出されることを否定している。しかし、『原理講論』42頁3行目～46頁7行目では「被造世界を観察することによって、神の二性性相を知ることができる」とされている。これは理性による考察であり、啓示ではない。よって、矛盾している。

また、古いメンバーの証言が載っている『文鮮明と統一教会』（フレデリック・ソントーク著、松下正寿訳、初版、世界日報社、1979年）の「韓国からアメリカに渡った初期の宣教師との対話。1976年9月、ワシントンDCの教会にて。」の項目には、「文先生は、自分は他の人びとから学んだと、はっきりとおっしゃいました。＜統一原理＞の総てが、文先生が受けた神の啓示のみから成り立っているわけではないのです」（67頁）とある。

さらに同67頁には、「わたくしが入教する（1954年）前、原理講義は非常に簡単なものでした。さまざまな経歴をもった人たちが新しく入教し、学ぶうちに発見したことや、考えたこと感じたことをお互いに披瀝<sup>ひれき</sup>し合ったのでした。そのようにしてこの厚い本はできて来たのです。しかし初めは、大変簡単なものだったのです」とある。

つまり、統一原理は文鮮明氏以外の人たちの意見によって体系づけられたことになる。しかし、『原理講論』38頁2～9行目によると、「最終的な真理」である統一原理は、文鮮明氏だけが解き明かせたのではなかったのか？ 矛盾も甚だしい。

37頁16行目～38頁2行目

ヨハネが受けた黙示録10：11の命令は，ヨハネが黙示録を書くことで完遂された。

また，ヨハネの黙示録22章7節，18～19節から，これ以上，神の啓示はないことがわかる。つまり，人間にとって必要な啓示は全て聖書の中に与えられているのである。よって，統一原理という「新しい真理」が必要な余地は微塵もないのである。

38頁2～3行目

「しかるに神は，既にこの地上に，このような人生と宇宙の根本問題を解決されるために，一人のお方を遣わし給うたのである。」

→聖書を正しく理解すれば，神がそんなことをされないのは容易にわかる。「新しい真理」は必要ない。「新しい真理」を教える人も必要ない。人生と宇宙の根本問題に対する答えは全て聖書に書かれている。

38頁5～7行目

「人間として歩まなければならない最大の試練の道を，すべて歩まなければ，人類を救い得る最終的な真理を探しだすことはできないという原理を知っておられた」

→ここでは，人間としての苦難の道を歩む，つまり体験によって原理を知ることができるとしている。いったい原理は理性によるのか，よらないのか？

また，「原理を知っておられた」とあるが，なぜまだ個性完成していないときに原理を知ることができたのか？ せいぜい推測にすぎないはず。

現に，『原理講論』が初めて出版された1966年（日本語版は1967年），文氏はまだ個性完成していない。その根拠として『韓鶴子女<sup>ハンハクジャ</sup>』

史御言選集 『愛の世界』(初版, 光言社, 1989年) 121頁によると, 「そのため, 77年, 今年のご聖誕記念日, 2月23日には, 蕩滅のすべてが払われて真の父母が完成基準に達し, 完全なる復活が与えられたということで, 新しい時代の始まりが宣言されたのです」とある。(これは1977年2月23日に文鮮明氏が語った内容である。) よって, 個性完成したのは1977年だと思われる。ゆえに『原理講論』が出版された時, 文氏はまだ間接主管圏にいたことになる。つまり, 真理が完全にはわからない状態にいたのに, 『原理講論』は「最終的な真理」として出版されている。

これに対し, 「文氏は親として全人類を早く救いたかったから, 個性完成する前であったとしても, 既にわかったことだけでも発表したかった」という反論が考えられる。しかし, 本当にそう思っていたなら, 個性完成して完全な真理がわかった時点で, すぐに論理的に完全な『原理講論』を出すはず。それが「真の愛」を持った本当の親ではないのか? そうすれば, 人類の復帰は早くできる。にもかかわらず, いまだに矛盾だらけの『原理講論』を出版している。

文鮮明氏はまた, 「完全な原理を知っていながら離反した人を救う道はないので, とりなしのために敢えて間違いを残しているのだ」というようなことを言っている。しかし, とりなしとして文氏が代わりに責任をとろうとしても, 「蕩滅条件は自分が立てなければなりません。他の人が代わりに立てることができないものではありません」(『罪と蕩滅復帰』世界基督教統一神霊協会編著, 初版, 光言社, 1999年, 238頁) と文氏は自分で言っているのだから, とりなしには何の意味もないことになる。また, 本書を通してわかるように, 完全な原理など存在しないので, 単なる言い訳にすぎない。

さらに, 「完全な原理を発表するには, まだまだ蕩滅条件を立てる必要がある」という反論が考えられる。しかし, 「真の愛」を持

った親として、文氏は人類の蕩滅を復帰してきた（本来、他の人が払うべき蕩滅を払ってきた）と言うのだから、本当に「真の愛」を持っているなら、文氏自身が、完全な原理を発表できるための蕩滅条件を立ててくれるはずではないか？ そもそも文氏は、完全な真理を解明し、それを全人類に発表するためにメシアとして来たのではなかったか？ しかし実際には、完全な統一原理など存在しないので、これもただの言い訳にすぎない。

また、原理によると、復帰摂理は再創造の摂理であるから、個性完成してから初めて子女繁殖ができるはずなのだが、文氏は1977年までに、韓鶴子女史との間に10人もの子女を作っている。これは原理原則に反しており、アダムとエバが時ならぬ時に性的関係を持つことで墮落したように、当然10人の子女も墮落の結果であるがゆえに、原罪があることになる。（ちなみにその10人の子女とは、『韓鶴子女史御言選集 愛の世界』223～224頁によると、譽進<sup>イェジン</sup>、孝進<sup>ヒョージン</sup>、恵進<sup>ヘジン</sup>、仁進<sup>インジン</sup>、興進<sup>フンジン</sup>、恩進<sup>ウンジン</sup>、顕進<sup>ヒョンジン</sup>、國進<sup>クッチン</sup>、權進<sup>クォンジン</sup>、善進<sup>ソンジン</sup>のはずだが、恵進は生後7日で死亡したせいか、記載されていない。）そして墮落人間から無原罪の子女は生まれないので、残りの子女（榮進<sup>ヨンジン</sup>、亨進<sup>ヒョンジン</sup>、妍進<sup>ジョンジン</sup>、情進）にも原罪があることになる。文鮮明氏の血統は墮落人間の血統なのである。

38頁7行目

「億万のサタン」

→サタンはひとり。

38頁10行目

「ここに発表するみ言<sup>ことば</sup>はその真理の一部分であり」

→これにより、絶対的真理としての「統一原理」の一部分を文章化したものが『原理講論』であることがわかる。よって、『原理講論』

には一片の誤りも矛盾もあってはならない。しかし実際には、数多くの矛盾が存在する。これで、原理によって原理が否定された。原理は絶対的真理ではないどころか、一つの仮説ですらない。

統一教会のメンバーの中には、「『原理講論』は間違っている、統一原理は間違っていない」という意味不明な反論をする人もいるらしい。この人に「では、間違っていない統一原理とはどんなものですか？」と尋ねても、何も答えられなかったようだ。間違っていない統一原理など、本人も知らないから。それ以前に、『原理講論』を否定するという事は、文鮮明氏がメシアであることも否定することになる。なぜなら、『原理講論』全体を通して、文氏がメシアであることが正当化されることになっているから。ゆえに、「『原理講論』は間違っている」と言うことは、「文鮮明氏はメシアではない」と告白することになるのである。（この内容は、『原理講論』全体についての話であり、「枝葉末節が間違っている」というような意味ではない。）

以上、総序だけでも数多くの矛盾を見つけることができる。この矛盾をどう説明するのか？ 『原理講論』37頁9～13行目にあるように「この真理は…だれしものが共通に理解できるように、『あからさまに』解いてくれるものでなければならない」はず。これが正しければ、原理によって原理が絶対的真理でないことが証明される。

『原理講論』は文鮮明氏が書いたものではなく、弟子の劉孝元氏が書いたから間違いがあるんだという反論もある。その根拠として、『浅見教授の批判に答える』55頁末に、「『原理講論』を執筆したのは文鮮明先生の世界巡回中のことで十分連絡が取れなかったと聞いている」とある。しかし実際は、劉孝元氏の妻である史吉子夫人サキルジャが「いつも夫の側で訂正させたり、付け加えさせたりしていた」と証言している。ゆえに『原理講論』は文氏の指示で書かれたことにな



り、文氏にも『原理講論』の内容に対して責任があることになる。

実際、統一教会側は、「『原理講論』は、文氏がそれまで語ってきた統一原理の内容を、劉孝元氏が一冊の本に整理したものだ」と言っている。ならば当然、『原理講論』の内容こそ、文鮮明氏によって解かれた統一原理であると考えべきであり、そこに根本的な誤りや矛盾があってはならないことになる。

また『ファミリー』1995年2月号63頁によると、文氏は「『原理講論』は劉協会長が書いたものではありません。1ページ、1ページ鑑定を受けたのです。私が成したことに手を付けることはできません」と言っている。さらに『「原理講論」に対する補足説明』101頁によると、「『原理講論』を執筆された劉孝元先生も、聖句の引用箇所等の問題を、出版する直前になったころ文先生に相談され、『原理講論』を修正しようと言われたというのです。ところが、文先生はそうした修正を許されずに、『八割くらい合っていれば、それでいいというんだね』というようなことを語られ、そのままにしておくようになった」とある。これらは、『原理講論』の文責は文氏にあることを意味する。つまり、たとえ『原理講論』に間違いがあっても、その責任は劉孝元氏にあるのではなく、文鮮明氏にあるということである。

また、文氏自身の語る統一原理の根本的なことは、やはり『原理講論』の内容を土台にしている。よって、『原理講論』の骨子が否定されるということは、文氏自身の語る統一原理の内容も必然的に否定されることになる。これは、文鮮明氏がメシアでないことの証拠である。

さて、総序の内容を簡単にまとめてみると、まず「人間はどうしたら幸福を得ることが出来るだろうか」という問いに始まり、「統一原理を知ることにより幸福を得られる」と結論づけている。しか

し、その結論へ至るまでの論理展開は誤りや矛盾だらけであり、『原理講論』の前編・後編を検討してもわかるように、何一つとして適切な答えは出されていない。つまり、「どうしたら幸福を得られるか」という問題は、統一原理によっては何も解決されないのである。

「どうしたら幸福を得られるだろうか」という問題を深く考えてみようと思うなら、まず最初に「幸福とは何か」を考える必要がある。また、「人間（特に生物としてのヒト）とはどういう存在なのか」とか、人間の理性や能力の限界についても、多角的な視点から考える必要がある。しかし『原理講論』では、それらについてほとんど考察ができていない。

以下、『原理講論』本文全体に渡って批判を展開していくが、『原理講論』以外にも、統一教会が過去に出版した文献や統一教会創立初期に出版されている文献などを互いに比較したり、『原理講論』の生い立ちについても知っておくと、より深く文鮮明氏や統一教会の本当の姿に触れることができるだろう。

（ちなみに、初期の頃は「統一原理」という用語は使われていなかったようだ。『文鮮明と統一教会』155頁によると「初期の頃は単に＜原理＞と呼ばれていたが、1974年の英訳のとき＜統一原理＞という用語が用いられた」とある。）

# 前編

## 第一章 創造原理

総序でもそうだが、創造原理においても、なぜ神の存在を前提で  
きるのか、その必然的な根拠は何も示されていない。よって、統一  
原理が絶対的真理であることは証明されていない。

### 第一節 神の二性性相と被造世界

#### (一) 神の二性性相

42頁7～9行目

「被造世界の森羅万象は、それを創造し給うた神の見えない神性の、  
その実体対象として展開されたものなのである。それゆえ、作品を  
見てその作者の性稟<sup>せいひん</sup>を知ることができるように、この被造万物を見  
ることによって神の神性<sup>しんせい</sup>を知ることができるのである。」

→もし被造世界が神の神性<sup>しんせい</sup>の実体対象であるなら、神は被造世界を  
超越することができず、神は被造世界の内にのみ存在し、神と被造  
世界とは本質的に同一な存在となる。すると神にも、カオス理論で  
言われるような決定論的カオスの長期予測不能性が存在することにな  
り、神の全知性は否定されてしまう。そして必然的に全能性も否  
定される。しかしこれでは、一方で統一原理が主張する有神論的な  
神、つまり全知全能である絶対者としての神（『原理講論』129頁2  
行目、50頁3行目、119頁12行目など）は否定されてしまう。これは

矛盾である。よって、統一原理の神観は根本的に矛盾を抱えていることになり、完全に自己崩壊している。(本書50～51頁も参照せよ。)これは二性性相のみについての話だという反論があるが、内性には数理が含まれるのだから、神や世界を数理的に考えることは問題ない。(本書42頁や『統一思想要綱』も参照せよ。)

これに対し、『「原理講論」に対する補足説明』332～333頁で太田氏が述べているように、絶対者である神の相対的存在として被造世界が出現してきたのだ、という反論があるかもしれない。しかし、神が被造世界に対して相対的な存在、つまり比較可能な存在になったなら、そのとき神は、被造世界が持つ予測不能性(心情的には、その予測不能性から来る不安など)を持たねばならなくなり、不完全な被造世界と本質的に同一な存在となってしまうので、同時に絶対者(無条件・無制約・純粹・完全な存在)であるということはありません。なぜなら神は、全く異質な存在へと変化してしまうことになるからである。つまり、神という存在の本質が変化してしまうのである。神はもはや絶対者ではない。そのような存在がまたどのようにして絶対者に戻れると言うのか? そもそも絶対者なら何かの相対的存在になることはない。なぜなら絶対者なのだから。太田氏は、「絶対者である神は、結果的存在である被造世界に対するときのみ、相対的な側面をもつことができる」と述べているが、その考えは破綻している。太田氏は「絶対者」とか「相対的」という言葉の意味を理解していないだけである。神は絶対者でありながら相対的存在でもあるという考えは、ただの論理矛盾にすぎない。

以上の内容をまとめると、統一原理の神観は、一方では有神論的でありながら、一方では汎神論的なのである。これは完全に相矛盾する主張であり、止揚も統一も不可能である。この矛盾する神観こそ、統一原理の最大の欠陥の一つである。結局、統一原理(文鮮明氏)の主張するような神は存在しないと結論づけられる。(別の言

い方をすれば、文鮮明氏が出会った神とは、彼の心が勝手に作り出した妄想であり、客観的存在としては実在しないのである。)そしてこの結論こそ、まさに「統一原理の主張する神の非存在証明」にほかならない。ゆえに、統一教会での信仰生活は、存在しない神に祈ったりするのだから、原理的に全く無意味である。(統一原理の観点から見て無意味というだけで、信仰生活の中で行われた行為の全てを否定することには、必ずしもならない。例えば、苦手なタイプの相手を一生懸命に愛そうとしてきた努力には、それなりに価値があると思う。よって、必ずしもその人の信仰生活や人生の全てを否定するわけではないので、その点は安心していただきたい。)

ちなみに、統一原理の神が全知全能であることは、文鮮明氏も認めている(例えば『御旨と世界』360頁)。しかし一方で、「全能なる神様も<sup>まこと</sup>真の父母をどのくらい必要とするか。絶対的に必要とするんだよ」(同175頁)などと言っている。これは、神が全能であることを否定することになるのに、文氏にはそれがわからないようだ。(これに対し、『「原理講論」に対する補足説明』334頁で太田氏が述べているように、文氏の言う神の全能性とは、「自己制限的全能性」のことである、という反論が考えられる。この「自己制限的全能性」は、神自身も干渉できない自由意志を人間に持たせることによって、人間に、神に似た創造性や万物に対する主管権を与えるための、神の愛の現れだと考えている。しかし、神は被造世界に対して時間と空間を超越して存在している(『原理講論』50頁3行目)のだから、人間の創造後も全能でなければならない、つまり、できないことなどあるはずがない(ルカの福音書1章37節)。全能でありながら「干渉できない」というのは、矛盾している。また、本書の万有原力の所(52～56頁)で述べるように、万有原力の存在を肯定すれば、人間の自由意志には神も干渉していることになるのである。よって、「自己制限的全能性」という考えは原理によって否定され

る。)

文氏は、「先生は科学も数学も勉強して知っていますし、科学的真理に基づかないでたらめなことをするようなばかりではありません」(『御旨と世界』565頁)とも言っているが、それが本当かどうか、本書によってよくわかるだろう。

42頁10～12行目

「存在しているものは、いかなるものであっても、それ自体の内においてばかりでなく、他の存在との間にも、陽性と陰性の二性性相の相対的関係を結ぶことによって、初めて存在するようになる」

→この文は端的に誤りである。なぜなら、存在するために相対的関係を結ぶ必要があるのなら、相対的関係を結ぶ以前に既に存在していなければならない。しかし、存在するためには、やはり何かと相対的関係を結ぶ必要がある。そして存在するために相対的関係を結ぶ必要があるのなら、相対的関係を結ぶ以前に既に存在していなければならない。以下、無限ループ。よって、この文は無意味である。

また、最後の部分を「陽性と陰性の二性性相の相対的関係を結んでいる」と修正してみよう。すると、この創造原理では陽性・陰性の二性性相を存在論的に考えていることがわかる。しかし、例えば光子(フォトン)には、自体内に陽性とか陰性といったような性質はない。また例えば、物質に対して反物質が陽性と陰性の相対的関係を結べば、宇宙は消滅してしまう。細胞分裂した2つの細胞もどちらが陽性か判断不可能である。さらに、例えば人間の額や鼻は、他の存在との間に陽性とか陰性といったような相対的関係を結んでいない。他にも例外はいくらでも見つけられる。よって、この原理は完全に否定された。

ちなみに文鮮明氏は、「原理に外れた例外はとることができないし、原理を侵す者を許すことのできない先生です」(『韓鶴子女史御ハンハクジャ)

言選集 『愛の世界』121頁)と語っている。例外をとれないのなら、二性性相という考えは完全に間違っている。

原理においては、素粒子や原子についての陽性・陰性の意味は、プラスに帯電しているか、マイナスに帯電しているかという電氣的な性質という意味で用いられている。しかし、同じ原子同士による共有結合はどちらが陽性か陰性かわからない。陽性・陰性の関係ではないからだ。

一方、雄しべ・雌しべ、雄・雌、男性・女性についての陽性・陰性というのは、<sup>えきがく</sup>易学用語としての「陽」、「陰」という言葉に由来していると思われる。易学での意味は、「陽」は「積極的・男性的なもの」、「陰」は「消極的・女性的なもの」である。従って、素粒子や原子についての「陽性・陰性」とは、全く意味が異なる。全く意味が異なるにもかかわらず、原理は同じ言葉を用いているのである。これは、「いかなるものも陽性・陰性という二性性相から成っている」というシンプルな考えを正当化するための心理操作ではないか？ 実際には概念の意味の同一性は保たれていないのに、あたかも同一性が保たれているかのように思わせている。また、上記の記述と併せて、原理の主張するような「陽性と陰性の二性性相」という考えは完全に否定される。

例えば、人間における男性と女性という区分を厳密に生物学的に区分することは難しい。生物学的には男女の性分化は漸移的なもので、主に4つの過程がある。(1) 遺伝的な性分化(性染色体の組み合わせ)、(2) 生殖腺の性分化(精巣ができるか、卵巣ができるか)、(3) 身体的な性分化(内部生殖器や外部生殖器の分化)、(4) 脳の性分化(男の脳か、女の脳か)である。特に後の3つでは、男性ホルモンにさらされる程度により、無数の分化形態ができる可能性が

ある。未分化の状態では、男性型・女性型のどちらにでもなれる。この場合、構造的に男女差は認められないので、性別はないと言えるだろう。また現に、生物学的な区分として、男性か女性か、どちらかに厳密に区分できない「半陰陽」の人々が存在している。よって、現実にはどこからが女性で、どこからが男性だという厳密な生物学的区分はできない。つまり、人間の男性・女性については厳密に二性性相という区分に当てはまらない。

また、性別が2つでない生物が存在する。例えば原生動物のミドリゾウリムシには4つの性があり、テトラヒメナには7つの性がある。そしてどの性が陽性で、どの性が陰性か、区別できない。

このように、あらゆる存在をペア・システムとして厳密にカテゴリー分けすることはできないのが現実である。

さらに原理では、天使は男性しか存在しないと考えられているので、「存在しているものは、いかなるものであっても…他の存在との間にも、陽性と陰性の二性性相の相対的関係を結ぶことによって、初めて存在するようになる」（『原理講論』42頁10～12行目）ことに反する。

以上のことから、創造原理における「陽性と陰性の二性性相」という考えは完全に否定された。

また、「陽性と陰性の二性性相」というときの「二性性相」の意味は、『原理講論』には定義されていない。なぜ陽性・陰性の相対的関係に対して「二性性相」という言葉を使う必要があるのか？ 実際、陽性と陰性の二性性相について『原理講論』中で述べている部分で、「二性性相」という言葉を全て削除しても、内容には何の影響も及ぼさない。これも、「二性性相」という言葉を普遍的にするための情報操作であると思われる。



#### 43頁6～7行目

「すべての動物は各々雄と雌とによって繁殖，生存する」  
→「すべての動物」とあるが，まだ未知の種はかなり多いと推測されている。よって，断言はできないはずである。

#### 43頁8行目

「その対象として女性のエバを創造なさせた」  
→エバはアダムの「対象」として創造されたのではなく，「ふさわしい助け手」として創造された（創世記2章18～23節）。

原典のヘブル語の直訳は「彼と向き合う助け手」。「助け手」という意味のヘブル語「エゼル עֵזֶר」は神にも使われている。例えば，エリエゼル אֱלִיעֶזֶר という人物（創世記15:2など）の名は「神は助け手」という意味。もし「助け手」＝「対象」と考えるのなら，神は人間の対象として存在していることになる。しかし，原理は「神は被造世界（人間も含まれる）に対しては主体としていまし給う」と主張している（『原理講論』47頁11～13行目）。これは矛盾である。よって，「助け手」＝「対象」ではない。

#### 43頁13～15行目

あるものの存在様相が相対的であるのは，相対的な視点から見ているからである。つまり，主観にすぎない。

#### 43頁16～17行目

「以上の記述によって，我々はすべての存在が，陽性と陰性との二性性相による相対的關係によって存在を保ち得ているという事実を明らかにした。」  
→以上の考察により，このような事実は存在しないことが明らかとなった。

44頁1～4行目

「存在するものはすべて、その外形と内性とを備えている。そして、その見えるところの外形は、見ることのできない内性が、そのごとくに現れたものである。したがって、内性は目に見ることはできないが、必ずある種のかたちをもっているから、それに似て、外形も目に見える何らかのかたちとして現れているのである。そこで、前者を性相といい、後者を形状と名づける。」

→「性相」について、この部分から要約すると、目に見ることができない内性で、それが必ずある種の「かたち」を持っている、ということである。しかし「内性」とはどういう意味なのか？ 文字の作りからして「内的な性質」と考えられるが、『原理講論』には明確な定義はない。また、性質が持つある種の「かたち」とは何なのか？ これにも明確な定義がない。しかし性質が持ちうるものと言え、概念や観念や法則や数理であろう。よって「性相」とは、「目に見えない内的な性質で、その性質の概念や観念や法則や数理」という意味になるだろう。（『統一思想要綱』参照。）

一方「形状」とは、「性相に似た、目に見える外形」となる。しかし文字の作りからして、正確には「外形の状態」も含まれるはずではないのか？

44頁12～13行目

「これによって、あらゆる存在が性相と形状による二性性相の相対的關係によって存在しているという事実を、我々は知るようになった。」

→「相対的」関係を持つということは、ある点において比較可能であるということである。

(1) そこで人間の「かたち」について考えてみる。もし、性相

である心がねじ曲がっているなら、形状は性相に似ているのだから、形状である体のどこかがねじ曲がったような状態になっているはず。しかし、現実にはそのような関係は成立していない。よって、原理が主張するような事実は存在しない。

(2) また、本心を偽って、いかにも誠実そうに振る舞う詐欺師も実際に存在する。心はオオカミでありながら、外見は羊のような素直な人物に見えることはよくある。よって、原理が主張するような事実は存在しない。

(3) 上記の2つの事実から、「あらゆる存在が性相と形状の二性相の相対的關係によって存在している」という原理は否定された。(そもそも、ある仮説が絶対的真理でないことを証明するには、反証が1つあればよい。)

44頁15行目

「形状は有形の外的な結果」

→例えば、空気や重力は無形で目に見えないから、形状に相当する部分がない。光も無形なので、形状に相当する部分がない。よって、形状を有形とする以上、「あらゆる存在が性相と形状の二性相から成り立っている」という原理は否定された。

44頁17行目

「縦的なものと横的なものとの相対的關係」

→意味不明。

45頁5行目～46頁1行目

このような自然観を「目的論的自然観」と呼ぶ。これは科学的に実証不可能。原理は全く科学的に解明していない。

そもそもこれは哲学的な考察であって、科学の範疇<sup>はんちゆう</sup>ではない。

45頁13～14行目

「陽子を中心として電子が回転して原子を形成する」

→量子論によると、電子は回転していない。電子は同時に原子核の周囲の決められた軌道上に漂っている。他の言い方をすれば、電子は様々な場所にある状態が共存しているのである。これを「状態の共存」と呼ぶ。

文鮮明氏は「科学も数学も勉強して知って」いるのではなかったのか？ 量子論は『原理講論』が出版される前に言われていたので、文氏が本当に科学を勉強していたら、知っているはず。

46頁3～4行目

「この存在は、まさしく、あらゆる存在の第一原因として、これらすべてのものの主体となる性相と形状とを備えていなければならない」

→この結論は、あらゆる存在の第一原因が被造世界の内にのみ存在しているという前提に立って考えた結果、出て来たものである。しかし、この前提が正しいことを原理は何も論証できていない。つまり、この結論は論理が飛躍している。

46頁4～5行目

「存在界のこのような第一原因を我々は神と呼び」

→この第一原因を神だというなら、原理の神は汎神論的な神である。つまり、原理の神は被造世界を超越しておらず、被造世界と本質的に同一な存在だということになる。

46頁5行目

「この主体的な性相と形状のことを、神の本性相と本形状という」

→『原理講論』42頁3行目を見ると、神は無形だと書いてある。ならば、神の体である神の本形状も無形であるはず。しかし、『原理講論』44頁14～15行目を読むと、形状というのは有形だと書いてある。よって、矛盾している。いったい、神の本形状は無形なのか、有形なのか？ また、神の本形状とは具体的にどのようなものなのか？ 原理は何も説明できていない。

ちなみに「統一思想」では神の本形状を「前エネルギー」だと言っているが、神と被造物が本質的に同一なら、神の体は実質的には「エネルギー体」であろう。つまり、神の本形状を「前エネルギー」と呼ぶのは、被造物をエネルギーによって創造する前段階だから、表現上そう呼ぶだけのことで、実質的にはエネルギーそのものと考えられる。

話がずれるが、統一思想の内容について触れたので、この「統一思想」について、少し述べておく。

統一教会の公式な見解によると、「統一思想」とは、文鮮明氏の思想であり、その内容は、『統一思想要綱』という本に整理されて出版されている（統一思想研究院著『統一思想要綱（頭翼思想）』初版，光言社，1993年，「まえがき」）。そして、文氏が解明したという統一原理の一部が記された『原理講論』と、この『統一思想要綱』の内容には、例えば万有原力に関する説明を比較すると、矛盾があることがわかる。『原理講論』では、万有原力は神とは別に、独立して永遠に自存する力だとししか理解できないが、『統一思想要綱』では、神から直接発せられる力の延長の力だと理解できる。これは、どう考えてもおかしい。

批判力に乏しい一般人を騙すには『原理講論』で充分だが、知識人相手では簡単に否定されてしまう。そのために、もっと詳細で難解な用語を用いて解説した本として、また、絶対的真理であること

を否定されるのを避けるために、単に「思想」という名前をつけて、『原理講論』とは別に『統一思想要綱』という本を知識人向けに出版しているのではないかと私は思う。

46頁5～7行目

「我々は、今、パウロが論証したように、あらゆる被造物に共通に見られる事実を追求することによって、神は本性相と本形状の二性相の中和的主体として、すべての存在界の第一原因であられることが理解できるようになった。」

→これは、自然界に見られる共通の事実を探ることによって、その第一原因としての神を考えるという、神の存在証明に関するア・ポステリオリな論証である。しかし前述したように、この論法では神の存在の必然性は導けない。また、これまで述べてきたように、このような神が存在することを論証できてもいない。よって、原理による神の存在証明は、論理的にも実質的にも完全に失敗に終わった。

また、パウロは原理が主張するような神の存在を論証してなどいない。パウロがローマ1:20で言っているのは、世界の創造主としての神の存在は、自然界や良心といった被造物を通して、全ての人に明確に知らされているので、その神を拒否する人には弁解の余地がない、ということである。それ以上の神に関すること（神が三位一体である等々）は、被造物を観察するだけではわからないというのが聖書の主張である。

46頁6～7行目

「神は本性相と本形状の二性相の中和的主体」

→もし本当に中和しているのなら、本性相と本形状の本質は同一でなければならない。しかし、科学的に実証不可能。これは、「人間は、あくまでも論理的であると同時に、実証的なもの、すなわち科

学的なものでなければ、真に認識するということはできないので、結局、宗教も科学的なものでない限り、よく知ってそれから信ずるということが不可能となり、宗教の目的を達成することはできない」（『原理講論』29頁10～13行目）という主張と矛盾する。つまり、原理の説明は科学的ではないので、創造原理を信ずることが不可能となり、統一教会の目的も達成できないことを認めることになる。原理は自己破滅に陥っている。

46頁8～9行目

「既に述べたように、存在するものはいかなるものでも、陽性と陰性の二性性相の相対的關係によって存在するという事実が明らかにされた。」

→既に述べたように、このような事実は存在しないことが明らかになった。

46頁9～10行目

「それゆえに、森羅万象の第一原因としていまし給う神も、また、陽性と陰性の二性性相の相対的關係によって存在せざるを得ないということは、当然の結論だといわなければならない。」

→そのような必然性はどこからも導かれない。完全に論理が飛躍している。

46頁10～11行目

創世記1章27節における「神のかたちに人を創造した」とは、神のように、知性・感情・意志・霊性を持った存在として人間を創造した、という意味。

46頁15行目

「本来、神の本性相と本形状は、各々本陽性と本陰性の相対的關係をもって現象化する」

→その根拠は？ この箇所も意味不明。

46頁15～16行目

「本来、神の本性相と本形状は、各々本陽性と本陰性の相対的關係をもって現象化するので、神の本陽性と本陰性は、各々本性相と本形状の属性である。」

→各々本陽性と本陰性の相対的關係をもって、本性相と本形状が現象化するなら、神の各々の本陽性と本陰性は、本性相と本形状の「本質」である。この点も、『原理講論』は明らかに間違っている。

46頁17行目～47頁1行目

「陽性と陰性とは、主体と対象との相対的關係をもっている」

→ワオキツネザルでは雌が雄より優位にあるので、雌が主体になり、雄が対象になる。よって、やはりこの原理は否定される。

47頁1～2行目

エバがアダムの対象として創造されたのではないことは既に述べたとおり。

47頁7行目

「神が、被造世界の中心である人間を、神の形状である（創1:27）と言われた理由もここにある。」

→もし神の形状として人間が創造されたのなら、神と人間は本質的に同一な存在となる。これでは神は被造世界を超越できないので、神の全能性は否定される。しかし原理では、神は全能であるとも主張している。明らかに矛盾である。



#### 47頁7～9行目

「被造世界が創造される前には、神は性相的な男性格主体としてのみおられたので、形状的な女性格対象として、被造世界を創造せざるを得なかったのである。」

→被造世界が創造される前は、原理の神はひとりぼっちであり、相対的關係を結ぶ相手は何も存在していないのだから、「性相的」でもなく「男性格」でもなく「主体」でもない。

そして、これもまた「論点先取の虚偽」である。総序でも「論点先取の虚偽」という言葉を使ったが、改めてその意味を引用しておく。新村出編『広辞苑』第七版（岩波書店、2018年）には次のように書いてある。「証明を必要とする命題を前提とする誤謬。循環論法、先決問題要求の虚偽などはこれに属する。」

#### 47頁9～10行目

「コリント I 11章7節に、『男は、神のかたちであり栄光である』と記録されている聖句は、正にこのような原理を立証している」

→この聖句の「かたち」は、原文では「エイコーン εἰκῶν」であり、このギリシャ語も形状のことを意味しているのではない。もし形状だと言いたければ、例えば「エイドス εἶδος」というギリシャ語が使われていると思うが、原文はそうなっていない。

#### 47頁10～11行目

「このように、神は性相的な男性格主体であられるので、我々は神を父と呼んで、その格位を表示するのである。」

→この箇所の「我々」は、統一原理を受け容れている人だけを意味する。正統的なキリスト教では、イエスを遣わされた神に対しては、権威ある存在として、また、力強く子を守る存在として「父」と呼

んでいる。当然のことながら，神に性別などない。

47頁11～13行目

「上述した内容を要約すれば，神は本性相と本形状の二性性相の中和的主体であると同時に，本性相的男性と本形状的な女性との二性性相の中和的主体としておられ，被造世界に対しては，性相的な男性格主体としていまし給うという事実を知ることができる。」

→今まで述べてきたことから，このような事実は存在しないことがはっきりとわかった。「神の二性性相」という原理は論理を無視したでっち上げにすぎないのである。

ここまでかなり詳しく説明してきたが，以上の内容は原理の根本的な間違いを理解する上で非常に重要なので，よく読んで理解していただきたい。あまり細かいことにはこだわらずに，重要な箇所が理解できればそれでよい。

これまでの内容を要約すると，原理は神の存在証明に失敗しており，神の神性に関しても何一つとして解明できていない，ということである。

## (二) 神と被造世界との関係

47頁15行目～48頁1行目

「被造物はすべて，無形の主体としていまし給う神の二性性相に似た実体に分立された，神の実体対象である」

→神自身の二性性相から「分立された」実体対象として被造物が創造されたのなら，「有から有」の創造になり，神と被造物は本質的に同一になる。当然，神の全能性は否定され，絶対不変性（『原理講論』241頁7行目）も否定される。これは汎神論的な神であり，も

う一方で原理が主張する有神論的な神と矛盾する。よって、有神論的な神を主張するのなら、「神は神自身の二性性相から分立された実体対象として被造物を創造した」という原理は否定されなければならない。

汎神論的な神観を図示すると、下図のようになる。

有（神自身）→有（被造物）

ちなみに、正統的なキリスト教神学では「無から有」の創造なので、神は常に絶対不変である。また、全能（創世記17章1節など）でもある。そして、神は全てにおいて完全な存在であり、被造物は神より劣る不完全な存在として創造された（詩篇8篇5節）ので、神と被造物は本質的に異なる（異質である）。このような有神論的な神観を図示すると、下図のようになる。

神 / 無（神自身ではない）→有（被造物）

48頁15行目～49頁9行目

<sup>えきがく</sup>易学でいう「<sup>ことば</sup>み言」と、ヨハネの福音書1章1～3節の「ことば」は意味が全然違う。にもかかわらず、原理では同じものとして扱われている。どう考えてもおかしい。

ヨハネ1:1～18はひとまとまりになっていて、この聖書箇所から次のような三段論法が導かれる。(1) ことばは神である。(2) ことばとは、イエス・キリストのことである。(3) ゆえに、イエス・キリストは神である。

また、次のことも言える。(4) イエス・キリストは人となられた。(5) ゆえに、イエス・キリストは神であり人でもある。これが正

統的なキリスト教神学におけるキリスト論（キリストの二性一人格論）である。

49頁14行目

「易学による東洋哲学の根本も、結局、創造原理によってのみ解明せられる」

→これは易学<sup>えきがく</sup>が正しいことを前提にしているが、易学の理論は、「有から有」の創造なので、汎神論的である。一方、原理は有神論<sup>しゅう</sup>的な神の存在も主張している。これらは矛盾し、両者を止揚・統一することは不可能だから、易学を正しいとする前提も否定される。当然、創造原理によっては何も解明されない。

これまでの内容を要約すると、原理は、神と被造世界の関係を何一つとして解明できていない、ということである。

## 第二節 万有原力と授受作用および四位基台

### （一）万有原力

50頁3～7行目

「神はあらゆる存在の創造主として、時間と空間を超越して、永遠に自存する絶対者である（出エ3：14）。それゆえ、黙示録22章13節には、『わたしはアルパであり、オメガである。最初の者であり、最後の者である。初めてあり、終りである』と記録されているのである。したがって、神がこのような存在としておられるための根本的な力も、永遠に自存する絶対的なものであり、同時にこれはまた、被造物が存在するためのすべての力を発生せしめる力の根本でもある。このようなすべての力の根本にある力を、我々は万有原力と呼

ぶ。」

→この説明によると、万有原力は「永遠に自存する絶対的なもの」なのだから、神から独立した、神とは別の、永遠なる絶対的な存在ということになる。しかし、神はあらゆる存在の創造主なのだから、永遠に自存するのも神だけであるはず。よって、『原理講論』の言う万有原力の存在は否定された。

次に、『統一思想要綱』により、万有原力についてもっと詳しく調べてみる。すると、次の図のように、万有原力は神自身から数珠つなぎになっていることがわかる。

神→作用エネルギー（原力）→万有原力

つまり、万有原力は神から発せられる力（原力）の延長の力（=神の力そのもの）だということである。すると、次の2つの証明により、その仮定は否定される。

(1) 万有原力を物理的な力であると仮定してみる。もし万有原力が神から発せられる力の延長の力であるとすると、全ての人間は万有原力により何らかの存在と授受作用をして生存・行動しているのだから、神は全ての人間のあらゆる行為に対して常に力を与えていることになる。また、人間に自由意志があるなら、心の発露であるその自由意志（『原理講論』125頁7行目）を働かせる力の源は、脳を働かせる力の源でもあるから、結局、万有原力となり、また、自由行動を起こすための力の源も、万有原力になる。ならば、人間が非原理的行為をしたときの主原因は、人間の自由意志や自由行動にあるが、その自由意志や自由行動に力を与えていた万有原力も、人間の非原理的行為の副原因と見なされる。なぜなら、万有原力なしでは、人間には自由意志も自由行動もあり得ないから。つまり、

人間の非原理的行為によって罪に定められるのは、人間だけではなく、神も、万有原力を人間に与えていた以上、罪に定められなければならない。しかし神は完全な善の主体なのだから、神が罪に定められることなどあり得ない。これは矛盾である。よって、万有原力が物理的な力であるとする、万有原力は神から発せられる力の延長の力ではないことが証明された。

(2) 万有原力を心情的な力であると仮定してみる。すると、次のような主張が考えられる。つまり、「神は愛の主体だから、どんな存在に対しても、常に神の愛の力としての万有原力を与えているのだ」。しかし人間が非原理的な愛の力をもって墮落するためには、その非原理的な愛の力を強くするための力として、万有原力が必要になるはず。なぜなら、万有原力は人間が授受作用するための全ての力の根本なのだから。よって、強い非原理的な愛の力で墮落した場合、それだけ強い万有原力が必要になる。その力の源が神なら、神が墮落行為を促したと言えるだろう。しかしそんな結論は原理では受け容れられない。(『原理講論』墮落論第六節を参照せよ。) ゆえに、万有原力が心情的な力であるとする、万有原力は神から発せられる力の延長の力ではないことが証明された。

以上の2つのことから、万有原力は心情的な力であろうと、物理的な力であろうと、神から発せられる力の延長の力ではないことが証明された。つまり、『統一思想要綱』の言う万有原力の存在も否定された。

万有原力は神から独立した存在ではないことも前述したとおりであるから、最終的な結論として、万有原力は存在しないと言える。これがまさに「万有原力の非存在証明」である。

先ほど、万有原力が心情的な力であると仮定してみたが、これを

次のように考えることもできる。万有原力というのは、結局、神の愛の心情と同じで、互いに愛し合う力であるはず。すると天使長の心情の力の源も万有原力なのだから、天使長は、たとえ愛の減少感を感じたとしても、神の創造目的にかなうようにエバを愛したはずであり、誘惑などするはずがない。しかしこの結論は墮落論と矛盾する。つまり、万有原力が心情的な力として存在するなら、天使長はエバを誘惑できないはずである。しかし墮落論や文鮮明氏は、天使長がエバを誘惑したと言っているのだから、必然的に、心情的な力としての万有原力の存在は否定される。

上記の私の主張に対し、「非原理的な愛の力で墮落したのは人間が責任分担を果たせなかったからであり、神は人間の責任分担に干渉できないという原理により、神が罪に定められることはない」という反論が考えられる。しかし、人間が責任分担を果たすには、必ず何かと授受作用をする必要がある。授受作用をするには、神の力（原力）の延長の力としての万有原力が必要になる。つまり、人間が責任分担を果たすためには、どうしても万有原力が必要なのである。ということは、結局、人間が責任分担を果たすかどうかは、人間だけの問題ではなく、神の問題でもある。神が自らの責任分担として、天使長ルーシエルに誘惑されたエバに、墮落するほどの強い万有原力を与えないようにしていれば、人間は墮落せずに済んだはず。よって、人間の墮落は、神が自らの責任分担を果たさなかったことによって起こったことになる。ゆえに、上記の反論は成立しない。（ちなみに上記の反論でも神の全能性を否定しているので、神が全能であるという原理や文鮮明氏の主張と矛盾する。）

この「万有原力の非存在証明」により、もし統一思想の神観が正しければ、墮落論は成り立たないことになる。当然、復帰原理も無

意味になる。一方、墮落論を成り立たせようとするなら、どうしても有神論的な神観でなければならないが、そうすると万有原力の存在は否定されるので、結果として創造原理は成立しなくなる。創造原理が成立しないなら、墮落論も成立せず、復帰原理も成立しない。つまり、既にこの時点で、墮落論も復帰原理も成立しないことが証明されてしまったのである。結局、統一原理は完全に自己矛盾していることが「あからさまに」わかる。

『原理講論』では、万有原力に関する説明があまりにも不十分である。万有原力と神との関係についても、ほとんど何も説明されていない。

もし万有原力が物理的な力であるなら、万有原力を表す方程式があるはずである。しかし、そんな方程式があることなど、聞いたこともない。原理は科学的でなければならないはずなのに、万有原力に関しても、科学的な解明は全面的に欠如している。

また、あらゆる存在が二性性相になっているのなら、「永遠に自存する」万有原力も二性性相になっていなければならない。しかしなぜかそのことは何も書かれていない。

これまでの内容を要約すると、『原理講論』や『統一思想要綱』に書いてある万有原力というものは存在しない、ということである。

## (二) 授受作用

50頁9行目～51頁1行目

「あらゆる存在をつくっている主体と対象とが、万有原力により、相対基準を造成して、良く授け良く受ければ、ここにおいて、その存在のためのすべての力、すなわち、生存と繁殖と作用などのため



の力を発生するのである。このような過程を通して、力を発生せしめる作用のことを授受作用という。」

→既に述べたように、万有原力の存在は否定されたので、万有原力の存在を前提した統一原理の授受作用も必然的に否定される。

これまで述べてきた内容を基にすれば、創造原理の全てが否定される。つまり、墮落論と復帰原理が依って立つ土台が完全に否定されたので、結局、統一原理は人生と宇宙に関する根本問題を何一つとして解明できていないことが証明された。

ゆえに、これ以降は気づいた箇所だけを説明する。

52頁11～13行目

「古今東西を問わず、いくら悪い人間であっても、正しいことのために生きようとするその良心の力だけは、はっきりとその内部で作用している。このような力は、だれも遮ることができないものであって、自分でも知らない間に強力な作用をなすものであるから、悪を行うときには、直ちに良心の呵責かしやくを受けるようになるのである。」

→ここでの「良心」や「悪」という言葉は原理に沿った意味ではなく、一般的に使われている意味で解釈するのが妥当だと思われる。しかし現実には、一般的に多くの人が悪だと認めるような行為（例えばDV）をしても、良心の呵責を受けるところか、満足感を覚える人もいるようだ。よって、「悪を行うときには、直ちに良心の呵責を受けるようになる」とは言えない。

52頁17行目～53頁1行目

「我々は、この良心の主体を神と呼ぶ」

→「『原理講論』創造原理の第六節（三）（3）生心と肉心との関係から見た人間の心」から、良心の主体となるのは本心であろう。良

心は創造本然のものと異なる善を指向することができるのだから、良心の主体は必ずしも神とは限らない。

53頁7～8行目

「だれでも彼（イエス）に信仰をささげる者は滅びることのない永遠の命を得るのである（ヨハネ3:16）。」

→イエスが神であり人でもあると信じなければ、永遠のいのちは得られない、つまり、救われない。

### （三）正分合作用による三対象目的を完成した四位基台

54頁4～7行目

既に万有原力の存在も授受作用も否定されたので、万有原力や授受作用を前提する正分合作用も必然的に否定される。

54頁9～11行目

上記と同様に、正分合作用を前提する三対象目的も必然的に否定される。

55頁1～2行目

上記と同様に、正分合作用と三対象目的を前提する四位基台も必然的に否定される。

55頁3～6行目

既に四位基台も三対象目的も正分合作用も否定されたので、神は四数の根本であり、三数の根本であり、三段階原則の根本であり、十二数の根本である、という『原理講論』の論証は全て否定される。

56頁10～17行目

太陽系の全ての惑星の軌道は楕円である（ケプラーの第1法則）。円ではない。

59頁7～10行目

存在目的は、観察自体によっては知り得ない。『原理講論』の論理は飛躍していて、必然性を導かない。

59頁12～13行目

「宇宙は何のためにあるのであり、その中心は何であるのだろうか。それは、まさしく人間である。ゆえに、神は人間を創造されたのち、被造世界を主管せよ（創1:28）と言われた。」

→宇宙は観測可能な領域（宇宙誕生から現在までの間に光が届いている領域）をこえて、はるか先まで広がっていると考えられている。そのような宇宙を、どうやって人間が主管するというのか？ 単なる誇大妄想にすぎない。

そもそも、創世記1:28で神は「地を従えよ。海の魚、空の鳥、地の上を這うすべての生き物を支配せよ」と言われたのであって、「宇宙を主管せよ」などとは言っておられない。

59頁13～14行目

「もしも、被造世界に人間が存在しないならば、その被造世界は、まるで、見物者のいない博物館のようなものになってしまう。」

→博物館に陳列されているものは、互いのために関係を持ったりしていないので、このたとえは無意味である。

60頁8～9行目

「物質から形成された人間の生理的機能が、心の知情意に完全に共

鳴するのは、物質もやはり、知情意に共鳴できる要素をもっているという事実を立証する」

→論理が飛躍している。そもそも、物質が知情意に共鳴できる要素をもっているというのは、どのようにして事実だと証明されるのか？ ここでも科学的な解明が欠如している。

61頁1～6行目

アダムやエバが成長し完成するという話は、聖書にはない。これは原理の勝手な作り話である。

61頁16行目～62頁1行目

ローマ8:19～22の「神の子どもたち」とは、原理の言う「創造本性を復帰した人間たち」のことではなく、栄光のからだ（復活のからだ）を持った信者たちのこと。

#### （四）神の遍在性

神が遍在であるためには、神は絶対者でなければならず、被造物の相対的存在であってはならない。被造物の相対的存在でありながら遍在でもあるというのは、単なる論理矛盾にすぎない。

#### （五）生理体の繁殖

生理体の繁殖も授受作用を前提するが、授受作用は既に否定されたので、生理体の繁殖に関する原理の説明も否定される。

#### （六）すべての存在が二性性相になっている理由

63頁5～7行目

「いかなるものでも、存在するためには、必ずある力を必要とするようになるが、その力は授受作用によってのみ起こる。けれども、いかなるものも単独で授受することはできないので、それが存在するための力を起こすには、必ず授受作用ができる主体と対象との二性性相として存在しなければならない。」

→ここの記述を時系列に従って整理すると、次のようになる。

主体・対象→授受作用→存在のための力→存在できる

ここでの主体と対象は、それぞれ別々の存在と考えなければならない。例えば、創造原理によると、原子が存在するためには、その内部に陽子（主体）と電子（対象）という別々の存在が必要になる。そして、陽子自身も、その存在のためには、その内部に別々の存在としての主体と対象（具体的にはそれぞれ素粒子）が必要になる。そして、その素粒子が存在するためには、その内部に別々の存在として主体と対象になる2種類のエネルギーが存在している必要がある。そして、（どちらでも良いが）そのエネルギーが存在するためには、別々の存在としての主体と対象、結局は、神の本性相と本形状が必要になるというのが、創造原理の言わんとする所である。

さて、「いかなるものでも、存在するためには、必ずある力を必要とする」以上、神の本性相や本形状も、各々その存在のために、別々の存在としての主体と対象が、本性相や本形状の内部に必要なはず。以下、無限後退。この無限後退を解決するには、第一原因としての神が、二性性相という人間が作り出した概念に束縛されない、全能なる神（有神論的な神）でなければならない。

よって、『原理講論』のこの記述を肯定するのなら、被造世界を超越できない汎神論的な神の存在は否定される。ということは、つ

まり、創造原理の主張する「神の二性性相」も否定される。(本書50～51頁も参照せよ。) これは矛盾である。統一原理は、完全に自己矛盾している。

63頁8行目

「直線上の運動においてはいつかは終わりがこななければならない」  
→なぜ終わりがこななければならないのか？ 球体の上を直線運動することで永遠性をもつことができる。よって、回転しなければならないという結論(9～10行目)は、論理的に飛躍している。

63頁11～12行目

被造物が時間と周期的な輪廻りんねとによって、永遠性を維持しているという原理の結論は、論理的に飛躍している。「周期的な輪廻」とは具体的に何なのか？ 説明が何もない以上、論証できていない。

### 第三節 創造目的

#### (一) 被造世界を創造された目的

64頁3～4行目

「被造物の創造が終わるごとに、神はそれを見て良しとされた、と記録されている創世記のみ言ことばを見れば(創1:4～31)、神は自ら創造された被造物が、善の対象となることを願われたことが分かる。」  
→創世記1:4～31からわかるのは、神が創造された被造物は、すばらしいできばえであったという意味。「良し」という意味のヘブル語「トーヴ טוב」に「善の対象となることを願われた」という意味はない。よって、これ以降の原理の説明は成り立たない。

神は孤独で寂しかったから万物を創造されたのではない。三位一体の神（父・子・聖霊）は、互いに完全に愛し合っておられる。

聖書によると、神は自己充足の神なので、被造物を創造する必要はなかった（使徒の働き17章25節）。ところがあるとき（まだ神しかおられなかったとき）、神はご自分の王国を作ろうと決心された。（詩篇10:16, 29:10, エレミヤ10:10, 第一テモテ1:17などから、神は永遠の王であることがわかる。）王国には王の他に、臣民が必要である。そこで、神はまず天使を臣民として創造された。次に、人間が住む場所を創造され、最後に臣民として人間が創造された（コロサイ1:16, 黙示録4:11など）。神が万物を創造された目的は、神の栄光を現すためである（黙示録4:11, 詩篇86:9~10, ローマ11:36, 黙示録15:3~4など）。

聖書には神の国での「喜び」（ローマ14:17）という概念が出て来るが、このような「喜び」は原理が言うような「喜び」（『原理講論』創造原理の第三節（二）神の喜びのための善の対象）とは区別されるものである。つまり、「三位一体の神と共にある愛の中における喜び」である。統一原理においても、「愛の中における喜び」は含まれているが、原理の言う「喜び」の本質は、「対象が完全に自分の思い通りになる喜び」である。この点で、聖書と統一原理の「喜び」の意味は区別されなければならない。

ちなみに、原理の言う「喜び」が（一般的な意味での）善なるものであるという必然性はない。サド・マゾ的な喜びもある。（性的な意味ではない。マゾヒズムについては、フロイトの言う「道徳的マゾヒズム」（小此木啓吾著『日本人の阿閼世コンプレックス』7版、中央公論社、1995年、193頁）のことを示す。つまり、内面的な禁止を厳しくすることで正当な自己主張をせず、過度に良心的で、他者よりも自分を責め、他者の喜びを優先させ、自分自身は我慢し、

逆にそれを喜ぶ心理傾向のことである。サディズムについても同様に考えられる。実際、皆の前で、ある特定の人物の失敗や恥ずかしい体験を暴露して楽しむことがあるが、そういう心性のことを、ここでのサディズムの意味だと解釈して欲しい。) いや、そのような喜びを（原理における）善でないという理由は原理から導けない。なぜなら、原理は具体的な喜びの内容については、何も明らかにしていないからである。つまり、サド・マゾ的な喜びも、神の喜びの内に入ると考えても、原理的には全く差し支えない。

64頁7～8行目

「そこで、神はアダムとエバを創造なさったのち、生育せよ、繁殖せよ、万物世界を主管せよ（創1:28）と言われたのである。この三大祝福のみ言に従って」

→原理では、創世記1:28の最初の「生めよ」という言葉を「生育せよ」という意味だと主張している。しかし、「生めよ」と訳されているヘブル語「ペルー פָּרָה」（パラー פָּרָה のパアル態命令形男性複数）には「生育せよ」という意味はない。日本統一教会のメンバーの中には、「英語訳聖書のBe fruitfulには『生育せよ』という意味がある」と言って正当化しようとする者もいるが、Be fruitfulという英語には「生育せよ」という意味はない。そもそも、英語訳聖書を持ち出して正当化すること自体おかしい。文献の本来の意味を知るには原典にあたらなければならない。「生育せよ」という原理の主張は、「三大祝福」を正当化するための、単なるこじつけにすぎない。つまり、原理の言う「三大祝福」には根拠がない。

創世記1:28のように、同じ意味の内容を別の言葉で表現する方法は、聖書の中によく出て来るものである。

（二）神の喜びのための善の対象



65頁14～15行目

「自己の性相と形状のとおりに展開された対象があって、それからくる刺激によって自体の性相と形状とを相対的に感ずるとき、ここに初めて喜びが生ずる」

→このような喜びは、自分の思い通りになる喜びであり、その限りにすぎない。実際の喜びというのは、もっと広い概念である。

神の第一祝福、第二祝福、第三祝福は、いずれも四位基台を前提している。しかし、四位基台は既に否定されたので、神の三大祝福も、原理で言われる所の創造目的も必然的に否定される。

67頁17行目

「人間がいかなる動物の声でも出すことができる」

→イエコウモリやキクガシラコウモリなどの小翼手類は、超音波を使って、母子間での個体識別を含めたコミュニケーションをしている。しかし人間は超音波を発せられない。また、アフリカゾウは人間には聞こえない超低周波音を使って会話をしているが、人間はこの超低周波音を発することができない。よって、誤り。(一般に人が聞くことができる音の周波数範囲は20Hz～20kHzとされており、周波数20Hz以下の音波を超低周波音という。)

68頁1行目

「人間はいかなる被造物の形や線の美もみな備えている」

→人間は魚類の鱗うろこも尾鰭おびれも、さらに鳥類の羽の形をも備えていない。よって、誤り。

68頁5行目

「植物の葉はその容貌ようぼうや機能から見て、人間の肺に該当する」  
→松の葉の容貌が人間の肺に類似しているとはとても思えない。

68頁6行目

「植物の幹と枝は人間の心臓に該当する」  
→心臓ではなく、手足などであろう。幹と枝を持つ植物には人間の心臓に該当する器官はない。

68頁6～7行目

「植物の根は人間の胃腸に該当するもので、栄養素を摂取する」  
→体外から栄養素を摂取するのは人間では口である。胃腸は栄養素を吸収する器官。

68頁10～12行目

「地球には植物に覆われた地殻があり、地層の中には地下泉があつて、その下に岩層に覆われた熔岩層があるが、これは、ちょうど、産毛で覆われた皮膚があつて、筋肉の中には血管があり、その下には骨格と、骨格に覆われた骨髄がある人間の構造とよく似ている。」  
→地球には熔岩層の下に、核が存在する。

69頁10～12行目

「天国においては、神の命令が人類の真の父母を通して、すべての子女たちに伝達されることにより、みな一つの目的に向かって動じ静ずるようになるのである。」  
→これは全体主義と呼べる。また、心理的には自他の区別がないような状態になり、全ての人間がこんぜん渾然一体とした心情を共有することを意味する。このときの精神状態は、まるで酔っぱらったような感じであろう。感情面が肥大化しすぎて、理性は退化していくであろう

う。そして根本的に誰もが同じ価値観を持つようになるので、現在の我々の社会における多様な価値観は存在しなくなる。原理における天国とは、このようなものだと思う。

#### 第四節 創造本然の価値

##### (一) 創造本然の価値の決定とその価値の基準

70頁3～5行目

「ある対象がもっている価値は、その対象が存在する目的と、それに対する人間主体の欲求との相対的關係によって決定されるというのが、我々の今まで考えてきた一般的な価値観であった。」

→原理では存在論的に考えているが、対象そのものが人間にとって都合の良い価値を備えているのではない。対象自体はただ存在するだけであり、対象に対する価値判断（価値についての判断）は人間自身の認識作用によって行われるのである。対象の存在目的も、対象自体が持っているのではなく、人間によってそのように認識されるだけのことである。従って、従来の価値観として『原理講論』に書かれていることは誤りである。

70頁9～10行目

「創造本然の価値は、ある対象と人間主体とが、神を中心として、創造本然の四位基台を完成するときに決定される」

→四位基台は既に否定されたので、必然的に創造本然の価値の決定方法も否定される。

70頁11行目

「この価値の基準も絶対者なる神である」

→このことから、創造本然の人間においては、誰もが同じ価値基準によって判断をすることになるのだから、個々人による異なる価値判断は完全になくなり、全ての人間が同じ価値判断をすることになる。つまり、創造本然の人間というのは、ただ神の実体的な複製にすぎない。

そもそも価値判断というのは、対象に対する情的な重みづけのことである。人間は常に周囲の環境に対して、このような情的な重みづけをすることで、今何をすべきか、何をすべきでないか等の判断をしている。この判断が、誰もが同じになるということは、いくら外見が異なっても、心の働きは誰もが完全に同じになることを意味する。つまり、内的には完全に神の複製にすぎないのであり、精神面における個性というものは完全に消滅するのである。よって、神の第一祝福における「個性完成」というのは全くのでたらめであり、本当の原理は「個性消滅」である。

「神は無限の存在なのだから、その価値基準も無限に存在するので、個性が消滅することはない」という反論が考えられる。しかし、そうすると、個々人の価値判断が異なる場合があり、彼らの価値判断は絶対的（この「絶対的」というのは、個々人の心的現実としての意味ではない）なのだから、互いの価値判断を認めることはできないはずである。しかし争いあうことは、創造本然の人間なら神の悲しむ心情を充分理解しているので、あり得ない。ならば、彼らの価値判断は絶対的ではなく、相対的となる。これは原理の主張と矛盾する。よって、この反論は成立しない。

もっとも、現実には完全なる「個性消滅」などあり得ない。よって、原理の第一祝福はただの虚構にすぎないことが証明された。

71頁10～11行目

「今まで、ある対象の価値が絶対的なものとならず、相対的であっ

たのは」

→相対的な視点から見ているから、相対的になるだけである。本人の心的現実においては、価値は絶対的となる。つまり、相対的か絶対的かというのは、単なる視点の違いにすぎない。『原理講論』の記述には、この他にも（例えば予定論において）視点の混同が見られる。

### （三）愛と美，善と悪，義と不義

愛とは具体的にどんなものか，美とは具体的にどんなものか，ほとんど何も説明されていない。よって，喜びと同様に，愛や美についてもサド・マゾ的なものが含まれていてもおかしくない。

愛と美の定義も四位基台を前提している以上，必然的に否定される。善と悪の定義も四位基台を前提している以上，必然的に否定される。そして，善と悪の定義において四位基台を前提している以上，義と不義の定義も必然的に否定される。

結局，統一原理によっては，愛について，美について，善について，悪について，義について，不義について，何一つとしてわからない。何も解明できていない。これが事実である。

## 第五節 被造世界の創造過程とその成長期間

### （一）被造世界の創造過程

75頁3～8行目

「創世記1章を見れば…我々は被造世界の創造が終わるまで，六日

という時間的な過程があったということを知るのである。ここにおいて、我々は、聖書に記録された創造の過程が、今日、科学者たちの研究による宇宙の生成過程とほぼ一致するという事実を知ることができる。」

75頁12行目～76頁1行目

「今から数千年前に記録されたこの聖書の天地創造過程が、今日の科学者たちの研究したものとはほぼ一致しているという事実」

→そのような事実はないというのが事実。

聖書を一貫して字義通りに解釈すれば、世界は六日間で創造されたことになり、進化論は否定される。残念ながら、この解釈は現代の多くの科学者たちには受け容れられていない。「ほぼ一致する」のではなく、「ほぼ一致しない」のである。原理はありもしない事実をでっち上げている。

76頁1～2行目

「我々は、この記録が神の啓示であることは間違いないということを確認することができる」

→でっち上げられた事実から導かれたこの結論が、論理的に正しいわけがない。何も論証できていない。

76頁3～4行目

「宇宙は時間性を離れて突然に生成されたものではなく、それが生成されるまでには、相当な時間を要したという事実」

→既に述べたように、これが事実だということを原理は証明できていない。

ちなみに、哲学的に深く考えてみると、バートランド・ラッセルの『心の分析』にあるように、5分前に世界が創造されたかもしれないという仮説を立てても、人間の理性はその仮説を反駁<sup>はんぱく</sup>できない。

結局、被造世界の創造過程に関しても、何も解明できていない。  
原理は「事実」という言葉を繰り返し何度も使うことで、でっち上げをごり押ししているだけである。

## (二) 被造物の成長期間

76頁11～14行目

「神は初めの日の創造が終わると、『夕となり、また朝となった。第一日である』(創1:5)と言われた。夕から夜が過ぎて、次の日の朝になれば、第二日であるにもかかわらず、第一日であると言われたのは…」

→ユダヤ暦では、一日は夕から始まる。これは、創世記1章の記述に由来している。文鮮明氏は、このことを知らなかったようだ。

創世記1章には、被造物が「成長する」とはどこにも書いてない。よって、創世記1章から、被造物は一定の成長期間を経て完成できるように創造されたという結論を導くのは、論理が飛躍している。

77頁4～5行目

「神は絶対者でありながら、相対的な二性性相の中和的存在であられるので、三数的な存在である」

→この論理では、神が三数的な存在であることの理由にはならない。

77頁5行目

「唯一なる神に似た被造物 (創1:27)」

→創世記1:27では、人間のことだけを言っている。よって、「被造物」は不適切。

神が三数的な存在であるとは論証されていないので、被造物の「成長期間がみな三数過程を通じて現れるようになる」という必然性はどこからも導かれない。

77頁10～11行目

「すべての被造物が完成するに当たっても、その成長期間は、蘇生期、長成期、完成期の秩序的三段階を通じてのみ完成するようになる」

→成長期間の秩序的三段階は、正分合作用と四位基台を前提しているが、両方とも既に否定されたので、成長期間が秩序的三段階を通じてのみ完成するという原理も必然的に否定される。

77頁12行目

「自然界は動物と植物と鉱物からなり」

→生物を動物と植物というように二分するのは、少なくとも1960年代以前のものであり、それは肉眼で区別するだけの古い時代の認識である。分子系統学の知見が増えてくるにつれて、現在ではC.R. Woese (1987) のように、生物の世界を古細菌（後生細菌）、真生細菌、真核生物の3上界に区分し、その上でそれぞれの細分を図るのが、系統を正しく反映した分類系であるとされ、おおかたの認める所となっている。もっとも、この分類自体、現在の科学でわかっている範囲内に留まっているので、今後変更される可能性があることは言うまでもない。

78頁7～8行目

「それでは、人間始祖はいつ墮落したのだろうか。彼らは成長期間、すなわち未完成期において墮落したのである。」

→聖書には、アダムとエバに成長期間があったとは書いてないし、



そのように読み取ることも不可能。原理が勝手に言っているだけ。

間接主管圏や直接主管（圏）は，成長期間の三段階や四位基台を前提しているが，両方とも既に否定されたので，やはり必然的に間接主管圏，直接主管（圏）の説明も否定される。

79頁9～10行目

「人間始祖が神のこのみ言を信じて，取って食わずに完成するか，あるいはそのみ言を信ぜずに，取って食べて墮落するかは，神の側に責任があるのではなく，人間自身の責任にかかっていた」  
→万有原力が存在するなら，人間の墮落は神自身の責任でもあることになる。（本書52～55頁を参照せよ。）

81頁4～7行目

「神を中心として，アダムとエバが完成して合性一体化し，家庭的な四位基台を造成することによって，神と心情において一体となり，神を中心としたアダムの意のままに，お互いに愛と美を完全に授受する善の生活をするようになるとき，これを神の直接主管という。」  
→人間に対する神の直接主管というのは，エバがアダムの思い通りに生活することである。これは，アダムとエバが完成してからであるから，アダムとエバは（我々が一般的に言う所の）自由意志を全くなくし，心情的には神の複製となっている。そして神はアダムを通してエバを思い通りにする生活をする。当然，アダムもエバも，そのような生活を心底喜んでいるのである。また，喜びとか，愛とか美について，原理は具体的な内容を明確に説明していないので，前述したように，（ここにおいては特に性的な意味でも）サド・マゾ的な喜びを含むことができる。それが，原理の言う，人間に対する神の直接主管の意味する所である。

81頁7～9行目

「このような人間は、神の心情を体恤し、神のみ旨が完全に分かって、実践するようになるので、あたかも、頭脳が、命令ならざる命令で四肢五体を動かすように、人間も、神の、命令ならざる命令により、神のみ旨のとおり<sup>たいじゅつ</sup>に動いて、創造目的を成し遂げていくようになる」

→このことから、直接主管圏にいる文鮮明氏らに絶対服従することで、人間は善なる存在になることができる、という原理を導き出せる。そしてこのことから、「もし命令に服従しないなら、墮落して地獄へおちるぞ」という脅し文句を導き出せることにもなる。

また、統一原理には、一般的に認められるような具体的な社会的倫理原則は全く存在しないので、神の御旨成就<sup>みむね</sup>のためと称して、嘘をついて経済活動（統一教会用語で「万物復帰」または「F」—これはFund-raisingの略—と呼ぶ）することも、嘘をついて勧誘（伝道）<sup>みむね</sup>することも許されうる。また、同様に考えて、神の御旨成就のため、愛のためと称して、人を殺すことも正当化可能なのである。

（今のところ、メンバーが実際に直接、人を殺したという確かな話は私は聞いていないが、理論上は殺人も正当化可能なのである。『原理講論』後編の第五章メシヤ再降臨準備時代の第四節（二）（2）「天の側とサタン側との区別は何によって決定されるか」を参照せよ。）統一原理を真理だと主張する統一教会は、反社会的な存在である。

## 第六節 人間を中心とする無形実体世界と有形実体世界

### （一）無形実体世界と有形実体世界

82頁3～5行目

「被造世界は、神の二性性相に似た人間を標本として創造されたので、あらゆる存在は、心と体からなる人間の基本形に似ないものは一つもない。したがって、被造世界には、人間の体のような有形実体世界ばかりでなく、その主体たる人間の心のような無形実体世界もまたあるのである。」

→ここで出て来る「無形実体世界」とは心の世界のことなのに、それがいつのまにか「霊界」（『原理講論』84頁3行目）にすり替えられている。心と霊人体は別物なはず。

『原理講論』45頁5行目～46頁1行目には、「いかなる被造物にも、人間における心のように、無形の内的な性相がある」と書いてあることから、心に対応する世界と霊界とはイコールにはならない。

結局、原理は霊界が存在するかどうか、何も論証できていない。霊界に対する科学的な説明も全面的に欠如している。

82頁6～7行目

「霊的五官」「霊的な五官」

→「生理的な五官」（6行目）に対応する言葉として勝手に作られただけ。何の説明もされていない。

83頁1行目

「それゆえに、無形世界は主体の世界であり、有形世界は対象の世界であって」

→神の二性性相は既に否定されたので、ここの記述も否定される。

83頁2～3行目

「有形世界で生活した人間が肉身を脱げば、その霊人体は直ちに、無形世界に行って永住するようになる。」

→なぜ無形世界で永住するようになるのか？ 何も論証がない。

## (二) 被造世界における人間の位置

83頁5～6行目

「被造世界は、神に対する内的な感性を備えていない」

→被造物が知情意の感応体（『原理講論』60頁10～11行目）であるなら、知情意の主体である神（同72頁1行目）に対する内的な感性があると言えるはず。なぜ神に対する内的な感性を備えていないと言うのか？ 矛盾している。

83頁9～11行目

「<sup>へんぼう</sup>変貌山上でのイエスの前に、既に1600余年前に亡くなったモーセと、900余年前に亡くなったエリヤが顕現したとあるが（マタイ17:3, 4）」

→モーセが死んだのは、おそらく紀元前1405年頃。少なくとも1600余年前ではない。

エリヤはそもそも死んでいない。エリヤは死を経ずに、生きたまま（原理用語で言えば、肉身をもったまま）天に上げられた（列王記第二2:1～11）。

84頁2～4行目

「人間は、ちょうど二つの音叉を共鳴させるときの空気のようなものである。人間はこのように、無形世界（靈界）と通ずるよう<sup>おんさ</sup>に創造されたので、あたかも、ラジオやテレビのように、靈界の事実をそのまま反映するようになっている。」

→本当にそうになっているなら、人間の肉身と靈人体が授受作用により合性一体化して、神の実体対象となったときには、人間には（一

般的な意味での) 自由意志はなくなる。

### (三) 肉身と霊人体との相対的關係

85頁～89頁

たったこれだけの説明では、デカルト以来の心身問題を解決したことにはならない。科学的な説明が全くない。

85頁3～4行目

「肉心とは肉体をして生存と繁殖と保護などのための生理的な機能を維持できるように導いてくれる作用部分をいう」

→この記述から、肉心を簡単に言うと「脳」であると考えられる。

85頁4行目

「動物における本能性は、正にそれらの肉心に該当する」

→「本能性」という言葉は、現在の科学では非科学的な古い用語と見なされている。現在の動物行動学では「遺伝的にプログラムされた性質」という表現を使う。

上記では、肉心は「脳」だと考えられたが、この記述からは、肉心は無形の「性質」となる。いったい肉心とは何なのか？

85頁9～12行目

「我々は平素の生活において、肉身が善の行動をしたときには、心がうれしく、悪の行動をしたときには、心が不愉快さを経験するが、これは、その肉身の行動の善悪に従って、それに適応してできる生力要素が、そのまま霊人体へと回っていく証拠である。」

→このような説明では、生力要素の存在の証拠とはならない。単なるつじつま合わせにすぎない。

86頁2～3行目

「霊人体は人間の肉身の主体として創造されたもので、靈感だけで感得され、神と直接通ずることができ、天使や無形世界を主管できる無形実体としての実存体である。霊人体はその肉身と同一の様相であり」

→ここで、霊人体は「無形実体」とある。一方、「霊人体はその肉身と同一の様相」とあるから、霊人体は有形であるはず。これは矛盾である。また、『原理講論』83頁10～11行目からは、霊人体は有形であると思われる。いったい霊人体は無形なのか、有形なのか？

また、ここでの「靈感」とは何なのか？ 正しくは「霊的五官」（『原理講論』82頁6～7行目）ではないのか？

86頁3～4行目

「霊人体は、肉身を脱いだのちには無形世界（霊界）に行って永遠に生存する。」

→既に述べたように、原理はこのことに関しても、何一つ論証できていない。

86頁4～5行目

「人間が永存することを念願するのは、それ自体の内に、このような永存性をもつ霊人体があるからである。」

→人間が永存することを願うのは、この世での快樂を思う存分むさぼりたいからである。

86頁6行目

「この霊人体は生心（主体）と霊体（対象）の二性性相からなっている。」

→「肉身＝肉心＋肉体」（『原理講論』85頁3行目）に対して、「霊人体＝生心＋霊体」となっているが、「生心」ではなく「霊心」ではダメなのか？ 「霊人体」ではなく「霊身」ではダメなのか？

86頁9～10行目

「人間が神霊に接することによって、無限の喜びと新しい力を得て、持病が治っていくなど、その肉身に多くの変化を起こすようになる」  
→『原理講論』128頁10行目によると、「神霊」とは「内的な知」とある。また、同頁には、真理は「外的な知」とあるが、これは「内外」という二性性相を前提した理屈と思われる。

87頁1～2行目

「生霊要素と生力要素とは各々性相的なものと形状的なものとの関係をもっている」  
→関係どころか、存在自体、科学的に実証されていない。

87頁17行目～88頁1行目

「霊人体の善化も、肉身生活の贖罪しよくざいによってのみなされる。罪悪人間を救うために、イエスが肉身をもって地上に降臨された理由はここにある」  
→イエスが人となって来られたのは、旧約聖書のメシア預言を成就するためである。原理の言うような理由では全くない。

88頁10～11行目

「霊人体の繁殖はどこまでも肉身生活による肉身の繁殖に伴ってなされる。」  
→霊人体が具体的にどのように繁殖するのか、科学的な説明が全くない。そもそも霊人体とは科学的にどのようなものか、全く説明さ

れていない。

88頁13～15行目

「生心と肉心との関係は、性相と形状との関係と同じく、それらが神を中心として授受作用をして合性一体化すれば、霊人体と肉身を合性一体化させて、創造目的を指向させる一つの作用体をつくる。これが正に人間の心である。」

→授受作用は既に否定されたので、この心の定義も否定される。

89頁3行目

「善を指向する心の性相的な部分を本心といい、その形状的な部分を良心という。」

→「性相的な本心」「形状的な良心」というのはどういう意味なのか？ ただ「性相的」「形状的」という言葉をくっつけただけだろう。何でもかんでも「性相と形状の相対的關係」にしたがっているが、意味不明であり、頭が混乱するだけである。そして、全く科学的ではない。

89頁5～7行目

「サタンの拘束を受けている生心と肉心が授受作用をして合性一体化すれば、人間をして悪を指向させるまた一つの作用体をつくるが、これを我々は邪心という。」

→上記の心の定義と同様に、この邪心の定義も否定される。

また、生心は「神が臨在される霊人体の中心部分」（『原理講論』86頁6～7行目）なのに、なぜサタンの拘束を受けることができるのか、何も説明がない。

89頁7行目



「人間の本心や良心は、この邪心に反発し」

→これから理解できることは、本心や良心（『原理講論』88頁13行目～89頁3行目より、この2つをまとめて「心」と言う）が存在しながら、「邪心」というもう一つの作用体が存在しうる、ということである。つまり、「心」と「邪心」の2つが同時に存在しうる、というのである。しかし「心」と「邪心」は矛盾する存在である。『原理講論』22頁11～12行目には「存在するものが、いかなるものであっても、それ自体の内部に矛盾性をもつようになれば、破壊されざるを得ない」と書いてあるので、この2つが同時に存在するようになった瞬間に、人間の生心と肉心は破壊される。破壊されるということは、その機能が働かなくなる、ということだろう。ゆえに、そのとき人間は神ともサタンとも関係できなくなり、人間は植物状態になるだろう。しかし、そんなことは事実と反する。従って、人間の心に関する創造原理の説明か、総序における矛盾性に関する説明の、少なくとも一方は誤りである。しかし前述したように、両方とも誤りであるから、結局、人間の心に関する創造原理の説明は全て完全に誤りである。ゆえに、人間の心とは何か、原理は何も解明できていないことになる。

以上の考察から、創造原理としての独自の内容は全て完全に否定された。創造原理というものは、文字通りただのでっち上げにすぎないのである。

創造原理は人生と宇宙に関する根本問題に対して、何一つとして解明できていないことが証明された。

## 第二章 墮落論

91頁

「人間がこの悪を根こそぎ取り除き、人類の罪悪史を清算して、善の歴史を成就するためには」

→原理では、人間の努力によって悪を取り除けるという前提に立っているが、その根拠は何も示されていない。

一方、聖書は、人間の努力によっては悪を取り除けないと教えている。原理は全く聖書に立脚していない。

墮落論は聖書の記録に依存しているので、聖書を正しく解釈できるかどうか重要になる。結論だけ言うと、聖書は一貫して字義通りに解釈するのが正しい。他の解釈法では論理に一貫性がない。

一貫した字義通りの解釈とは、比喻や象徴として解釈するように聖書が要求している場合にのみ、比喻や象徴として解釈し、それ以外は、たとえどんなに信じがたいことでも、全て文字通りに解釈するという意味である。この解釈法から出て来た神学体系を「ディスペンセーションナリズム」という。

### 第一節 罪の根

「キリスト教信徒のみが、聖書を根拠として、人間始祖アダムとエバが善悪を知る木の果<sup>み</sup>を取って食べ、それが罪の根となったということを漠然と信じてきた」

→聖書を一貫して字義通りに解釈するクリスチャンは、「漠然と信じてきた」のではなく、明確に、歴史的事実として信じてきた。

アダムとエバの墮落の話を比喻や象徴として解釈しなければなら

ない理由は、どこからも導かれない。よって、文字通りに解釈すればよいのである。

### (一) 生命の木と善悪を知る木

92頁11行目

「人間の父母としていまし給う神」

→『原理講論』47頁11行目には「我々は神を父と呼んで、その格位を表示する」とある。神は父なのか、父母なのか？

93頁3～4行目

「かつてイエスは、『口にはいるものは人を汚すことはない。かえって、口から出るものが人を汚すのである』（マタイ15:11）と言われた。まして、食物がいかにして人間を墮落させることができるであろうか。」

→そもそも、善悪の知識の木（善悪を知る木）は、人間が生命を維持するために創造された木ではない。人間が神の命令に従順に生きるかどうかをテストするために創造された木である。結局、墮落論も、考え方が最初から間違っている。

墮落前の人類には、「神を慕い求める性質」が与えられていたが、その性質は最初から神によって与えられていたもので、人類が自ら選び取った性質ではなかった。その未確定な性質を確定させるために、神は、善悪の知識の木によってアダムをテストした。（中川健一著『ディスペンセーションリズムQ&A』初版、ハーベスト・タイム・ミニストリーズ、2019年、145頁参照。）

善悪の知識の木は、人類の墮落以降、聖書に一切出て来ない。なぜなら、その役目を終えて、もう必要がないから。

仮に、アダムもエバも善悪の知識の木から取って食べなかったと

しても、やはり善悪の知識の木はその役目を終えた。なぜなら、神の命令を守り、善悪の知識の木から取って食べないことで、何が善で何が悪かを知るようになったから。

なぜ、善悪の知識の木と書いてあるのか、考えてみるとよい。

「原罪」に関しては、本書113～115頁を参照せよ。

93頁11～12行目

「アダムとエバは、彼らが善悪の果を取って食べる日には、必ず死ぬであろうと言われたみ言のように、それを食べるときには死ぬということを知っていたはずである。」

→アダムもエバも死を見たことがないので、神の言われた「死ぬ」ということばの意味がわからなかった。それでも彼らは神を信賴することで、罪を犯さずに罪の何たるかを知ることができたにもかかわらず、実際には、罪を犯すことで、罪の何たるかを知ることになった。

93頁14～16行目

「それゆえに、善悪を知る木の果は何かの物質ではなく、生死にかかわることさえも問題視しないほどの強力な刺激を与えることのできる、他の何物かであるに相違ない。」

→推論の過程が間違っているので、この結論も間違っている。

93頁17行目～94頁1行目

「聖書の多くの主要な部分が、象徴とか比喩でもって記録されていることは事実である。」

→そのような事実はない。

#### 94頁1行目

「もしそうだとすれば、なぜ善悪の果<sup>み</sup>だけを無理に文字どおりに信じなければならないのであろうか。」

→実際には、聖書の多くの部分が比喻や象徴によって記録されているわけではない。また、既に述べたように、人類の墮落の話も比喻や象徴でもって読まなければならない理由は何もない。聖書は、この話を比喻や象徴として読むことを要求していない。よって、文字通りに解釈するのが正しい。

#### 94頁1～3行目

「今日のキリスト教信徒たちは、当然のことながら聖書の文字のみにとらわれた過去の固陋<sup>ころう</sup>にして慣習的な信仰態度を捨てなければならない。」

→実際には、聖書を一貫して字義通りに解釈する「ディスペンセーションナリズム」の立場に立つクリスチャンよりも、部分的に比喩的解釈を施すクリスチャンのほうが数は多い。原理も比喩的解釈を採用している。

しかし、聖書に比喩的解釈を施すと、論理に一貫性がなくなる。比喩的解釈というのは、結局、主観的解釈であり、主観的解釈は、聖書よりも解釈者を上に置くことである。つまり、解釈者が神になっているのである。

神は論理的に一貫性のある啓示を与えられたと信ずるなら、聖書に比喩的解釈を施してはならない。聖書をどう読むかは、神のご性質に信頼を置くのか、置かないのか、という問題である。神は愛だと本気で信ずるなら、聖書は一貫して字義通りに解釈すればよい。

ちなみに、字義通りの解釈と機械的解釈は区別する必要がある。機械的解釈を採用すれば、「わたしは羊たちの門です」(ヨハネ10:7)というイエスのことばを聞いて、イエスには取っ手があったのか、

と理解することになる。当然，機械的解釈は間違っている。

94頁9～10行目

「箴言13章12節を見れば，旧約聖書において，イスラエル民族も生命の木をその願望の対象として眺めていた」

→「願望の対象として眺めていた」とは読めない。非常に無理のある解釈である。

94頁10～11行目

「黙示録22章14節の記録を見ると，イエス以後，今日に至るまでのすべてのキリスト教信徒たちの願望もまた，ひたすらに生命の木に至ろうとするとところにある」

→単なるこじつけにすぎない。クリスチャンの生きる目的は，神の栄光である（第一コリント10:31）。いのちの木の実を食べられるのは，救われた結果にすぎない。

94頁11～13行目

「墮落人間の究極的な願望が，生命の木であるということを見れば，墮落前のアダムの願望も，生命の木であったに相違ない」

→推論の過程が間違っているので，この結論も間違っている。

94頁15行目～95頁1行目

「創世記3章24節を見れば，アダムが罪を犯したために，神は炎の剣をもって生命の木の道をふさいでしまわれたと記されている。この事実を見ても，墮落前のアダムの願望が，生命の木であったということを知ることができる。」

→そもそも，墮落前のアダムに与えられていた禁止命令は，「善悪の知識の木からは，食べてはならない」であり，その他の木からは

思いのまま食べてよかった。つまり、アダムはいのちの木から、いつでも好きなだけ取って食べてよい状況にいた。そんなアダムの願望がいのちの木だったとは、到底言えない。原理の主張は非論理的である。

95頁7行目

「生命の木とは、すなわち、完成したアダムを<sup>ひゅ</sup>比喩した言葉である」  
→生命の木が完成したアダムを比喩しているのなら、エデンの園には完成したアダムが実在しなければならない。しかし原理によれば、エデンの園にいたアダムはまだ完成していなかった。ということは、エデンの園には、完成したアダムと未完成のアダムがいたことになる。つまり、エデンの園には2人のアダムがいたことになる。実におかしな結論である。

よって、生命の木は完成したアダムを比喩しているのではない。つまり、生命の木は何を意味するのか、全く解明できていない。

96頁17行目～97頁1行目

「イエスを<sup>のち</sup>後のアダムという理由は実にここにあるのである（コリント I 15:45）。」

→第一コリント15:45の正確な日本語訳は「最後のアダム」。聖書全体の文脈からも、「最後のアダム」が正しいとわかる。

97頁6～7行目

「善悪を知る木というその木は…完成したエバを例えていった言葉である」

→この記述から理解できることは、エデンの園には完成したエバが実在した、ということである。しかしこのとき、エバは未完成であったはず。ということは、エデンの園には、完成したエバと未完成

のエバの、2人のエバがいたということになる。実におかしな結論である。

よって、善悪を知る木は完成したエバを例えていった言葉ではないことがわかる。つまり、善悪を知る木は何を意味するのか、原理は全く解明できていない。

#### 97頁8行目

ローマ11:17の「オリーブの木」は、靈的祝福の源であるアブラハム契約のこと。イエスのことではない。

以上のことから、いのちの木と善悪の知識の木に関しても、原理は何も解明できていないことが証明された。

#### (二) 蛇の正体

#### 97頁13～14行目

「我々は創世記3章に記録されているその内容から、この蛇の正体を探ってみることにしよう。」

→まさに、そうしてみよう。

創世記3:1には、この蛇がどういう蛇だったのかが書かれている。

「さて蛇は、神である主が造られた野の生き物のうちで、ほかのどれよりも賢かった。」

ここで注目すべきは、この蛇は「野の生き物」だということ。もし、天使だったら「天の生き物」とか書いてあるはず。しかし、原文のヘブル語を調べても、そうは書かれていない。（「野の生き物」と訳されているヘブル語は「ハヤット・ハサデー חַיַּת הַצֶּדֶה」で、このうち「野」を意味するヘブル語「サデー הַצֶּדֶה」は「草地」という意味でもある。つまり、文字通り「野の生き物」なのである。）



また、エバを誘惑した蛇に対して、神は「おまえは腹這いで動き回り、一生、ちりを食べることになる」と言われた（創世記3:14）。もし、この蛇がサタンなら、サタンは腹這いで動き回る以上、これ以後、天には来られないはず。しかし、ヨブ記1～2章を読むと、サタンは天におられる神の前に来ている。これは矛盾である。

では、どう考えればよいのか。

結論だけ言うと、サタンが蛇を悪用してエバを誘惑したのである。

黙示録12章9節は、聖書全体の文脈から、将来起こる、大患難時代の後半の3年半が始まる直前のことだとわかる。

99頁5行目には「時間と空間を超越して」とあるが、天使は時間も空間も超越していない。時間も空間も超越しているのは神だけ。

第二ペテロ2章4節に書いてあるのは、創世記6章1～4節に出て来る「神の子ら」（墮天使たち）のこと。この「神の子ら」はヘブル語で「ベネー・ハ・エロヒーム בְּנֵי הָאֱלֹהִים」で、墮天使も含めた天使のみに使われている。また、第二ペテロ2:4で「地獄」と訳されているギリシャ語は「タルタロス Τάρταρος」（英語では「タータラス Tartarus」）で、この場所に閉じ込められた墮天使たちは、黙示録20:11～15に出て来る「大きな白い御座」でさばかれ、そのまま「火の池」に投げ込まれることが定まっている。つまり、タルタロスに閉じ込められている墮天使たちが再び人間を惑わすことは二度とないのである。

この墮天使たちのことは、ユダの手紙6～7節にも書いてある。この聖句の意味に関しては、「(三) 天使の墮落と人間の墮落」の箇所ですべて説明する。

99頁9行目には「天使こそが人間を誘惑して罪を犯させた」とあるが、天使は人間を誘惑したりしない。人間を誘惑するのは墮天使（サタンと悪霊ども）である。天使と墮天使は区別する必要がある。

結局、蛇の正体に関しても、原理は間違った結論を出している。

### （三）天使の墮落と人間の墮落

100頁6～10行目

「ユダ書6節から7節に『主は、自分たちの地位を守ろうとはせず、そのおるべき所を捨て去った御使<sup>みつかい</sup>たちを、大いなる日のさばきのために、永久にしばらくつけたまま、暗やみの中に閉じ込めておかれた。ソドム、ゴモラも、まわりの町々も、同様であって、同じように淫行<sup>いんこう</sup>にふけり、不自然な肉欲に走ったので、永遠の火の刑罰を受け、人々の見せしめにされている』と記録されているのを見ると、我々は天使が姦淫<sup>かんいん</sup>によって墮落したという事実を知ることができる」

100頁11～12行目

「したがって、エデンの園で行われた天使の姦淫において」  
→既に述べたように、ユダ6～7は、創世記6:1～4に出て来た墮天使たちのことを指していて、エデンの園でエバを誘惑したサタンのことではない。よって、この聖書箇所から、天使はエデンの園で姦淫を行ったと結論づけるのは間違っている。

ユダ6～7と第二ペテロ2:4と創世記6:1～4から、今もタルタロスに閉じ込められている墮天使たちは、天使と人間の間の、越えてはならない垣根を越えて、人間の娘と肉体関係を持ったことが「不自然な肉欲」と言われている。一方、ソドムやゴモラの人々は同性愛という「不自然な肉欲」にふけたのである（創世記19:1～29）。

ここで、原理の言う責任分担の観点から考えてみる。

創造原理によると、「神の創造目的は、人間がその責任分担を完遂することによってのみ完成できるようになっている」(『原理講論』243頁2～3行目)のだから、天使には責任分担はないことになる。また、「天使は人間に主管されるように創造された万物である」という原理(同79～80頁)からも、天使には責任分担はないことがわかる。さらに原理によると、神の創造目的を完成するには、「神の責任分担95パーセント+人間の責任分担5パーセント=100パーセント」なのだから、天使には責任分担がないことになる。つまり、「天使は万物だから、神の創造目的を完成させるための責任分担は天使にはない」というのが、創造原理である。

ならば、天使長ルーシエルが、エバを誘惑し墮落させたことに対する責任は、天使長には何もないはずだから、完全な愛の主体である神が、そんな天使長を裁くはずがない。しかし、聖書によると、サタンは神から裁きを宣言されていて(創世記3:14～15)、最終的に「火と硫黄の池」に投げ込まれ、永遠に苦しみを受けることが定まっている(黙示録20:10)。

ということは、天使にも責任分担があると考えなければならない。第二ペテロ2:4やユダ6～7も、天使に責任分担があることを証明している。しかし、この結論は創造原理と矛盾する。

よって、原理の責任分担論は否定された。つまり、創造原理の根本が否定されたのである。すると、墮落論も復帰原理も根本的に間違っていることになる。統一原理はどうにもならないほど、根本的に間違いだらけなのである。

ある現役メンバーから、「天使にも責任分担はある」と言われたことがあるが、では天使の責任分担は一体何パーセントなのか？

101頁2～3行目

創世記2章25節によると、墮落前にアダムとエバは既に夫婦となっていたことがわかる。罪のない状態で夫婦となっているということは、創造原理によれば既に個性完成していることになり、「絶対に墮落することがない」はず（『原理講論』創造原理の第三節創造目的（二）「神の喜びのための善の対象」を参照せよ）。よって、創造原理が言うように、個性完成した夫婦は絶対に墮落しないのなら、墮落論はどう考えても絶対に成立しない。このように、原理は原理によって否定されてしまうのである。原理はどこまでも自己矛盾に陥っている。

創世記2:25で「その妻」（ヘブル語で「イシュトー  $\text{יְשׁוּתָא}$ 」，直訳は「彼の妻」）の「妻」という言葉（ヘブル語で「イシャー  $\text{יְשָׂרָא}$ 」）は、第一義的には「女」という意味なのだから、「妻」ではなく「女」と訳すべきではないかという反論があるかもしれない。

そこで、ヘブル語の説明をしておく。

「私の～」、「彼の～」という所属や所有を表すには、「～の」という意味の前置詞「シェル  $\text{שֶׁל}$ 」を用いて表すことができる。

しかし、家族関係を表す名詞には、前置詞「シェル  $\text{שֶׁל}$ 」を使うよりも、人称接尾辞を付けることが多い。

「彼のイシャー」という場合は、「イシャー  $\text{יְשָׂרָא}$ 」の語尾の  $\text{א}$  を  $\text{ת}$  に変えてから、「彼の」を表す人称接尾辞「i-」を付けて、「イシュトー  $\text{יְשׁוּתָא}$ 」とする。（発音が少し変化するので注意。）

この「イシュトー  $\text{יְשׁוּתָא}$ 」というヘブル語は、旧約聖書の中では必ず「彼の妻」という意味で使われていて、「彼の女」という意味で使われている例は一つもない。よって、創世記2:25で例外扱いしなければならない理由は何もないので、創世記2:25でも「彼の妻」と訳するのが正しい。

創世記3:7を正しく理解するために、以下にこの聖句を引用する。  
「こうして、ふたりの目は開かれ、自分たちが裸であることを知った。そこで彼らは、いちじくの葉をつづり合わせて、自分たちのために腰の覆いおおを作った。」

「目が開かれ」とあるが、「目が開かれる」という表現は聖書によく出て来るもので、靈的に目が開かれるという意味。

「自分たちが裸であることを知った」とあるが、アダムとエバは、そもそも互いに裸であることを知っていた（創世記2:25）ので、ここでの意味は、罪を犯したことへの恥の感覚を知ったのだと理解できる。また、アダムが人類の代表として罪を犯したことにより、人類の、神に敵対する性質が確定した。その性質は、生殖器を通して子孫に伝わっていくことになった。

「いちじくの葉をつづり合わせて、腰の覆いを作った」のは、人類のいのちの源が罪によって汚れたことを意味するのだろう。原理が言うように、「下部で罪を犯した」と考える必要性は全くない。

そもそも、アダムとエバは夫婦だったのだから、性行為をしても何の問題もないのである。

ヨブ記31章33節は、同じ意味の内容を別の言葉で表現しているのであって、ヨブがアダムのように淫乱の罪を犯して下部を覆い隠したことがあるという意味ではない。（「自分の背そむきをおおい隠した」と「自分の咎とがを胸の中に秘めた」が同じ意味を表している。）

101頁14行目

「死ぬということを明確に知っていながら」

→既に述べたように、「死ぬ」ということばの意味を知らなかった。

#### 102頁2行目

「人間は歴史的に愛の行動を、何か卑しいもののように見なしてきた」

→そうは考えられない。不倫等の裏切りに値する行為には否定的であっただろうが。

#### 102頁3行目

「ここにおいて我々は、人間もまた、淫乱によって墮落したという事実を知ることができる。」

→既に述べたように、人間は淫乱によって墮落したのではない。原理のこの結論もまた、でっち上げにすぎない。

#### 102頁5～6行目

「人間が天使の誘惑に陥って墮落したという事実、人間も天使もみな淫行によって墮落したという事実」

→事実、事実と言っているが、既に述べたとおり、事実ではない。聖書をでたらめに読んだ結果、でっち上げられた事実である。

#### 102頁8行目～12行目

この箇所を要約すると、次のようになる。

ヨハネの福音書8章44節に「あなたがたは、悪魔である父から出た者であって」とあり、黙示録12章9節から、悪魔はサタンであると明示されていることから、「人間は悪魔の子孫であり、したがって、サタンの子孫であるがゆえに、結局蛇の子孫である」。

しかし、ヨハネの手紙第一4章6節には「私たちは神から出た者です」と書いてある。

よって、人間が悪魔（サタン）の子孫であることは否定された。

#### 102頁12行目～15行目

この箇所を要約すると、「人間の祖先が天使と淫行を犯すことによって、すべての人間は神の血統ではなくサタンの血統をもって生まれた」となる。

しかし、既に述べたように、人間の祖先が天使と淫行を犯したという原理の主張は否定されたので、全ての人間はサタンの血統をもって生まれたという結論もまた、否定される。

ロマ書8章23節は、墮落した人間がサタンの血統をもって生まれた証拠にはならない。全ての人間は、生まれつきのままでは滅びるしかないが、信者は恵みと信仰によって神の子どもとされた。そして、現在進行形の救いである聖化の過程が完了すれば、復活のからだを与えられ、名実ともに神の子どもとされる。その特権を表現するために「ヒュイオテシアー υιοθεσία」（「養子にすること」「養子縁組」という意味）というギリシャ語が使われているのだろう。このギリシャ語は、当時のローマ人にはよく理解できたと思われる。

マタイの福音書3章7節の「まむしの子らよ」という言葉は、パリサイ人の偽善やサドカイ人の自己中心的な信仰を糾弾したもの。まむしは外側は美しく見えても、内側には毒を持っている。パリサイ人やサドカイ人は、そんなまむしのようだと断言したのである。

マタイの福音書23章33節の「蛇よ、まむしの子らよ」も同様。

#### 103頁4～5行目

「このような聖書の記録に基づいてみると、我々は、天使と人間との間に淫行関係が結ばれ、それが墮落の原因になったという事実を知ることができるのである。」

→上記の聖書箇所から、原理が主張するような事実は存在しないこ

とが明らかとなった。

これまでの考察から、原理は墮落の原因をでっち上げたことが証明された。原理は、墮落の原因に関して何も解明できていない。

#### (四) 善悪の果

103頁7行目

「我々は既に、善悪を知る木が、完成したエバを<sup>ひ ゆ</sup>比喩したものであるという事実を明らかにした。」

→その事実はでっち上げられたものであることが明らかになった。

104頁2～3行目

「エバが善悪の果を取って食べたということは、彼女がサタン（天使）を中心とした愛によって、互いに血縁関係を結んだということの意味する」

→『原理講論』103頁7～8行目には「善悪の果<sup>み</sup>とは、エバの愛を意味する」と書いてある。また、善悪の知識の木（善悪を知る木）は、原理の出した結論によると、完成したエバを意味するのだから、「エバが善悪の果<sup>み</sup>を取って食べた」という文は、「未完成のエバが、完成したエバの愛を取って食べた」となってしまう。エバが2人もいるし、サタン（天使）はどこにもいない。エバどうし、同性愛によって墮落したのか？ そもそも、エバは一人のはず。

もし善悪の果<sup>み</sup>がエバの愛だとするなら、「蛇が善悪の果<sup>み</sup>を取って食べた」と聖書に書かれているはずだが、そうは書かれていない。

よって、原理の説明は全く成り立たないことが証明された。

ちなみに『罪と蕩滅復帰<sup>とうげん</sup>』91頁には、「善悪の実<sup>み</sup>はエバの生殖器」と書いてあり、同93頁には「善悪の実とは何ですか。何だか知って



いますか。女性の陰部を言うのです」と書いてあるが、いずれにせよ、結論は同じである。

また、エバがサタンと性行為をしただけで、なぜエバとサタンの間に血縁関係が結ばれるのか？ あり得ない。

創世記2章16節、17節、3章に出て来る「食べる」という意味のヘブル語「アハル אָחַל」には、性行為をするというニュアンスは全くない。よって、善悪の実を食べたことは、性行為をしたことにはならない。

一方、聖書で、性行為を表すには「知る」という意味のヘブル語「ヤダア יָדָע」が、相手を性的に知るという意味で使われている（創世記4章1節、17節、25節など）。

善悪の実に関しても、原理は何も解明できていない。

## (五) 罪の根

104頁10～11行目

「罪の根は人間始祖が、天使と不倫なる血縁関係を結んだところにあった」

→なぜ不倫の結果、血縁関係が結ばれるのか？ 性行為をしただけでは、血縁関係は結ばれない。

もし、サタンとエバが夫婦として性行為をしたと言うなら、その夫婦という関係は誰によって承認されたのか？ 自分たちだけで「私たちは夫婦だ」と言っても、それは夫婦になったことにはならないし、血縁関係を結んだことにもならない。

サタンとエバは兄と妹として性行為をしたのだと言っても、そもそも兄と妹なら、最初から血縁関係があることになる。

淫行によって天使と血縁関係が結ばれたと考えないと、世の中の悪の問題が説明できないと言うなら、それは論点先取の虚偽に陥っていることになる。

105頁1～3行目

「イスラエル民族が神の選民となるため、<sup>しよくざい</sup>贖罪の条件として<sup>かつれい</sup>割礼を行ったというのも、罪の根が淫乱によって悪の血を受けたところにあつたために、墮落人間の体からその悪の血を抜きとることを条件として、聖別するためであった。」

→この記述も間違いだらけである。

イスラエル民族は神によって選ばれた。その選びの目的は、全人類を救う器となることである。そして、この選びは今でも取り消されていない。

イスラエル民族は今でも、生後八日目の男子に割礼を施している。割礼は、アブラハム契約のしるしだからである（創世記17章）。アブラハム契約は、神がアブラハムと結ばれた契約で、イサク、ヤコブに継承され、ヤコブの子孫であるイスラエル十二部族に継承されている。今でも有効な永遠の契約である。

104頁13行目～105頁11行目

淫行による犯罪を犯す者は、性欲が活発に働く人に限定される。それに比べて、<sup>ごうまん</sup>傲慢になったり、悪口を言って人を傷つけたりすることは、性欲がなくとも犯せる罪である。このような現実を見ても、（仮に「罪の根」という表現を受け容れたとしても、）罪の根が淫行にあるとは、とても考えられない。

結局、墮落論は根本的に間違っているのである。

## 第二節 墮落の動機と経路

### (一) 天使の創造とその使命および人間との関係

創世記1章26節で、神は「人をわれわれのかたちに造ろう」と言われ、「神のかたち」として人を創造された（創世記1:27）。つまり、「われわれ」とは神ご自身のことである。創世記1:26の「われわれ」には天使は含まれない。天使も含まれるとする根拠は何もない。

創世記18章10節のみことばは、天使ではなく、神が語られた。創世記18:13～14, 21:1～2参照。

107頁9～10行目

「靈的に通ずるあらゆる人たちは、数多くの天使たちが、樂園にいる聖徒たちを擁護しているのを見る」

→「靈的に通ずるあらゆる人たち」とは具体的にどんな人たちなのか？これが本当の話かどうかはわからないが、そもそも、人間が樂園の光景を見る必要性はない。既に聖書の正典（神の自己啓示の書）は完結しているのだから。

### (二) 靈的墮落と肉的墮落

107頁13行目

「神は靈的部分と肉的部分をもって、人間を創造された」

→創造原理によると、靈的部分は靈人体、肉的部分は肉身である。

108頁4行目

「地上人間たちが、靈人たちとしばしば結婚生活をする例がある」

→「霊人」とは具体的にどういう人なのか？

108頁4～5行目

創世記32:25でヤコブが戦った相手は天使ではなく、神ご自身（28節，30節参照）。

108頁5～6行目

「天使がアブラハムの家庭に現れて肉を食べたという事実(創18:7)」  
→創世記18:7ではなく，創世記18:8。

108頁11～12行目

「神はルーシエル（明けの明星という意，イザヤ14:12）に天使長の位を与えられた。」  
→「ルーシエル」という言い方がどこから出て来たのか不明。

109頁4～5行目

「ルーシエルは，自分が天使世界において占めていた愛の位置と同一の位置を，人間世界に対してもそのまま保ちたいというところから，エバを誘惑するようになった」  
→このような動機は，聖書からは全く読みとれない。既に述べてきたことから，完全に作り話だとわかる。

よって，原理の言う霊的墮落の動機は全く成り立たない。

イザヤ書14章13～14節から，サタンは「神に反逆して，神のようになりたい」と思って墮落したことがわかる。

109頁12行目

「ルーシエルは死を覚悟してまで，より深くエバを誘惑するように

なった」

→善悪の果をエバの愛と考える以上、これは誤りである。

109頁12～15行目

「愛に対する過分の欲望によって自己の位置を離れたルーシエルと、神のように目が開けることを望み、時ならぬ時に、時のものを願ったエバとが（創3:5, 6）、互いに相対基準をつくり、授受作用をするようになったため、それによって非原理的な愛の力は、彼らをして不倫なる靈的性関係を結ぶに至らしめてしまったのである。」

→既に述べたように、授受作用は否定されているので、この説明は成り立たない。

そもそも、万有原力が存在するなら、非原理的な愛の力は決して生じない。

また、善悪の果をエバの愛とする以上、このような性的関係は成立しない。

靈的墮落とは、ルーシエルが靈的存在である以上、エバは彼女自身の靈人体で淫行を行ったことになる。そのとき、エバの肉身は何をしていたのか？ 靈人体と肉身は同じ所に存在するはずだから、肉身も、淫行を行っていたように見えたはず。非原理的な愛の力で淫行を行っていたにもかかわらず、エバの肉身には相手がなかったために、靈人体の墮落だけで済んだということか？

また、靈人体で淫行を行ったということは、靈人体が肉身と同一の様相をした有形の実体であることを前提にしている。これは『原理講論』86頁3行目の記述（「靈人体は無形実体としての実存体」）と矛盾している。いったい靈人体は無形なのか、有形なのか？

109頁16行目

「愛によって一体となれば、互いにその対象から先方の要素を受け  
るように創造された原理」

→このことから、直接主管圏にいるという文鮮明氏らの男性と、ま  
だ間接主管圏にいる女性が性行為をすることが、原理的に正当化さ  
れる。つまり、例えば統一教会の女性メンバーが、直接主管圏にい  
ると考えられる男性（例えば、文鮮明氏はもちろん、彼の子孫が結  
婚しているなら、既に個性完成していることになり、それは直接主  
管圏にいることの証拠になる）に対して愛情を抱いているなら、互  
いに性行為をすることにより、女性メンバーは相手から絶対的な価  
値の愛を与えられることになり、霊人体も肉身も善化されるだろ  
うから、さらに復帰のスピードが早まることになる。たとえ相手が相  
対者（配偶者）でなくとも、この行為は神の創造目的をより早く達  
成するための善なる行為と見なせるので、サタンに讒訴ざんそされるこ  
ともない。

このようにして、一般的に言われる不貞行為も原理的に正当化で  
きるのである。実際、文鮮明氏と韓鶴子女史の長男である文孝進ムンヒョージン  
氏は、多くの女性と性行為をしていたようだが、結婚してからであ  
れば、それは墮落行為ではなく、原理的な行為と見なせる。

あるいは、このような考えにより、直接主管圏にいると考えられ  
る男性（女性）のほうから女性（男性）メンバーを誘惑することが  
あってもおかしくない。

しかし、既に創造原理は否定されているので、上記のような関係  
を持つことは、配偶者がいるならただの不貞行為にすぎない。

109頁16行目～110頁3行目

「愛によって一体となれば、互いにその対象から先方の要素を受け  
るように創造された原理によって（創3:7）、エバはルーシエルと愛  
によって一体となったとき、ルーシエルの要素をそのまま受け継い

だったのであった。すなわち、第一に、エバはルーシエルから、創造目的に背いたということに対する良心の呵責<sup>かしやく</sup>からくる恐怖心を受けたのであり、第二には、自分が本来対すべき創造本然の夫婦としての相対者は天使ではなく、アダムだったという事実を感得することのできる新しい知恵を、ルーシエルから受けるようになった」

→エバがルーシエルから受けたものしか書いてない。「互いに先方の要素を受ける」のなら、エバはルーシエルに何か与えたはず。しかし、エバはルーシエルに何を与えたのか、何も書かれていない。

また、既に述べたように、アダムとエバは墮落する前から夫婦だった（創世記2:25）ので、「新しい知恵」などとは到底言えない。

#### 110頁3～4行目

「当時、エバはまだ未完成期にいたのであった。したがって、そのときの彼女自体は、既に完成期にあった天使長に比べて」

→完成期にいた天使長が誘惑したなら、エバは引き上げられるはず。墮ちることはどう考えてもあり得ない。既に述べたように、そもそもエバは個性完成していたので、未完成期にはいない。

また、『原理講論』には書かれていないが、このような疑問を解消するため、「ルーシエルはまず他の天使たち（全て男性）と肉体関係を持ち、墮落してからエバを誘惑した」と言うメンバーもいるらしい。しかし、そんなことは聖書のどこにも書かれておらず、読みとることも不可能である。それ以前に、論点先取の虚偽である。

無意味な反論によって、あくまで性の話にしようとしているのがわかる。当然、このような話はもはや統一原理ではなく、自分勝手な妄想にすぎない。

#### 110頁9～10行目

「時ならぬ時にサタンを中心としてアダムとエバとの間に結ばれた

夫婦関係は、そのまま肉的墮落となってしまった」

→なぜ単に「肉的墮落」と呼ぶのか？ エバもアダムも霊人体と肉身を備えた存在であるから、エバとアダムの性行為は、霊人体と肉身の両方で行われたはず。よって、エバとアダムの墮落は、「霊的肉的墮落」と呼ぶべきであろう。

110頁13～14行目

「エバは、今からでも自分の原理的な相対者であるアダムと一体となることにより、再び神の前に立ち、墮落によって生じてきた恐怖心から逃れたいと願うその思いから、アダムを誘惑するようになった」

→このような動機は、聖書からは全く読みとれない。完全に作り話である。

そもそもエバは、再び神の前に立ち、恐怖心から逃れたいと思ったのなら、悔い改めて、神に対して自分の罪を告白したはずである。アダムを誘惑して、時ならぬ時に夫婦関係を結んで罪を重ねてしまったら、ますます神から遠ざかるだけだという知恵を、ルーシエルから受けて知っていたはず。なぜなら、原理的な相対者はアダムだったという「新しい知恵」をルーシエルから受けたのだから。つまり、原理の説明が正しければ、エバはアダムを誘惑するはずがないのである。

よって、原理の言う肉的墮落の動機は全く成り立たない。

111頁1～2行目

「今やエバは、アダムを通してしか神の前に出ることのできない立場にあった」

→どこからこのような理屈が出て来るのか？ 全く根拠がない。



111頁4～5行目

「アダムがルーシエルと同じ立場に立っていたエバと相対基準を造成し、授受作用をすることによって生じた非原理的な愛の力は」  
→既に述べたように、授受作用は否定されたので、この説明も成り立たない。

111頁7～8行目

「アダムは、エバと一体となることによって、エバがルーシエルから受けたすべての要素を、そのまま受け継ぐようになったのである。そのようにして、この要素はその子孫に綿々と遺伝されるようになった。」  
→遺伝という生物学の用語を使っている以上、科学的に説明できるはず。しかし、科学的な説明は何もない。ここでも、科学的な解明は全面的に欠如している。

結局、原理は、なぜ人類に原罪があるのか、また、そもそも原罪とは何なのかを全く解明できていない。

これまでの墮落論の内容から、アダムの罪よりも、エバの罪のほうが重いとされているのがわかる。

しかし、聖書を字義通りに読むと、アダムのほうが罪が重い。

その理由を簡単に説明すると、次のようになる。

(1) アダム אָדָם というヘブル語は「人」という意味である。つまり、アダムは人類の代表として神によって立てられたのである。

(2) 神から直接、命令を受けたのはアダムである。このとき、神とアダムは契約を結んだ。(これを「エデン契約」と呼ぶ。)

(3) よって、アダムには人類の代表として、責任ある行動が要求された。

(4) しかし、アダムは、神から与えられた自由意志を悪用して、神との契約を破った（ホセア6:7）。つまり、アダムもサタン同様、神のようになりたいと思い、神に反逆したのである。

(5) しかも、アダムはエバが罪を犯すとき、エバのそばにいたにもかかわらず、エバの行為を止めようとはしなかった。

(6) 神に対する言い訳を見ても、アダムはエバを「この女」呼ばわりし、エバに責任転嫁している。また、間接的に神を責めてもいる。一方、エバは神もアダムも責めず、蛇に責任転嫁しただけだった。

(7) 以上のことから、アダムのほうが罪が重いとと言える。

### 第三節 愛の力と原理の力および信仰のための戒め

#### (一) 愛の力と原理の力から見た墮落

##### 112頁3～9行目

脱線が可能であるためには、ルール外の存在があらかじめ必要となる。つまり、非原理の世界が墮落以前に用意されていなければ、墮落後に人間は存在することもできない。よって、神はあらかじめ非原理の世界を用意していたことになる。しかし、これは『原理講論』130頁8～9行目の「御自分が創造されなかった非原理的な存在」という記述と矛盾する。

また、万有原力が存在するなら、非原理的な愛の力が生じることはない。

よって、この項目における原理の説明も完全に間違っている。

##### 113頁4～5行目

「イエスが弟子たちを真理によって立たしめ、愛をもって救おうと

された理由は、正にここにあった」

→原理は真理ではないので、この説明も成り立たない。

## (二) 信仰のための戒めを下さった目的

113頁15行目～114頁1行目

「人間が、自分自身の責任分担として、そのみ<sup>ことば</sup>言を信じ、自らの力で完成することによって」

→「自らの力で」完成できるという考え方自体、非常に<sup>ごうまん</sup>傲慢である。

聖書は、自分の力では少しもきよくはならないと教えている。

114頁7～8行目

「アダムとエバが…神の愛による直接的な主管を受ける」

→本書73頁後半で既に述べたように、原理の言う直接主管とは、主管を受ける人間に自由意志が全く存在しない状態をいう。

114頁9行目

「人間が完成すれば、『食う』のは原理的なものとして、当然許されるように創造されていた」

→アダムとエバが墮落前に夫婦となっていたことは、既に述べた。よって、彼らが性行為をすることは何の問題もなかった。

## 第四節 人間墮落の結果

### (一) サタンと墮落人間

115頁6行目

「サタンを中心とする四位基台がつくられると同時に」

→四位基台は既に否定された。

115頁11～12行目

「人間始祖の墮落によって、その子孫が、一人残らず、神の血統を受け継ぐことができず、サタンの血統を受け継いでしまった」

→このような教えが聖書に反することは、既に述べたとおり。

115頁12行目

「アダムとエバが完成し、神を中心とする四位基台をつくったならば」

→四位基台は既に否定された。

原理は、この世界は神主権の世界ではなく、サタン主権の世界だと言っている（『原理講論』115頁12行目～116頁8行目）。

しかし、聖書からわかることは、世界の主権者は常に神だということ、サタンは神から許可された範囲内でしか活動できないということである。ヨハネ12:31、第二コリント4:4の「この世」とは、「神を離れて生きている自己中心的な人間の総体」を意味する。彼らにとって、サタンは支配者であり、神なのである。

## （二）人間世界に対するサタンの活動

116頁11～12行目

「サタンもその対象を取り立てて、相対基準を造成し、授受作用をしない限り、サタンの活動をすることはできない」

→そもそも、万有原力を前提した授受作用は既に否定されたので、サタンは一切、サタンの活動をする事ができない。

116頁10行目～117頁2行目

ここで「地獄」「霊界」「悪霊人」といった言葉が突然出て来て、特に何の説明もなしに使われているので、原理の言うことがよく理解できないと思うが、理解できないのが当たり前なので、安心して欲しい。

聖書は死後の世界に関して、次のように教えている。

(1) 生きている間に、神の啓示を無視し続けて死んだ人（不信者のまま死んだ人）は、ハデス（よみ）の苦しみの場所へ落とされ、ずっと苦しみ続ける。そして、「大きな白い御座のさばき」において、それぞれ自分の行いに応じてさばかれ、「火の池」に投げ込まれる。彼らは永遠に救われることがない。

(2) イエス・キリストを信じて救われた人は、死後、天のパラダイスへ行く。教会の携拳が起こると、復活のからだ（栄光のからだ）が与えられ、二度と罪を犯さなくなる。そして、キリストの再臨とともに地上に戻り、千年の間、王として治める。そして、千年王国が終わると、新天新地に移行し、神とともに永遠に住まう。

マタイの福音書16章23節で、イエスはペテロに対して「下がれ、サタン」と言われたが、これはペテロがサタンだと言っているのではない。ペテロの発言が、サタンと同様に、イエスの贖罪のわざを無効にしようとしたという意味。

信者の心が完全にサタンに支配されることはない。信者の心には、せいれい ないじゅう 聖霊の内住が与えられているから。

マタイの福音書25章41節の「悪魔とその使い」とは、悪魔（サタン）と、サタンが墮落したときにサタンに従った墮天使たち、つまり、あくれい 悪霊どものこと。

117頁10～11行目

「人間は、あくまでも自分の自由意志による責任分担としてみ言を探しだし、サタンを自然屈服させてこそ、創造本然の人間に復帰することができる」

→サタンを自然屈服させるという考え方自体、非常に傲慢である。サタンは神にさえ自然屈服しないのだから、ましてや人間に自然屈服するわけがないだろう。

### (三) 目的性から見た善と悪

117頁15行目

「善と悪に対する定義は、既に、創造原理の中の『創造本然の価値』において論じ尽くした。」

→ならば、原理の言う善と悪の定義は完全に間違っていることになる。

118頁7～9行目

「我々が、往々にして罪であると考えるところの欲望なるものは、元来、神より賦与された創造本性である。なぜなら、創造目的は喜びにあるのであり、喜びは欲望を満たすときに感ずるものだからである。」

→まず、「欲望」とは何なのかを理解するために、『広辞苑』第七版（新村出編，岩波書店，2018年）から、その意味を引用しておく。

「ほしがること。また、ほしいと思う心。不足を感じてこれを満たそうと望む心。」

そもそも、このような欲望を、人間は往々にして罪であると考えたのだろうか？ 往々にして罪だと考えたのは欲望ではなく、貪欲<sup>どんよく</sup>

であろう。そして、貪欲はどこまで行っても、罪である。なぜなら、神に信頼を置いていないことから、貪欲が出て来るのだから。

よって、この原理もまた、間違っている。

118頁14～16行目

「この悪の世界も、イエスを中心とし、その目的の方向だけを変えるならば、善なるものとして復帰され、地上天国が建設される」  
→上記で述べたように、目的の方向だけを変えてもダメ。

119頁2～12行目

善悪の基準を相対的な視点で見ているから、「この摂理の過程において取り扱われる善の基準は、絶対的なものではなく、あくまでも相対的なもの」だと言っているだけ。

神が絶対者なら、善悪の基準は、どの時代でも常に不変である。

119頁12～13行目

「地上でサタンの主権を追い払い、時代と場所とを超越して永存し給う絶対者たる神御自身が主権者となり」

→既に述べたように、神は常に主権者である。サタンが主権者となったことは、一度もない。

#### (四) 善神の業と悪神の業

120頁2～3行目

「善神というのは、神と、神の側にいる善霊人たちと、天使たちを総称する言葉であり、悪神というのは、サタンと、サタンの側にいる悪霊人たちを総称する言葉である。」

→善神とか悪神という言葉を使うこと自体、偶像礼拝の影響が感じ

られる。聖書に啓示されている神を本当に信じるのなら、神という言葉をおのうに軽々しく使うべきではない（箴言1:7参照）。

120頁3～4行目

「善と悪がそうであるように、善神の業<sup>わざ</sup>と悪神の業も、同一のかたちをもって出発し、ただその目的のみを異にする」

→上記で述べたように、これも間違いである。

120頁5行目

「善神の業は、時間がたつにつれて…その肉身の健康をも向上させる」

→神に忠実に歩んでいても、からだの健康が向上するとは限らない。事実、そのような教えは聖書にない。

このような原理の主張は御利益主義<sup>ごりやく</sup>である。御利益主義は、結局、人間中心主義である。つまり、神より人間を上に置いているのである。これは神への冒瀆<sup>ぼうとく</sup>である。

120頁13～14行目

「靈的な現象が次第に多くなる今日において、善神と悪神との業の違いを十分に理解し、これを分立することができない限り、靈人たちを指導することはできない」

→文脈から、「分立」ではなく「区別」とすべき。言葉の誤り。

## (五) 罪

121頁2～3行目

「罪とは、サタンと相対基準を造成して授受作用をなすことができる条件を成立させることによって、天法に違反するようになること」



→既に述べたように、授受作用は否定されているので、ここで定義されているような罪は存在しない。

よって、4つに分類されている罪も全て存在しないことになる。

#### 121頁3～4行目

「第一に原罪というものがあるが、これは人間始祖が犯した靈的墮落と肉的墮落による血統的な罪をいい、この原罪は、すべての罪の根となる」

→既に述べたように、靈的墮落と肉的墮落は否定されているので、この原罪の説明も成り立たない。つまり、原理の言う原罪は否定される。

#### 121頁5～6行目

「第二に、遺伝的罪がある。これは、父母の犯した罪が数代にまで及ぶという十戒のみ言<sup>ことば</sup>のように、血統的な因縁をもって、その子孫が受け継いだ祖先の罪をいう。」

→出エジプト20:5の「父の咎<sup>とが</sup>を子に報い、三代、四代にまで及ぼし」とは、先祖の罪の悪影響が子孫に及ぶという意味。父の犯した罪のために子が罰を受けるという教えは、聖書にない(列王記第二14:6, エレミヤ31:30, エゼキエル18:4, 18:20参照)。よって、遺伝的罪など存在しない。

#### 121頁7～10行目

「第三には、連帯罪というものがある。これは、自身が犯した罪でもなく、また遺伝的な罪でもないが、連带的に責任を負わなければならない罪をいう。例えば、祭司長と律法学者がイエスを十字架につけた罪により、ユダヤ人全体がその責任を負って神の罰を受けなければならないし、全人類もまた、共同的な責任を負って、イ

エスが再臨なさるそのときまで、苦難の道を歩まねばならなかったが、それはこの罪のゆえである。」

→ (1) ユダヤ人はベルゼブル論争（マタイ12章）によって民族的にイエスを拒否したために、エルサレム崩壊（紀元70年）とその後の世界離散が不可避となった。ただし、信仰を持ったユダヤ人たちは個人的に救われた。彼ら信者は、エルサレムがローマ軍によって包囲されたときに、ルカ21:20～24を思い出して、ペラという町（デカポリスの町の一つ）へ避難して助かった。

一方、不信者たちは、「すると、民はみな答えた。『その人の血は私たちや私たちの子どもらの上に。』」（マタイ27:25）と言ったために、そのとおり、ローマ軍によって殺された（紀元70年に成就）。これは連帯罪ではなく、自身が直接犯した罪である。

(2) ユダヤ人がメシアであるイエスを民族的に拒否したため、救いが異邦人に及んだ（ローマ9～11章）。また、ユダヤ人信者と異邦人信者から成る「教会」が誕生した（エペソ2:15）。

(3) 連帯責任を負わされる場合、責任を負わされた人たちにも問題があるはず。それは自犯罪と呼ぶべきだろう。よって、原理の言う連帯罪など存在しない。

121頁12～14行目

「原罪を、罪の根というならば、遺伝的罪は罪の幹、連帯罪は罪の枝、自犯罪は罪の葉に該当するのである。しかし、すべての罪は、その根に該当する原罪から生ずる。それゆえに、原罪を清算しない限りは、他の罪を根本的に清算することはできない。」

→ 「清算する」という言葉は「貸し借りや、過去の関係に結末をつける」という意味であり、貸し借りや、まだ終わっていない関係に対して使われる。しかし、原理で4つに分類された罪は、いずれも「貸し借り」でも「過去の関係」でもない。ということは、「罪を

清算する」という概念自体、間違っているのである。つまり、誰も、どんな小さな罪でさえも清算できないのである。

当然、文鮮明氏は原罪を清算できない。そもそも、罪を清算できる存在など、存在しない。

よって、統一教会での信仰生活は、統一原理の観点からは何の意味もない。どんなに祈っても、どんなに断食しても、どんなに多額の献金をして、どんなに献身的な信仰生活を送っても、たった一つの罪でさえも清算することはできないのだから。

聖書が教える罪には3種類ある。

(1) 個人的罪：神の御心<sup>みこころ</sup>に反する全ての行為や考え。

この罪の解決法は、赦しのみ。

(2) 原罪：アダム<sup>アダム</sup>の墮落以降、全ての人が生まれつき持っている罪の性質、あるいは、悪への傾向性。

この罪の解決法は、新生、贖い、聖霊の内住。

(3) 転嫁された罪：全人類はアダムの罪に参加したと見なされる。この罪の解決法は、メシア（キリスト）の義の転嫁。

（参考文献：中川健一著『クレイ聖書解説コレクション「ローマ人への手紙」』紙版第1版、ハーベスト・タイム・ミニストリーズ、2016年、146～147頁。）

このように、聖書によって全ての罪は解明され、解決策も与えられているので、原理という「新しい真理」など必要ないのである。

## (六) 墮落性本性

122頁3～6行目

「天使が神に反逆して、エバと血縁関係を結んだとき、偶発的に生じたすべての性稟<sup>せいひん</sup>を、エバはそのまま継承したのであり、こうして

天使長の立場におかれるようになったエバと、再び血縁関係を結んだアダムも、またこの性稟を受け継ぐようになった。そして、この性稟が、墮落人間のすべての墮落性を誘発する根本的な性稟となってしまったのである。これを墮落性本性という。」

→既に述べたように、このような血縁関係は結ばれていない。よって、墮落性本性は生じない。

ゆえに、4つに分類された墮落性本性は、墮落性本性には分類されないことになる。

## 第五節 自由と墮落

### (一) 自由の原理的意義

125頁3～10行目

「第一に、原理を離れた自由はない」に関して。

「原理を離れてはその心が働くことができない」(8行目)とあるが、アダムもエバも、墮落前も墮落後も心は働いていた。そもそも「心が働く」とは「知情意の三機能を発揮する」(『原理講論』71頁14行目)ことであるから、心が働けないということは、無知で無情緒で無意志になることを意味する。それは人形と同じ状態になることである。しかし、実際には、墮落後のアダムもエバもそんな状態にはならなかった。よって、第一の説明は、未完成期の人間には当てはまらない。

この自由の意味を「原理への自由こそが、人間における内面的な必然性である」と考えてみると、原理的に信仰生活をするうちに、個々人が本来持っている、各々異なる個性が発揮されてくるはずである。しかし、統一教会のメンバーを見ればわかるが、彼らは現実には「個性消滅」へ向かっている。これは矛盾である。よって、第

一の説明は、未完成期の人間には当てはまらない。

たとえこの「自由」が創造目的を完成した人間の自由を意味するとしても、直接主管圏に達した人間は、原理の力以上に強い愛の力（『原理講論』前編第二章第三節（一）参照）によって神に主管されるのだから、原理を離れて自由に愛し合えるはずである。よって、原理の自由に関する第一の説明は、創造目的を完成した人間に対しても当てはまらなくなり、結局、完全に間違っていることになる。

125頁11行目～126頁3行目

第二、第三の自由に関する説明は、第一の「原理を離れた自由はない」ことを前提としている。しかし、第一の説明は完全に否定されたので、必然的に、第二、第三の説明も否定される。

「自由の原理的意義」により、統一教会のメンバーに対し、自己の責任分担を果たし、万物復帰や伝道で実績を上げなければならないという命令を与えることが原理によって正当化できるが、これまで述べてきたことにより、そのような命令に、原理的な根拠は何もないことがわかる。

第六節 神が人間始祖の墮落行為を干渉し給わなかった理由

129頁2～3行目

「神は全知全能であられるので人間始祖の墮落行為を知られなかったはずがない。また彼らが墮落行為を行わないように、それを防ぐ能力がなかったわけでもない。」

→ここでは、はっきりと「神は全知全能だ」と言っているにもかかわらず、創造原理では「神は被造世界と相対的な関係をもっている」（『原理講論』前編第一章第一節（二））と言っている。この両者は

矛盾していて、絶対に両立しないことは、本書の創造原理の所で既に述べたとおりである。

## (二) 神のみ創造主であらせられるために

130頁8～9行目

「神は…犯罪行為や地獄のような、御自分が創造されなかった非原理的な存在や行動」

→ここでは、地獄という存在は、神によって創造されたのではないとしている。では、いったい地獄は誰によって創造されたのか？

この原理によると、神以外にも、地獄を創造した創造主が存在することになる。しかし、原理は神だけが創造主だと言っている。これは矛盾である。

既に述べたように、創造原理は全て否定されたので、この第六節で述べられている内容も全て否定される。

以上のことから、墮落論は全く成り立たず、単なるでっち上げにすぎないことが証明された。よって、墮落論は人間における悪の問題に対して、何一つ解明できていないことが証明された。

これで、創造原理も墮落論も単なるでっち上げ（虚構）だと証明されたので、再創造原理である復帰原理も、自動的にでっち上げ（虚構）となる。

よって、これ以降の章を考察することは、もはや無意味にすぎないが、まだ釈然としない人もいるかもしれないので、各章について、少しだけ考察していく。

この墮落論によって、統一教会内部での性に関する厳しい規律が導かれる。私が知る限り、日本では、男女が手をつなぐなど、少しでも体が触れることを禁止している。また、他に誰かメンバーがいる開かれた空間でしか男女は会話できず、しかも長い時間をかけてはいけないことになっている。それどころか、異性に恋愛感情を抱くことすらも禁じられている。当然、自慰行為など、以ての外である。

性的な欲求をこれほどまでに抑圧しなければならないのは、かなり困難なことである。私の経験上、まず不可能と言ってよい。特に歳の若いメンバーは誰でも、知らず知らずのうちに、いつでも「恋愛したい」という願望を抱いていると思う。このような厳しい規律は、自然な欲求をむりやり押さえつけるので、精神的にもかえって不健全ではないかと思う。

統一教会の外部に対しては「純潔運動」を主張しているが、これは統一教会へ勧誘するための隠れ蓑にすぎない。たとえ純潔運動だけを切り離して考えてみても、現代の風潮とはあまりにもかけ離れており、純潔であるためには性的欲求を強く抑圧しなければならない場合があることから、やはり人によっては精神的に不健全な影響を与えるだろうと思う。ただ、個人的に純潔でありたいと思うのなら、私はそういう人の生き方を否定しはしない。

創造原理も墮落論も完全に否定されたわけだが、それでも何かまだ心に引っかかるものがあるという人もいるかもしれない。その疑問は主に文鮮明氏がなぜ、このような誤りだらけの原理をあれほど自信を持って語るのか、ということかもしれない。精神医学的には、文氏のような人は「自己愛性人格障害」と呼ばれる精神障害を持った人だと考えられる。自己愛が肥大化しすぎて、誇大妄想にはまっているのであるが、そういう話はここの主題ではないので、詳しく

は述べないことにする。ただ、上手に嘘をつく人は、事実の中にうまく嘘を隠し、人々を魅了するような話し方や、人々が惹きつけられるような内容を語る、ということは覚えておいて欲しい。

**自己愛性人格障害**：根拠もなしに自分は特別であると考えている。自己評価が極端に高く、誇大的で、常に他者から称賛されたいという反面、他者への共感性が乏しい。他者に対する嫉妬、尊大で傲慢な態度もよく認める。(仙波純一，高橋祥友編著『こころの健康科学』第1版，放送大学教育振興会，1999年，58頁。)



## 第三章 人類歴史の終末論

### 第一節 神の創造目的完成と人間の墮落

#### (一) 神の創造目的の完成

134頁11行目

「墮落前のアダムとエバが…神と一問一答できた」

→聖書を見ると、アダムとエバが神と会話しているのは、墮落後。

コリント I 3章16節やヨハネの福音書14章20節は、原理の言うように、イエスを信じた者が神と一体となることを意味していない。

教会時代の信者のうちには聖霊（神の御霊）がおられる（これを聖霊の内住という）が、信者は自由意志によって、うちにおられる聖霊に逆らうこともできる。それゆえ、「御霊によって歩みなさい」（ガラテヤ5:16）という命令が与えられているのである。

136頁7～9行目

「個性を完成した人間たちは、科学を発達させて自然界を征服することによって、最高に安楽な社会環境をこの地上につくらなければならない。このような創造理想の実現された所が、すなわち地上天国なのである。」

→人間は自然界の中にある法則を何一つとして新たに創造することはできない。せいぜい、既に存在していた法則を発見し、利用しているだけにすぎない。それに、自然界は人間の介入とは関係なく、自身の法則に従って変化していく。それを征服しようとするなら、それは、自然界を破壊すること以外の何ものでもないだろう。自然

界を破壊してしまつては、人間は安楽な生活を送ることができなくなる。よつて、自然界を征服することが地上天国を実現することなら、地上天国は絶対に、永遠に実現不可能である。

そしてまた、このような原理の考え方は非常に傲慢ごうまんであり、単なる誇大妄想にすぎないことがわかる。

## (二) 人間の墮落

137頁1～2行目

「人間は墮落することによつて神の宮となることができず、サタンが住む家となり、サタンと一体化した」

→これが本当なら、墮落人間はみな「悪魔つき」である。悪霊あくれいにつかわれている「悪霊つき」どころの話ではなくなる。

137頁4行目

「これがすなわち、墮落人間たちが今まで住んできた地上地獄だったのである」

→サタン（悪魔）はひとりなので、墮落人間がみな「悪魔つき」であるなど、あり得ない。よつて、地上地獄の説明も間違っている。

137頁6～7行目

「隣人の苦痛を自分のものとして体恤たいじゅつすることができないために、ついには、隣人を害するような行為をほしいままに行うようになってしまった」

→隣人の苦痛をそのまま自分のものとして理解できないからこそ、お互いに助け合えるのである。たとえて言えば、泥沼にはまって身動きできない人を助けるのに、自分も同じ気持ちになるために、一緒になって泥沼にはまってしまつたら、いったい誰が助けることが

できるだろうか？ 苦痛に共感することは大切だが、その苦痛そのものまで共有してしまつては、助ける人がいなくなってしまう。苦痛のある人を助けるには、助ける人はその苦痛の外にいないなければならない。我々も互いに相手の苦痛を完全に理解できないからこそ、助け合つて生きることが可能となるのである。これが、「隣人の苦痛を自分のものとして体恤たいじゅつすることができない」ことから生じる利点である。

137頁7～8行目

「人間は地上地獄に住んでいるので、肉身を脱ぎ捨てたのちにも、そのまま天上地獄に行くようになる」

→原理によると、神のみ創造主であり、神は地獄を創造しなかった（『原理講論』130頁8～9行目）。では、地上地獄と天上地獄は誰が創造したのか？

137頁8～9行目

「人間は地上、天上共に神主権の世界をつくることができず、サタン主権の世界をつくるようになった」

→これが上記の答え。つまり、地獄は人間がつくった（創造した）。

それ以前に、主権者は神おひとり。サタンは主権者にはなれない。サタンは、神が許可された範囲内でしか活動できない存在である。

## 第二節 救いの摂理

(一) 救いの摂理はすなわち復帰摂理である

138頁7行目

「神は必ずこの罪惡の世界を、救わなければならない」

→原理が言う救いとは、地獄にいる人間も全て救うという主張である。しかし、聖書によれば、信仰によって救われる人と、不信仰のために救われない人がいる。これは、神の愛・聖・義というご性質から導かれる合理的な結論である。

一方、「神は愛なのだから、全ての人間を救わずにはいられないのだ」という反論が考えられる。しかし、この反論は、永遠に地獄で苦しむ人がいるなんて想像したくないという人間の願望から出て来た反発にすぎず、その考えが正しいことを証明する根拠が何も無い。また、神が聖であり義でもあることを無視している。よって、この反論は成り立たない。

#### 138頁12行目

「病気にかかった人間を救う」＝「病気になる以前の状態に復帰する」と考えるのは誤り。本当に病気になる以前の状態に戻すには、時間を逆行するしかない。しかしそれは不可能。現実には、病気が治ったというのは、例えば、軽い火傷<sup>やけど</sup>の痕が新しい細胞によって完全に修復された、というようなことだけを意味するのではなく、骨折した場合などは「元に戻った」と言っても、骨折する以前と全く同じ状態ではなく、骨の強度が少し落ち、以前よりも弱い衝撃で再び骨折してしまう可能性がある。心の病の場合も、以前と全く同じ状態に戻るよりも、不安への対処方法を身につけたり、薬を飲んで症状を軽くし、支障が出ない程度に生活ができるように治療を受けることが多いのではないか。また多くの人々は何らかの病気とうまく付き合っていく方法を身につけながら、最期のときまで生きるのである。よって、一般的に考えて、病気にかかった人間を救うということは、病気になる以前の状態に復帰することではない。

#### 138頁12行目～139頁1行目

上記と同様に、「水に溺れた人を救う」＝「水に溺れる以前の立場にまで復帰する」という考えは誤りである。水に溺れてしまったら、いくら助けられたといっても、水に溺れたという事実は消しようがない。服を着ていたなら、濡れた服を脱いで、体を拭き、新しい服に着替えるであろう。その状態は決して「水に溺れる以前の立場」と全く同じではない。衣服もさながら、溺れたことで、水に対する恐怖心を抱くようになるかもしれない。

気持ちの上で「病気が治った」とか「溺れる以前の状態に戻った」とか思っている、あるいは表現上、そのような言葉を使ったとしても、実際には、以前と同じ状態や立場に復帰しているわけではないだろう。ゆえに、復帰に関する原理の考えは、現実を無視した空理空論である。

マタイの福音書5章48節の「完全」は、「人を差別なく愛する愛の徹底性」のこと。

### (三) 人類歴史はすなわち復帰摂理歴史である

141頁3～4行目

「何が善であり、いかにすればその善をなすことができるかということ、知能に属すること」

→知能の問題ではなく、心の問題。

ここにも原理の傲慢さが現れている。

142頁4行目

「今日の中華民国に至るまで」

→「中華民国」は1948年までなので、『原理講論』が書かれた年代からすると、「中華人民共和国」とすべき。

143頁12～17行目

宗教と科学の両面の無知を克服していくのが摂理歴史なら、科学史についても『原理講論』後編に見られるような摂理的同時性があるはずである。しかし『原理講論』は、科学史については何も触れていない。

実際に調べてみればわかるが、12数、4数、21数、40数といった原理数による同時性は、科学史についても成立しない。

例えば物理学について考えてみると、16世紀から17世紀にかけて起こった科学革命は、1543年、コペルニクスの『天球回転論』に始まり、1687年、ニュートンの『自然哲学の数学的諸原理（通称：プリンキピア）』によって、完成を見ると考えられている。この期間は144年であり、同時性の原理数には当てはまらない。また、1915～1916年にアインシュタインによって発表された一般相対性理論の論文は、従来の絶対時間と絶対空間という概念を崩壊させた。この年と1687年の期間は288～289年となり、これも全く同時性の原理数には当てはまらない。あるいは、復帰原理では、ルターによる宗教改革の年を最後の期間の始まりにしているのだから、それになぞらえてコペルニクスによる科学革命の始まりの年を、科学史における摂理的同時性の最後の期間の始まりの年と考えると、 $1543 + 400 = 1943$ 年となり、文鮮明氏が誕生した1920年にはならない。

また、科学の発展は物理学だけでなく、化学の発展にも依存しているのだから、化学に関しても原理数による摂理的同時性があるはずである。しかし化学史については、摂理的同時性の年代に当てはまりそうな適切な出来事すら見つからない。（化学史における科学革命は、ロバート・ボイルの『懐疑的化学者』によって始まったと考えられているが、ボイルは17世紀の人である。）よって、復帰摂理の観点から考えて、あるべき科学史の摂理的同時性が全く成立しない

ということは、復帰摂理そのものが否定されたことになる。

さらに、『原理講論』後編第四章第七節（二）（2）によると、復帰摂理はまず外的な科学を発展させ、その次に内的な宗教を発展させなければならない。しかし上述したように、実際には宗教革命のほうが先に起こっている。これは矛盾である。よって、「復帰摂理は再創造の摂理である」という原理は否定された。

143頁14～15行目

「有史以来、互いに関連することなく独自の発達してきた宗教と科学」

→近代科学が誕生するまでの間、科学には宗教が常に干渉してきた。特に中世ヨーロッパでは、当時のキリスト教会の強い影響により、科学の発達が遅れたことも、科学史によって明らかとされている。よって、原理の考えは明らかに誤りである。

144頁2～3行目

「今日のような科学社会は、既に人間始祖当時において成就されるはずであった」

→科学の発達には、技術の発達が不可欠である。人間始祖の墮落前、人間が持っていた技術は、今日の技術と比べると、非常に原始的であった。コンピューターどころか、その部品さえなかった。その状態から今日の技術社会まで発達するのに、人間始祖が活着している間には成就できないだろう。どう考えても妄想である。

145頁9行目

「エデンの園とは、アダムとエバが創造された、あの局限地域をいうのではなく、地球全体を意味する」

→聖書は、原理のこの見解を否定している。

また、この原理の見解と『浅見教授の批判に答える』82～83頁の野村健二氏の見解とは異なっている。見解が統一されていない。

145頁10～12行目

「もしエデンの園を，人間始祖の創造された，ある限定された地域だけを指しているのだとすれば，地に満ちるほど生めよ殖えよと言われた神の祝福のみ言<sup>ことば</sup>（創1:28）によって，繁殖するであろう数多くの人類が，いったいどうしたらその狭い所にみな住むことができるであろうか。」

→創世記1:28のみことば（これはエデン契約の条項の一つ）は，アダムの墮落（契約違反）によって破棄された。

146頁3行目

重要度順に赤・青・緑の三色表示がなされている『原理講論 色付き標準縦書き版』では、「新生」を「<sup>じゅうせい</sup>重生」と言い換えている。

146頁6行目

「ヨハネ黙示録の『生命の木』とは，とりもなおさずイエスのことをいう」

→ヨハネの黙示録22章1～2節を見ると，いのちの水の川の両側にいのちの木があると書かれている。いのちの木＝イエスだというなら，いったいイエスは何人いるのか？

### 第三節 終末

#### （一）終末の意義

147頁7行目



「サタン主権の罪悪世界が，神主権の創造理想世界に転換される時代を終末（末世）という。」

→既に述べたように，永遠の昔から永遠に至るまで，主権者は神おひとりだけ。よって，原理の終末の定義も成り立たない。

## （二）終末の徴候に関する聖句

この箇所扱われている聖句の解説は省略するが，これまで述べてきたことから，この箇所における原理の説明も全く成り立たない。

156頁1～5行目

「イエスと聖霊が来られて，旧約のみ言<sup>ことば</sup>を成就するための新約のみ言を下さることにより，旧約のみ言が光を失うようになったと同様に，イエスが再臨されて，新約のみ言を成就し，新しい天と新しい地とをたてられるので（黙21:1）そのときの新しいみ言によって初臨のときに下さった新約のみ言はその光を失うようになるのである。ここにおいて，み言がその光を失うというのは，新しい時代がくることによって，そのみ言の使命期間が過ぎさるということを意味する。」

→聖書にこのような教えはない。旧約聖書の続きが新約聖書であり，旧約聖書に書かれた無条件契約やまだ成就していない預言は今でも有効である。旧約聖書39巻と新約聖書27巻を合わせた合計66巻の聖書だけが，完結した神の自己啓示の書である。

ヨハネの黙示録の預言のことばは，旧約聖書と新約聖書の預言の要約になっているので，ヨハネの黙示録は聖書全体の要約になっていることがわかる。また，ヨハネの黙示録で聖書の正典が完結したことは，黙示録22章7節，18～19節によって保証されている。よって，ヨハネの黙示録をもって，聖書の正典は閉じられたことがわか

る。ゆえに、これ以上、神の啓示が新しく付け加えられることはない。つまり、「新しい真理」とか「最終的な真理」だという統一原理が入り込む余地は微塵もないのである。

クリスチャンにとって、旧約聖書は役目を終えた書ではなく、新約聖書を理解するために必要不可欠な書として用いられている。この理解の根底には「漸進的啓示」という概念がある。つまり、神は一時に全ての啓示を与えられたのではなく、時代が進展するとともに、徐々に啓示の量を増やしてこられた、ということである。また、既に述べたように、聖書を一貫して字義通りに解釈すると、神はいくつかの明確に区分可能な神の経綸（これはディスペンセーションと呼ばれ、通常、7つあるとされる）にしたがって、人間に対する統治原則を与えられてきて、その時代ごとに神と人間の統治関係が変わってきたことがわかる。この内容の詳細に関しては、中川健一著『ディスペンセーションナリズムQ&A』（初版、ハーベスト・タイム・ミニストリーズ、2019年）を参照されたい。

イスラム教やユダヤ教についても同じことが言える。例えば、イスラム教は、旧約聖書に福音書と『クルアーン（コーラン）』を加えることによって成立している。さらに、ユダヤ教は、旧約聖書に『ミシュナ』や『タルムード』を加えることによって成立している。（ちなみに、「旧約聖書」という呼び方は、「新約聖書」と区別するためのもので、キリスト教界独自の呼び方である。イスラム教やユダヤ教では「旧約聖書」とは呼ばず、単に「聖書」と呼ぶ。）

以上のことから、原理は明らかに事実に反することを言っていることがわかる。

#### 第四節 終末と現世

157頁10～11行目

「このようなみ言によって、イエスの弟子たちもそうであったが、その後、今日に至るまでの多くの信徒たちは、各々が、自分の当代に、イエスが来られるということを信じていた」

→文脈を無視して聖句を解釈している。

ヨハネの福音書21章22節の意味は23節に書いてある。

マタイの福音書10章23節の「人の子は来るであろう」は、再臨のことではなく、イエスのエルサレム入城のことだろう。

マタイの福音書16章28節は17章1～8節で成就した。

いずれの聖句も、再臨の話ではない。実際、クリスチャンは、このような聖句を根拠にして、イエスが自分の生きているうちに来られると信じているのではない。そもそも、再臨はいつ起こるかわからないから、いつ起こってもよいように霊的に目を覚ましていなさいというのが、聖書の教えである（マタイ24～25章参照）。

つまり、原理は事実をでっち上げているのである。

157頁12～14行目

「我々は今ここにおいて、神が復帰摂理の目的として立て、それを成就しようとしてこられた三大祝福が復帰されていく現象を見て、現代がすなわち終末であるということを、立証することができる」

→既に三大祝福は否定されたので、そもそも「三大祝福が復帰されていく現象」などない。よって、原理の論証は成り立たない。

#### （一）第一祝福復帰の現象

158頁9～10行目

「アダムとエバの子孫たちは、神を知らないところにまで落ちてし

まった」

→しかし創世記4章6～15節によると、カインは神と対話している。よって、原理の説明はでっち上げだとわかる。

使徒行伝2章17～21節はヨエル書2章28～32節からの引用で、このみことばはイスラエルの民に語られたもの。よって、この聖句から「多くの信徒たちが神と霊通するようになる」という結論を導くのは間違っている。

159頁3～4行目

「人間は墮落によってサタンの主管下におかれ、本心の自由が拘束されるようになったので、神の前に出ていくことのできる自由を失ってしまった」

→サタンによって本心の自由が拘束されているなら、本心の自由を求めようとする心情はどこから出て来るのか？（『原理講論』89頁を参照せよ。） 原理の論理は完全に破綻している。

また、創世記4章26節には「人々は主の名を呼ぶことを始めた」とあり、5章24節には「エノクは神とともに歩んだ」とある。彼らはまだアダムが生きていたときに生まれた人たちである。（アダムはエノクが308歳のときに死んだ。）

## （二）第二祝福復帰の現象

160頁9～10行目

「キリスト教が他の宗教と異なるところは、全人類の真の父母を立てて、その父母によってすべての人間が新生し、善の子女となることによって、神の創造本然の大家族の世界を復帰するところに、その目的がある」

→キリスト教は，全人類の真の父母など，立てていない。完全にでっち上げである。

160頁12～13行目

「人類の真の父母であられるイエスと聖霊」

→イエスは父ではなく，聖霊も母ではない。そもそも，聖霊を表すギリシャ語「 Pneuma πνεῦμα」は中性名詞である。女性名詞ではない。よって，原理の理屈は成り立たない。

161頁6行目

「現代に至っては，キリスト教を中心とする一つの世界的文化圏をつくっていく趨勢すうせいを見せている」

→それどころか，民族主義の台頭などにより，文化的にますます細分化，あるいは多様化されていく傾向にある。

162頁12行目

「ゆえに神は，イスラエル民族を立てカナンカナンの七族を滅ぼされた」

→これはアブラハム契約を守るため。

163頁1～2行目

「善主権が悪主権を滅ぼすことは…善となるのである」

→このことから，1995年にオウム真理教がサリンという毒ガスで無差別殺人をしたように，統一教会が「復帰摂理の目的を早く達成するため」と称して，無差別殺人を行える可能性が理論的に導かれる。実際には，統一教会は「愛の心情」を強調しているので，そのような可能性はまずないと思われるが，理屈の上では正当化可能なのである。

163頁3～4行目

「人間においても個人より家庭，社会，そして国家へと，天の側の基台を広め，今日に至っては，これを世界的に復歸するようになった」

→現在でも，個人的な醜い争いを始め，家庭においても争いが止まず，社会も争ってばかりである。何も復歸されてはいない。これが現実である。原理は妄想を語っているにすぎない。

164頁6～7行目

「いかなる人間も思想の混乱を起こして，彷徨<sup>ほうこう</sup>するようになる」

→「いかなる人間」には，文鮮明氏や韓鶴子女史も含まれるはず。

### (三) 第三祝福復歸の現象

165頁13行目

「人間の靈感は高度に発達することができた」

→原理の言う「靈感」とは何なのか？ 何も説明がない。

166頁1行目

「動物のように，靈感の鈍い未開人に零落してしまった」

→動物に「靈感」とやらがあるのか？

166頁4～5行目

「科学の発達に伴う経済発展によって，現代人は極度に安楽な生活環境をつくるようになった」

→現在の政治・経済状況のために，極度に安楽な生活環境を作れない人々は，世界中に大勢いる。よって，原理は完全に現実を無視している。ただの妄想にすぎない。

## 166頁後半

情報網が発達してきた今日においては、世界は一つになるどころか、民族主義が台頭してきたり、人々の価値観が多様化することによって、ますます複雑になっていっている。よって、この部分も現実と反する。原理はあくまで家族愛にこだわっているのがわかる。

以上のことから、三大祝福復帰の現象に関する内容も否定され、結局、現代が終末である根拠は、原理からは導けない。原理の終末論も、ただのでっち上げにすぎないのである。

きょうだい愛や家族愛そのものを主張するのは悪くないが、統一教会の場合は、メンバーを文鮮明氏らとの依存的な愛情関係に縛ってしまっている。それは個性を失わせるものであり、統一原理という架空の作り話と破壊的なマインド・コントロールによって、メンバーのオートノミー（autonomy；プライバシーを含む自主決定権）を侵害するものである。そして彼らの家族愛は偽メシアである文鮮明氏を頂点とした全体主義を指向する。家族愛という言葉は魅力的ではあるが、それを主張するグループがどのようなものかをよく調べないと、簡単に騙されてしまうことになる。誇大愛情を用いるのは、破壊的カルトに共通する特徴でもある。

原理の言うように、もし真理（統一原理）によって知能が向上していくのなら、統一教会の産業はトップに立ち、世界的な人が出て来るはず。しかし、有名になっている人は誰もいない。光言社や世界日報も一般にはほとんど知られていない。むしろ借金ばかり抱えており、全然万物（お金）を主管できていない。これは原理と矛盾する。よって、統一原理によって知能が向上するという考えは否定

される。これも統一教会を魅力的に見せるための嘘にすぎない。

## 第五節 終末と新しいみ言と我々の姿勢

### (一) 終末と新しい真理

聖書が真理を教えるための教科書なら、その教え方に根本的な誤りや矛盾があっては、真理を正しく教えることができないのだから、聖書には根本的に誤りも矛盾もない、ということになる。『原理講論』についても同様に考えると、『原理講論』には根本的に誤りも矛盾もあるはずがない。しかし実際には、『原理講論』は根本的に矛盾だらけであり、真理とは何なのか、何一つとして知ることができない。

統一教会のメンバーには、聖書には誤りや矛盾があると考え、そのため、『原理講論』にも誤りがあっても変ではないのだ、と考える者もいる。(実際、幹部の中には、聖書の矛盾点を指摘して見せたりしている者がいる。例えば、広義昭著『やさしい聖書論』(初版、光言社、1985年)40～45頁。しかし、それらの指摘は基本的な内容であり、全て矛盾なく回答できる。広氏や野村健二氏などの幹部は、聖書解釈になじみのないメンバーをきべん詭弁を弄してろう騙してだましているのである。)しかし、この考えが正当化できるのは、根本的な教理に影響を及ぼさない細かい事柄に関してである。根本的な教理に対しては、誤りや矛盾があってはならない。そうでなければ、聖書も『原理講論』も、真理を教えるための教科書とはなり得ない。

また、聖書を、真理を教えるための教科書と考える以上、統一原理は、聖書の内容を完全に補完するものとして、完全に聖書に立脚していなければならない。ということは、統一教会のメンバーは、聖書の根本的な教理も信じる必要がある。それは、メシアは神であ



り人であることや、神が三位一体であるということである。しかし実際には、統一原理は聖書に立脚しておらず、それどころか、現代人より「知能の程度が非常に低かった」（『原理講論』169頁15～16行目）人々へ与えられたものとして、新約聖書と2000年前の人々を愚弄ぐろうしている。あまりにも傲慢ごうまんである。文鮮明氏やメンバーにおいては、イエスを神ではなく、人間と見ている。これは矛盾以外の何ものでもない。

神は、このような傲慢さと嘘を忌み嫌われる（箴言6:16～19）。

169頁15～16行目

「新約聖書は、当時の人間たちに真理を教えるために下さった、一つの過渡的な教科書であった」

→これは、「新約のみことばも、新しい真理が現れたときには光を失う（使命が終わる）」という原理の主張を正当化するための屁理屈にすぎない。

170頁3～4行目

「したがって、今日の知性人たちに真理を理解させるためには、より高次の内容と、科学的な表現方法によらなければならないのである。これを我々は新しい真理という。」

→これまで述べてきたように、「新しい真理」である原理には、科学的な表現が全く使われていない。論理的にも誤りだらけである。これほど低次元の真理があろうか。

170頁11行目

「教派分裂の第一原因は人間にあるのではなく、聖書自体にある」

→これは聖書への、もっと言うと、神への責任転嫁である。

神の愛・聖・義というご性質を考えれば、聖書は最も自然な方法

で解釈すればよいとわかる。その方法とは、一貫した字義通りの解釈である。聖書の比喩的解釈が教派分裂を起こす。(比喩的解釈とは、主観的解釈である。原理も聖書に対して比喩的解釈を施している。)

ヨハネ16:25, 16:13, 使徒2:17~18を根拠に、「終末においては必ず、新しい真理が出現しなければならない」(『原理講論』172頁5~6行目)と結論づけているが、これらの聖句に「新しい真理」という概念は全くない。完全にでっち上げである。

## (二) 終末に際して我々がとるべき態度

マタイ24:4~9を終末の現象として引用しているが、4~5節をよく読む必要がある。イエスは「人に惑わされないように気をつけなさい。わたしの名を名乗る者が大勢現れ、『私こそキリストだ』と言って、多くの人を惑わします」と言われた。文鮮明氏は、イエスが言われた偽メシアの一人であることがわかる。

ルカ5:38の「新しいぶどう酒は新しい皮袋に入れるべきである」というみことばは、私自身もメンバーだった頃によく聞いていた。しかし、このみことばを正しく理解するには、文脈をよく理解する必要がある。

ルカ5:29~39でひとまとまりになっていると考えられる。「新しいぶどう酒」は神の国の実質、つまり聖霊によって与えられるいのちであり、「古い皮袋」は当時のパリサイ的ユダヤ教を指す。当時のユダヤ教は、旧約聖書の教えからかけ離れていた。一方、イエスは旧約聖書に基づく神の国の実質について教えられたのである。

文脈を理解すれば、ルカ5:38のみことばを、原理を正当化するた

めに用いることはできないとわかる。

174頁1～3行目

「ゆえに、イエスは将来再臨なされば、自分が多くの苦難を受け、その時代の人々から見捨てられるであろうと預言されたのである（ルカ17:25）。」

→ルカ17:25は十字架の預言である。これは既に成就した。

よって、「再臨のときにおいても、必ずや再びキリスト教信徒たちの排斥を受けるに相違ない」（『原理講論』174頁1行目）という結論は導かれない。そもそも、この理屈は、統一教会がキリスト教界から異端視されている現実を正当化するためのものだろう。

174頁8～9行目

「旧約聖書に執着していたユダヤ人たちが、イエスに従って新約時代の摂理に応じることができなかったという史実」

→これもでっち上げである。

当時のユダヤ人たちは、旧約聖書の教えに従っていたのではなく、ラビたちに従っていた。

174頁11～12行目

「イエスに従った弟子たちの中には、旧約聖書に執着していた人物は一人もおらず」

→使徒として召されたマタイは、福音書の中で多くの聖句を旧約聖書から引用している。

ステパノも旧約聖書に基づいて論じた（使徒7章）。

パウロもまた、旧約聖書に基づいて、イエスがメシアであることを論証した（使徒17:1～3）。

イエスの弟子たちはみな、旧約聖書に基づいてイエスがメシアだ

と信じた。理屈抜きで信じたのではない。ここでも原理は事実をでっち上げている。

176頁の「み言の実体的展開による被造世界と復帰摂理表示図」

無原理圏には原理がないはず。しかし1600, 400という原理数がある。これは矛盾である。よって、無原理圏の存在は否定される。

さらに創造原理によれば、成長期間は三段階のみであるのに、アブラハムまでは無原理圏で成長したような表示になっているのはおかしい。よって、やはり無原理圏の存在は否定される。

無原理圏の存在が否定されるなら、必然的に復帰原理全体も否定される。

文鮮明氏は、「先生はすでに個人、家庭、氏族、国家、世界、天宙と予定されたすべての段階において勝利したので、サタンは全く侵害する権限がないのです。しかしながら、お母様のほうはこれから出発するわけですから、最初の7年間は、お母様の訓練期間だったのです」（『<sup>ハンハクジャ</sup>韓鶴子女史御言選集 愛の世界』117～118頁）と語っている。しかし<sup>とうげん</sup>蕩滅復帰の原理から考えると、成長期間の完成期は二人で歩まないといけないはず。文氏が一人で完成（勝利）できるはずはない。ゆえに、文氏も韓鶴子女史も原理に反した歩みをしたことになる。ということは、文鮮明氏も韓鶴子女史も真の父母ではなく、墮落した偽の父母だということになる。よって、彼らを信じても何の意味もない。

聖書が教える終末の出来事を簡単に並べると、次のようになる。

現在→教会の携挙→7年間の大患難時代→メシア再臨→千年王国  
→新天新地

# 第四章　メシヤの降臨とその再臨の 目的

## 第一節　十字架による救いの摂理

### (三) イエスの十字架の死

181頁3～6行目

第一に、使徒7章のステパノは使徒ではない。第二に、彼はユダヤ人たちがイエスを十字架につけた罪を糾弾したのであって、その行為をのろったとは聖書のどこにも書いてない。

181頁6～7行目

「今日に至るまでのすべてのキリスト教信徒たちも、また当時の使徒たちと同じ心情をもちつづけてきた」

→当時の不信仰なユダヤ人たちは、紀元70年のエルサレム崩壊のときに、ローマ軍によって殺されるというさばきを受けた。よって、当時の不信仰なユダヤ人たちを恨んでも意味がない。

「ユダヤ人はキリスト殺しだ」という反ユダヤ主義がキリスト教界に存在していることは事実。しかし、反ユダヤ主義者ばかりではない。そもそも、反ユダヤ主義者の理屈は間違っている。反ユダヤ主義者が根拠とするマタイ27:25の「私たちや私たちの子どもらの上に」血がふりかかってもよいという言葉は、当時の不信仰なユダヤ人だけを指している。全てのユダヤ人ではない。

182頁11行目

「イエスが十字架上で殺されるために来られたのではない」  
→旧約聖書と新約聖書を全知全能なる神のことばとして受け容れるのなら、イエスが十字架上で死ぬのは最初から父なる神のご計画であったと信じるべきである。

もし、ユダヤ人がイエスをメシアとして受け容れたとしても、やはりイエスは十字架で死ぬことになっただろう。その場合、ローマに対する反逆罪で十字架につけられたと思われる。

いずれにせよ、メシアが死ぬことは旧約聖書の預言の成就であった。

#### 183頁17行目

「彼らに災いあれと憤激されたこともあった（マタイ23:13～36）」  
→「災いあれ」は誤訳。「ウーアイ οὐαί」というギリシャ語は「何と悲しいことか」という意味。このギリシャ語は悲嘆や悲痛を表現することばで、英語に訳すと「Woe」とか「Alas!」になる。

#### 184頁4～5行目

「イエスの十字架の死は、彼がメシアとして来られた全目的を完成するための予定から起こった必然的なことではなく、ユダヤ人たちの無知と不信の結果に起因したものである」

→全知である神の視点から見れば、イエスの十字架の死は必然的なことであり、人間の視点から見れば、それはユダヤ人たちの無知と不信の結果に起因していると考えればよい。単なる視点の違いである。

また、旧約聖書からも、メシアの来臨には初臨と再臨があることがわかる。つまり、メシアは初臨だけで全目的を完成されるという神の計画は、最初から存在しないのである。

### 184頁8～11行目

「もし、イエスの十字架の路程が、神が本来予定された路程であったならば…何のために、『わが父よ、もしできることでしたらどうか、この杯をわたしから過ぎ去らせてください』と、三回も祈禱されたであろうか（マタイ26:39）。」

→マタイ26:39の後半をわざと省略しているように思える。イエスは続いて「しかし、わたしが望むようにではなく、あなたが望まれるままに、なさってください」と祈られた。

イエスが父なる神に祈られた内容で重要なのは、あくまで父なる神の御<sup>み</sup>心<sup>こころ</sup>が行われることであった。十字架への道を苦悩したのは、人としてのイエスの苦悩そのものであった。

### 185頁3行目

「イエスが預言されたように（ルカ19:44）、彼が亡くなられたのち、イスラエル選民が衰亡した」

→イスラエルは滅びてなどいない。1948年にイスラエルの国家も誕生した。

ルカ19:44は紀元70年のエルサレム崩壊の預言である。

### 185頁16～17行目

「イエスがメシヤとして来られてから、ユダヤ人たちに迫害され十字架で亡くなられたのち、彼らは選民の資格を失い支離滅裂となって、今日に至るまで民族的な虐待を受けてきた」

→ユダヤ人は選民としての資格を失ってはいない。選民だからこそ、世界中で迫害を受け続けても歴史から消えることはなかった。

日常語としては全く使われなくなっていたヘブル語（ヘブライ語）が、約束の地に住むユダヤ人の日常語として回復され、1948年には国家も誕生した。このような民族は他にはない。

186頁1～2行目

「イエス以後数多くの信徒たちが経験してきた十字架の苦難も、イエスを殺害した連帯的犯罪に対する刑罰であった」

→これが統一教会の見解なら、統一教会は反ユダヤ主義である。神は反ユダヤ主義者を呪われる（創世記12:3）。

#### （四）十字架の贖罪による救いの限界とイエス再臨の目的

この箇所を要約すると、イエスは霊肉共の救いのために降臨されたが、ユダヤ人の不信のために十字架につけられ、霊的救いのみを達成するしかなかった、ということになる。

しかし、復帰原理によると、復帰するには墮落と反対の経路をたどる必要がある（『原理講論』276頁1～2行目）から、墮落が霊的、次に肉的和起こったのなら、まず肉的和救いからしか達成できないはず。しかし原理では、まずイエスにより霊的救いが達成されたことになっている。これは矛盾である。

また、『原理講論』494頁11～12行目や512頁2～4行目から、再創造のための復帰摂理は、外的な肉身的救いから内的な霊人体の救いへと進んで行くはず。しかし、原理では、まず霊的救いが先にイエスにより達成されたことになっている。これは矛盾である。

以上のことから、「復帰するには、墮落と反対の経路をたどらなければならない」という原理と、「復帰摂理は再創造の摂理である」という原理が両方とも、原理により否定された。

結局、この第四章も、復帰原理を正当化するためにでっち上げられたものだと考えられる。

187頁3～4行目



「肉身にサタンの侵入を受けたイエスを信じて、彼と一体となった信徒の肉身も、同じようにサタンの侵入を受けるようになった」  
→イエスが肉身にサタンの侵入を受けたというのは、イエスは「悪魔（サタン）つき」になったということになる。しかし、そんな話は聖書にない。原理の作り話にすぎない。

また、サタンはひとりなので、複数人間が同時にサタンにつかれることはあり得ない。

ヨハネの手紙第一1章8～10節のうち、9節が省略されているが、本当はこの9節が重要。文脈を見れば、その重要性がわかるはず。著者が一番言いたかったことは何かを、きちんと考えるべきである。

#### （五）十字架に対する預言の両面

189頁11～12行目

「神は旧約時代の救いの摂理のための人間の責任分担の条件として、十戒を下さった。人間はそれを守って救いを受けることもできる」  
→十戒を中心とするモーセの律法は、イスラエルの民にのみ与えられた。そして、聖書には、モーセの律法を守ることによって義とされる（救われる）という教えはない。モーセの律法に人を救う力はない。モーセの律法はイスラエルの民に罪の意識を与え、彼らをメシアに導く役割を果たすものである（ガラテヤ3:23～25）。

190頁3～4行目

「神はみ旨成就に対する預言を両面性をもってなさざるを得なかった」

190頁7～8行目

「人間の責任分担の遂行いかんによって生ずる両面の結果に備えて、

神はイエスのみ旨成就に対する預言を二とおりにせざるを得なかった」

→これは神の全知性を否定することになるが、『原理講論』129頁2行目によると、「神は全知全能であられる」と書いてある。これは矛盾である。よって、原理のこの理屈も成り立たない。

#### (六) 十字架の死が必然的なもののように記録されている聖句

ヨハネ19:30で「完了した」と訳されているギリシャ語「テテレストαι τετέλεσται」は、発掘された当時の請求書に書かれていた商売用語で、負債が全額支払われた証拠としてサインされていたことが、考古学者たちの研究によって判明している。もし、霊的救いしか達成できなかったのなら、負債は全額支払われていないのだから、このギリシャ語は使われなかったはず。

ヨハネ19:30でイエスは、支払うべき負債を全て支払い終えたと言われたのである。ゆえに、イエスを信じる者は誰でも価なしに（無条件に）義とされるのである。信者がもう一度救われる必要はない。

#### 191頁14～15行目

「我々が正しい信仰をもつためには…聖書を正しく読むことによって、真理を悟らなければならない」

→まさに、そうすべきである。

#### 192頁8行目

「霊交によって、イエスに直接聞いてみれば、一層明白にこの事実を知ることができる」

→本当にイエスに直接聞けるのなら、間違いなく「原理は嘘だ」とイエスは言われるだろう。

## 第二節 エリヤの再臨と洗礼ヨハネ

### 193頁2～3行目

「洗礼ヨハネが、正に再臨したエリヤであるということは、イエスの証言であったのである（マタイ11:14, マタイ17:13）。」

→イエスは、洗礼ヨハネがエリヤ本人だと言ったのではない。マタイ11:10を読めばわかる。洗礼ヨハネは、マラキ3:1に書かれているメシアの先駆者だと、イエスは言われたのである。

エリヤ本人は、メシア再臨の前の大患難時代の前に、イスラエルの民の心をメシアに向けさせるために来る。その役割が同じだったので、洗礼ヨハネのことを「来たるべきエリヤ」と言ったのである。

### 193頁4～5行目

「洗礼ヨハネがエリヤの再臨者であったということは、一般ユダヤ人はもちろん、洗礼ヨハネ自身も知らなかった（ヨハネ1:21）」

→知らなかったのではなく、エリヤ本人でないことを知っていた。

### (一) エリヤの再臨を中心とするユダヤ人たちの心的動向

### 194頁1行目

「しかし、エリヤは彼の天的な使命を完遂できずに昇天したので（列王下2:11）」

→列王記第一17章～列王記第二2章を読む限り、エリヤは自分の使命を完遂したとしか考えられない。なぜなら、神ご自身がエリヤを天に上げられたのだから（列王記第二2章1～11節）。そして、モーセの後をヨシュアが受け継いだように、エリヤの後をエリシャが受け継いだのである（列王記第一19章16節, 19～21節, 列王記第二2

章1～14節)。

当時のユダヤ人たちは、「メシアが二度来る」ことを理解していなかった。メシアは、一度目は苦しみを受けるために、二度目は勝利を収めるために来られる。初臨の目的と再臨の目的は全く異なっているのである。

## (二) ユダヤ民族の行く道

196頁6～7行目

「イエスはユダヤ人の指導者たちから信じられなくなり、やむを得ず、漁夫を呼んで弟子とし」

→ユダヤ人の指導者たちから信じられなくなったことが原因で、やむを得ず、漁夫を弟子にしたとは、聖書には書かれていない。マタイの福音書4章を読めばわかる。

196頁7行目

イエスが取税人や罪人（遊女）と共に飲んだり、食べたりしたことは、当時の社会で人間扱いすらされない人々を、同じ人間として愛したことを意味する。

198頁8～9行目

「ユダヤ人たちは、やむを得ず、イエスを信じない道を選ぶ以外に仕方がなかった」

→聖書にそんなことは全く書かれていない。ユダヤ人の指導者たちはイエスをねたみ、十字架につけた（マタイ27:18）。つまり、積極的にイエスを拒否したのである。

### (三) 洗礼ヨハネの不信

ルカ1:75は、洗礼ヨハネの使命を預言したものではない。

そもそも、イエスを信じる者は全てイエスの弟子である。弟子だからといって、イエスにつきまとう必要性はない。各々が、与えられた場所で、与えられた使命を果たせばよいのである。

洗礼ヨハネの使命は、「整えられた民を主のために用意する」(ルカ1:17) ことであり、聖書を読む限りでは、洗礼ヨハネは使命を完遂したと考えるべきだろう。もし、洗礼ヨハネが使命を完遂できなかったとすれば、イエスは「わたしが再臨する前に、再び洗礼ヨハネがその使命を完遂するために来るだろう」と言われたはず。しかし、新約聖書のどこにも、そのようなことは書かれていない。

よって、洗礼ヨハネの使命に対する原理の考えは否定された。

マタイ11:5に書いてある、イエスが行われた奇跡は、イザヤ35:5~6, 61:1のメシア預言の成就と考えられる。

#### 202頁8~9行目

「ゆえに、イエスは天があらかじめ備えた能力ある群れを探すために、一番先に神殿に入り、祭司長と律法学者たちに福音を伝えたのではなかったか。」

→そのような事実はない。完全にでっち上げである。

#### 202頁11行目

「やむを得ず町の通りに出て、<sup>ほうこう</sup>彷徨する乞食<sup>こじき</sup>どもを呼び集めなければならなかった」

→このような事実はどこにもない。これもでっち上げである。

204頁7～8行目

「彼（洗礼ヨハネ）自身はもちろんのこと、ユダヤ人がイエスの前  
に出る道さえも、みな遮ってしまった」

→結論から言うと、洗礼ヨハネは救われている。

マタイ11:11から、洗礼ヨハネは旧約時代の誰よりも偉大である。  
例えば、アブラハムよりも、洗礼ヨハネのほうが偉大である。アブ  
ラハムは救われている（創世記15:6）。ならば、アブラハムよりも  
偉大な洗礼ヨハネが救われているのは当然である。

これまで述べてきたことから、「イエスが十字架の死を遂げるよ  
うになった大きな要因が、洗礼ヨハネにあった」（『原理講論』204  
頁9行目）という原理の考えは否定される。

#### （四）洗礼ヨハネがエリヤになった理由

創造原理が否定されたので、この箇所の記述も否定される。

#### （五）聖書に対する我々の態度

既に述べたように、この箇所に書かれているような事実はない。

# 第五章 復活論

既に述べたように、聖書は一貫して字義通りに解釈するものである。人間の復活に関しても同様で、比喩的に解釈する必要性がない以上、どんなに信じがたくとも、文字通りに解釈すればよい。

## 第一節 復活

### (一) 死と生に対する聖書的概念

聖書の教えを整理しておく。

(1) アダムの墮落により、瞬時に霊的死（神との断絶）がやってきた。次に、時間をおいて肉体的死がやってきた。

(2) 全ての人は、生まれつき霊的に死んでいる。そして、やがて肉体的に死ぬ。

(3) 信仰により救われた人は、霊的に生きている（神と和解している）。しかし、肉体的死は、生きている間に携拳けいきよにあずからない限り、避けられない（ヘブル9:27）。

（携拳とは、信者が天に上げられること。大患難時代の前に突然起こる。その日時は誰も知らない。父なる神だけがご存じ。）

### (二) 墮落による死

210頁9行目

「神は本来、人間が墮落しなくても、老衰すればその肉身は土に帰るように創造されたのである。」

→もしそうであれば、なぜ神はわざわざ、墮落したアダムに対して

「あなたは、顔に汗を流して糧を得、ついにはその大地に帰る。あなたはそこから取られたのだから。あなたは土のちりだから、土のちりに帰るのだ」(創世記3:19)と言われたのか。聖書のこのことばから、人間は本来、土に帰るように創造されていたとは考えられない。

また、老衰するということは、からだ次第に弱り衰えていくということである。そのような人間を見て、神は喜ばれるのか？ 弱り衰えていく人間を見て喜ぶなど、異常である。

### (三) 復活の意義

213頁2～5行目

「我々は…既に他界した信徒たちの復活は、すなわち土に分解されてしまったその肉身在、再び原状どおりによみがえることによって成就されるものと信じていた。」

→聖書の記述から、復活のからだ(栄光のからだ)は、土に帰る直前の姿に戻るわけではなく、また、生きていたときの姿と全く同じというわけでもないようだ。このことは、復活されたイエスの姿を、弟子たちは一目見てすぐに理解したわけではなかったことから推察される。

救われている人の復活のからだについて。

復活のからだとは、栄光のからだなのだから、病気にならないからだ、老化しないからだ、疲労しないからだであり、食べ物を食べたり、睡眠をとる必要性のないからだであろう。(食べる自由はある。)

また、結婚はしないが、男女の性別はある。



## 第二節 復活摂理

### (一) 復活摂理はいかになされるか

216頁5～9行目

「第一に、復活摂理の歴史において、その使命的な責任をもった人物たちが、たとえ彼ら自身の責任分担を完遂できなかつたとしても、彼らは天のみ旨のために忠誠を尽くしたので、それだけ墮落人間が、神と心情的な因縁を結ぶことができる基盤を広めてきたのである。したがって、後世の人間たちは、歴史の流れに従い、それ以前の預言者や義人が築きあげた心情的な基台によって、復帰摂理の時代的な恵沢をもっと受けるようになるのである。」

→復活（復帰）摂理において、使命的な責任を持った人物が自身の責任分担を果たせなかつたならば、その人物は間接主管圏にいるのだから、神はその行為の結果だけによって主管されるはず。これは創造原理がそのようになっているからである。つまり、いくら忠誠を尽くした所で、責任分担を果たせなかつたなら、神は復活（復帰）摂理を何も進めることはできない。しかしこの部分では、心情的な基台によって、復活（復帰）摂理を進められるとしている。これは矛盾である。

### (二) 地上人に対する復活摂理

#### (1) 復活基台摂理

217頁9～12行目

435頁の「摂理的同時性の時代の対照表」を見ると、一番上の象徴的同時性時代が2221年ある。一方、原理は復活基台摂理時代は20

00年だという。221年間はどこへ行ったのか？

509頁の「復帰摂理から見た歴史発展表示図」の一番上を見ても、復帰基台摂理時代は2221年となる。アブラハムからヨセフまでの221年はいったい何なのか？

## (2) 蘇生復活摂理

「アブラハムのときからイエスまでの2000年期間」とあるが、435頁の「摂理的同時性の時代の対照表」と509頁の「復帰摂理から見た歴史発展表示図」によると1930年。よって、蘇生復活摂理時代は2000年ではない。

218頁4～6行目

「蘇生復活摂理は、神がこの時代の摂理のために下さった旧約のみ言<sup>ことば</sup>を人間が信じて実践することによって、その責任分担を成し遂げ、義を立てるように摂理されてきたのである。ゆえに、この時代を行義<sup>ぎょうぎ</sup>時代ともいう。」

→旧約時代にも、人間は神に対する信仰によって義とされた。例えば、創世記15:5～6。アブラハムは、「あなたの子孫は星の数ほど増える」という神のことばを信じたので、義とされたのである。何かを実践して義とされたのではない。また、モーセの律法が与えられた後も、人は信仰によって義とされた。これらのことを、パウロは、アブラハムとダビデを例に挙げて論じている（ローマ4:1～8）。

よって、「行義<sup>ぎょうぎ</sup>」という考えは間違っている。

## (2) 長成復活摂理

この長成復活摂理時代も2000年期間とされているが、435頁の「摂

理的同時性の時代の対照表」と509頁の「復帰摂理から見た歴史発展表示図」によると1930年である。よって、長成復活摂理時代は2000年ではない。

218頁13～14行目

「長成復活摂理は、神がこの時代の摂理のために下さった新約のみ言を、人間が信じることによって、その責任分担を完成し、義を立てるように摂理された。ゆえに、この時代を信義時代ともいう。」  
→新約時代に生きる我々は、次の福音を信じれば義とされる。

「イエスが我々の罪のために死なれ、墓に葬られ、三日目に復活し、今も生きておられる」。まさにそのとおりのお方として、イエスに信頼を置くことで、義とされる（救われる）。福音を頭で理解しただけでは救われない。イエスを人格的に信頼して、救われるのである。

新約時代も、恵みと信仰によって救われるという原則は変わらない。

#### (4) 完成復活摂理

「直接、主に侍って」(219頁8行目)、「この時代における人間は再臨主を信じ侍って」(219頁9行目)とあるが、「侍る」という言葉は「傍にひかえる」という意味である(『広辞苑』第七版参照)。全ての統一教会のメンバーが直接、ある個人(文鮮明氏)に侍ることは物理的に不可能である。

もし、「心情的に侍るという意味だ」と反論する人がいたとしても、それは反論になっていない。「侍る」という言葉の意味を理解すればわかること。

よって、「侍<sup>じぎ</sup>義」という考えは否定される。

以上のことから、復活（復帰）摂理は全て否定された。

#### (5) 天国と楽園

220頁8～10行目

「当時のすべての人間が、最後までだれも信じてくれなかった中で、自分を信じてくれた、たった一人の十字架の同伴者であった強盗に、イエスは共に楽園に入ることを許されたのである（ルカ23:43）。」  
→イエスの弟子たちは多くいた。

まともに聖書を読んでいたら、こんな間違いは絶対にしない。わざと嘘をついているとしか思えない。非常に悪質である。

#### (四) 再臨復活から見た輪廻説

231頁9行目

「復帰摂理は個人から出発して、家庭と民族を経て、世界を越え、宇宙まで復帰していくのである。」

→復帰摂理は、個人→家庭→民族→世界→宇宙という順序で行われるとあるが、文鮮明氏と韓鶴子女史ハンハクジャの家庭では、彼らの11番目の子（6番目の息子）である文榮進氏ムンヨンジンが、1999年10月27日にネバダ州リノで、旅先のホテルの17階から投身自殺したらしい。（統一教会側は事故だと発表しているが、彼の関係者による証言や警察の調べにより、自殺であることは間違いのないと思われる。）これは、原理的に考えると、彼が父親の文鮮明氏と心情的に一体となれなかったことが原因であると思われられない。よって、文鮮明氏と韓鶴子女史の家庭での復帰摂理は失敗したことになる。（『原理講論』432頁12～14行目によれば、「メシヤのための家庭的な基台」が崩れたこと

になる。これではもはや、「メシヤのための宇宙的な基台」を復歸し、地上天国を実現するための時間はないだろう。事実、文鮮明氏が生きている間に地上天国は実現しなかった。故郷の朝鮮戦争さえ、終わらせることはできなかった。）

また、彼は自殺する前に結婚していたので、個性完成していたことになる。それでも自殺したということは、「個性を完成した人間は、神の喜怒哀楽を直ちにそれ自体のものとして感ずるようになり、神が悲しむ犯罪行為をすることができなくなる」（『原理講論』66頁17行目～67頁1行目）という創造原理が、実証的に否定されたことになる。「最終的な真理」として解明されたはずの創造原理が実証的に否定されたということは、必然的に、文鮮明氏は偽メシアであるという結論を導く。

### 第三節 再臨復活による宗教統一

#### (二) 再臨復活による他のすべての宗教の統一

この箇所での原理の論理も飛躍していて、全く成り立たない。

キリスト教でいう再臨主（再臨のメシア）はイエス本人であり、その限りである。他の誰にもならないし、他の誰でもない。弥勒仏みろくや真人しんじんになることなどないのである。

この復活論は、創造原理、墮落論、及び罪の清算という考えを基にしている。しかし、既に述べてきたように、創造原理も墮落論も罪の清算という考えも全て否定されたので、必然的に復活論も否定される。よって、この章も全く無意味である。

## 第六章 予定論

神が全知なら、神は被造世界を創造する前から、全ての被造物の行く末を完全に知っていることになる。例えば、アダムが神との契約を破ってしまうことも、イエスが十字架上で死なれるのも、最初から完全に知っていたことになる。

また、「予定する」という意味は、「あらかじめ決めておく」ということだから、「神が予定していた」というのは、「実際にそのことが起こる前に、神が前もって決めていた」ということである。これは、人間の行動の全てを前もって決めていたことにはならない。(事実、聖書にはそのような教えはない。) 知っていることと、決めておくことはイコールにはならない。

よって、人間が努力することには意味がある。

また、人間は、遠ければ遠いほど、その未来のことを正確に予測する(知る)ことはできない。よって、人間の視点から見たら、未来がどうなるのかわからない(神が何を予定されているのかわからない)のだから、人間が努力することには意味がある。

### 第一節 み旨に対する予定

創世記6:6やサムエル記第一15:11を見ると、神は悔やんでいるように思える。しかし、サムエル記第一15:29を見ると、「実に、イスラエルの栄光である方は、偽ることもなく、悔やむこともない。この方は人間ではないので、悔やむことがない」とある。これをどう考えればよいのか。

神は人間ではないので、悔やむことがない。「悔やむ」と書かれている箇所は、人間が神の心の痛みを理解しやすいように、「悔や

む」という人間の言葉が使われていると考えればよい。

## 第二節 み旨成就に対する予定

243頁12～14行目

「み旨成就は、どこまでも相対的であるので、神がなさる95パーセントの責任分担に、その中心人物が担当すべき5パーセントの責任分担が加担されて、初めて、完成されるように予定される」

→聖書は、この原理を明確に否定している。それがローマ11:36の聖句である。つまり、「すべてのものが神から発し、神によって成り、神に至る」のである。

## 第三節 人間に対する予定

245頁7～8行目

「ある人物を中心とした神の『み旨成就』においては、人間自身があくまでもその責任分担を果たさなければならないという、<sup>ひっす</sup>必須的な要件がついている。」

→これは、神おひとりでは誰も救えないのだから、我々人間が頑張<sup>ひっす</sup>って神に協力してあげなければならない、という理屈である。つまり、神は非力だと言っているのである。非常に傲慢<sup>ごうまん</sup>である。ここでも、原理は、神おひとりが主権者であることを否定している。

また、既に述べたように、原理の責任分担論は否定されたので、原理の予定論も成り立たない。(本書91頁を参照せよ。)

246頁10～11行目

「墮落人間はだれでもみな、救いを受けるように予定されているのである(ペテロⅡ3:9)。」

→この聖句が言っているのは、神は誰も滅びないことを「望んでいる」であって、「予定している」ではない。聖書全体の文脈からもわかること。

原理の予定論の結論を受け容れるなら、神にも予測不可能なことがあるのだから、神は人間と本質的に同一な存在でなければならない。これは結局、汎神論的な神観である。そして神の全知全能性も否定される。

一方、有神論的な神観では、神は全知全能なので、必然的に人間とは本質的に異なる、異質な存在となる。そして神は被造世界を超越した存在となる。

統一原理では、この2種類の神観がごちゃ混ぜになっている。しかしこの2種類は、絶対に止揚<sup>しやう</sup>も統一もできない。論理的に完全に矛盾するからである（本書50～51頁も参照せよ）。統一原理という体系めいたものは、この問題を抱えている限り、絶対に成立しないのである。



# 第七章 キリスト論

## 第二節 創造目的を完成した人間とイエス

### (一) 生命の木復帰から見た完成したアダムとイエス

原理は、黙示録22章14節のいのちの木はイエスのことだと言っているが、黙示録22章14節のいのちの木と、黙示録22章2節のいのちの木は同じである。黙示録22章2節から、いのちの木は複数あることがわかる。ならば、イエスはいったい何人いるのか？

### (二) 創造目的の完成から見た人間とイエス

この箇所の記述によると、イエスは創造理想を完成した男性であることになっている。しかし復帰原理によると、墮落論より、アダムとエバは長成期完成級で墮落したのだから、それを蕩滅復帰とうげんしていくイエスは、長成期完成級まで成長したときに結婚し、それから夫婦二人で完成期を昇り、そうしてやっと直接主管圏に入ることができる、つまり創造理想を完成した人間になれるはず。よって、原理のキリスト論と復帰原理は矛盾している。

256頁15行目～257頁2行目

「原理は、これまで多くの信徒たちが信じてきたように、イエスを神であると信じる信仰に対しては異議がない。なぜなら、完成した人間が神と一体であるということは事実だからである。」

→聖書を普通に読めば、イエスは神ご自身であるとわかる。それゆえに、正統的なクリスチャンは、イエスを神と信じているのであっ

て、原理が言うように、神と心情において一体（『原理講論』第一章第五節（二）（3）「直接主管圏」参照）だから神だと信じているのでは全くない。

実際に聖書を読んでも、イエスが父なる神と心情的に一体化しているから、イエスを神だと言うという解釈は考えられない。

もしイエスが父なる神と心情的に一体化しているなら、イエスを十字架にかけなければならなかった父なる神の心情を、イエスは痛いほど感じて理解しているはずだから、イエスは十字架上で「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」（マタイの福音書27章46節）などと言うはずがない。よって、このことから、イエスは、原理の言う「創造目的を完成した人間」ではなく、個性完成すらしていなかったことがわかる。（実際、文鮮明氏は、霊界にいるイエスに、1970年代前半に、地上にいる韓国人女性との結婚をさせてやった、と言っている。これは、原理的に言えば、その時点でイエスは長成期完成級にいた、つまり、個性完成していなかったという何よりの証拠である。）

イエスが個性完成していないのなら、イエスは未完成期にいたことになる。しかしそれでは、霊的<sup>まこと</sup>真の父とすらなり得ないから、イエスは霊的救いも行えない。すると、イエスを救い主と信じて、何の意味もなかったことになる。よって、文氏の証言により、原理の新生論（<sup>じゅうせい</sup>重生論）（『原理講論』前編第七章第四節（一））も否定される。

（三）イエスは神御自身であられるのだろうか

258頁8行目

「前に論証したように、イエスは創造目的を完成した人間として、

神と一体であられる」

→この論証は、復帰原理により否定された。イエスは創造目的を完成していない。つまり、神と一体ではない。

258頁8～9行目

「イエスは…あくまでも神御自身となることはできない」

→これにより、神と一体であっても、イエスと神はあくまでも別の存在であることになる。しかし、文鮮明著『御旨と世界』43頁10行目には「アダムと神は一体となるのであるから神自身である」とある。これは矛盾する。原理を解明したはずの人が、こんな基本的で重要なことを間違えるはずがない。

もし文鮮明氏の言うことが正しければ、個性完成した人間は皆、神自身になることになる。すると文鮮明氏自身はもちろん、妻である韓鶴子女史も、文字通り神自身になる。これは多神論であり、原理の言う一神論と矛盾する。結局、文氏も原理も自己矛盾に陥っている。

259頁14～15行目

「イエスは…原罪がない」

→原理は、イエスが無原罪の人間として来られた方だというのは認めているが、なぜ無原罪の人間として生まれることができたのかということを明確に説明していない。(統一教会の祝福修練会では、祭司ザカリヤとマリアの不倫によって生まれた子がイエスであると説明されているようだが、不倫というモーセの律法に違反する行為で無原罪の人間が生まれるはずがなかろう。)

260頁2行目

「イエスは、復活後にも霊界で、地上におられたときと同様、神に

祈禱しておられる（ロマ8:34）。」

→地上におられたときと同様ではない。地上生涯の間は主に預言者としての働きをされていたが、昇天されたイエスは、大祭司として父なる神にとりなしをしておられるのである（ヘブル人への手紙参照）。

260頁4～5行目

「イエスも、神を父と呼び、自ら神でないことを明らかにしておられる（マタイ27:46, ヨハネ17:1）。」

→神を父と呼ぶから、イエスは神でない、という論理は成り立たない。これは、三位一体の概念を誤解している所に原因があると思われる。（三位一体の定義は本書25頁。）

260頁5～6行目

「もしも、イエスが神御自身であるならば、どうして、神がサタンの試練を受け、また、サタンから追われて十字架につけられるなどということがあり得るだろうか。」

→(1) まず、「どうして神がサタンの試練を受けるのか」という考え自体、間違っている。イエスは神であり人である。つまり、イエスは、メシア（神であり人であるお方）として来られた。メシアがどういうお方なのかは、旧約聖書に預言されている。サタンはその預言を知っていたので、十字架以外の救いの方法（神としての特権の行使）をイエスに提示し、メシアとしての資格を失わせようとした。しかし、イエスは神のことばによって勝利された。

また、イエスはただ単にサタンの試みにあわれただけではない。この試みにあわれたことにより、試みにあう人間の弱さを理解してくださるお方だとわかる（ヘブル4:15）。

つまり、サタンの試みにあわれたのは、父なる神の御心みこころにかな

っていたということである。

(2) イエスはサタンから追われて十字架につけられたというのは正しくない。イエスは、旧約聖書のメシア預言を成就し、メシアとして、最後のアダムとして、イエスを信じる全ての人を救うために、自ら十字架についてくださったのである（ピリピ 2:6～11）。

#### 第四節 新生論と三位一体論

##### (一) 新生論

264頁2～3行目

「イエスが、ニコデモに言われたみ<sup>ことば</sup>言どおり、墮落した人間は原罪がない子女として新たに生まれ直さなければ、神の国を見ることができない」

→イエスはニコデモに、御<sup>み</sup>霊<sup>たま</sup>によって霊的に新しく生まれること、この箇所（ヨハネ3:1～15）では、御子イエスを信じるのが、「新しく生まれる」ことだと言われたのである。原理の言うような話は一切されていない。

265頁4行目

「聖霊は真の母として、また後のエバ<sup>のち</sup>として来られた方である」  
→聖霊に性別はない。なぜなら、聖霊を表すギリシャ語「 Pneuma πνεῦμα」は中性名詞だから。

また、この原理から、聖霊は一人の人間の女性であることがわかる。しかし、その名は何なのか、全く明らかにされていない。

265頁5行目

「聖霊は女性神であられる」

→この「神」という言葉が文字通りなら、原理は多神論である。

もしこの「神」が、原理の言う「神と一体であるから神とも言える」（『原理講論』258頁8～9行目）という意味なら、その原理は既に否定されたので、やはり、聖霊が女性神であるという理屈は成り立たない。

265頁5～6行目

「聖霊を受けなくては、イエスの前に新婦として立つことができない」

→イエスの妻は聖霊以外にもいるのか？ イエスは一夫多妻なのか？（原理によれば、聖霊はイエスの妻であるはず。なぜなら、イエスと聖霊は真の父母なのだから。）

『原理講論』265頁6～7行目には、「聖霊は慰労と感動の働きをなさる」「聖霊は罪の悔い改めの業<sup>わざ</sup>をする」とある。

しかし、使徒の働き13章2節での聖霊のみわざは、慰労でも感動でも罪の悔い改めでもない。特に、同9節では聖霊は憤っている。怒って叱責するという働きは、原理では男性が行うものである。

よって、聖霊が女性であるという原理の主張は否定された。

ここで、「女性には男性性相がある」（『原理講論』43頁12行目）と言って反論する人がいるかもしれない。しかし、人間における陽性と陰性の二性性相は、神が二性性相であることを前提に導かれている。そして、既に述べたように、神の二性性相は否定されたので、結局、この反論は成り立たない。

結局、聖霊とはどこの誰なのか、原理は全く解明できていない。

なぜ、これほど重要なことが明らかにされていないのか？ イエス（原理によると「真の父」）の妻である聖霊（原理によると「真

の母」)の素性が一切明らかにされていないというのは、どう考えてもおかしい。

原理の言う「霊的新生」を体験した人は、どこの誰だか全くわからない女性によって、その体験をしたことになる。(これは再臨の聖霊(文鮮明氏の妻)の話ではなく、2000年前の話なので、誤解のないように。)

## (二) 三位一体論

原理の三位一体論は創造原理を土台にして導かれているが、創造原理は既に否定されたので、原理の三位一体論も否定される。

統一教会では、霊肉両方の救い、つまり原罪を完全に清算するために、「祝福」という儀式を行っている。しかし、「罪を清算する」ことは不可能なので、「祝福」には原理的に何の意味もない。よって、文鮮明氏は偽メシアだと証明された。そして、「祝福」には原理的に何の意味もない以上、「祝福二世」にも、その子孫にも、永遠に原罪は残ったまま、ということになる。

これまで述べてきたことから、『原理講論』の前編に書かれていることは、その根本から全て間違っていることが証明された。すると、後編の内容は検討するまでもなく無意味だとわかるだろう。しかし、統一原理が全くのでたらめであることを徹底的に明らかにするためにも、私が知る限りの基本的なことについては、誤りや矛盾などを指摘しておこうと思う。

# 後編

## 緒論

統一原理の三本柱は、創造原理、墮落論、復帰原理である。復帰原理は再創造原理（創造原理のやり直し）なので、創造原理が否定されれば、復帰原理は自動的に否定される。

そして、既に述べたように、創造原理は否定されたので、復帰原理も自動的に否定される。

### （一）蕩減復帰原理

#### （1）蕩減復帰

273頁14～16行目

「どのようなものであっても、その本来の位置と状態を失ったとき、それらを本来の位置と状態にまで復帰しようとするれば、必ずそこに、その必要を埋めるに足る何らかの条件を立てなければならない。このような条件を立てることを『蕩減』<sup>とうげん</sup>というのである。」

→「蕩減」<sup>とうげん</sup>（탕감）という言葉の意味は、韓国語の辞書には「負債や料金、税金のたぐいの納めなければならないものを帳消しにすること」と書いてある。

274頁1～3行目

「互いに愛しあっていた二人の人間が、何かのはずみで憎みあうよ



うになったとすれば、このような状態から再び、互いに愛しあっていた元の状態に復帰するためには、彼らは必ず、お互いに謝罪しあうなどのある条件を立てなければならない」

→互いの謝罪によって元の状態に復帰するのではない。(『原理講論』には「謝罪など」と書いてあるが、この「など」という書き方が、くせものである。わざと反駁<sup>はんぱく</sup>させないような書き方である。) 互いが赦し合うことと、再び以前のように愛し合いたいという思いとによって、再び愛し合うことが可能になるのである。それでも、以前と全く同じ状態に戻るわけではない。赦し合うことが必要だったという事実や、その後のお互いの気持ちに変化があるだろうから。よって、言葉の上では「元の状態に戻った」と表現できても、現実には以前と全く同じ状態に戻ることは不可能である。そもそも、何をもって「元の状態に戻った」と考えて良いのか？

また、元のような状態に戻るためには、確かに何か行いを必要とするかもしれない。しかし行いがあったからといって、元のような状態に戻るとも限らない。罪を犯した者が元のような状態に復帰するには、何よりも必ず相手の赦しが必要である。よって、行いは必要条件であったとしても、充分条件ではない。原理は蕩減条件として行いばかり強調する。(これは創造原理の間接主管圏の説明によって理解できる、原理的なこと。しかし文鮮明氏は、愛や心情ばかり強調する。文氏は、自分が解明し、発表したと言っている原理とは矛盾することもある。) しかし、復帰への最大のポイントは、あくまで赦しなのだと思えるべきである。

何をすれば赦しを得られるのかは、そのときの相手の気持ちと自分の強い謝罪や反省の気持ちによるのであって、原理が主張するように、行いそのもの(条件を立てること)によって機械的に位置と状態が元に戻るというのは、事実と合わない。

結局、どんな条件を立てようとも、以前と全く同じ状態に戻るこ

とは絶対にない。では、「以前と同じ状態」とは、厳密にどのような意味なのか？ 『原理講論』には明確な説明はない。

また、復帰原理での「位置」という言葉は、形式的な意味での「位置」だと考えられている。これだけなら、「蕩滅復帰」も可能だと思うが、『原理講論』では、「位置と状態」を元に戻すことを「復帰」だと言っている。結局、原理の言う「蕩滅復帰」とは厳密にはどういう意味なのか、不明である。

第一の蕩滅条件の立て方（「同一のもの」）は形式主義的であり、第二の蕩滅条件の立て方（「より小さいもの」）は心情主義的である。この両者は相容れないし、この2つを認めると、「同一のもの」よりも大きいものを求める場合以外、何でもありになってしまう。しかし、「同一のもの」よりも大きいものを最初から求めることは原理的ではないので、考える必要はないだろう。そうすると、ある蕩滅条件の立て方に対して、どんな言い訳でも通用することになる。これでは、非常にいい加減な信仰生活ができることになる。

例えば、なぜ7日間の断食をすることが蕩滅条件として有効なのか？ その蕩滅条件が有効だと、誰が決めたのか？ もしかしたら、自分で決めたその蕩滅条件は蕩滅条件として有効ではないかもしれない。もしかしたら、的外れなことをやっていたのかもしれない。

この問題を解決するには、本当は誰が蕩滅条件の立て方を決められるのか、ということを考えなければならない。（この点は非常に重要なのだが、『原理講論』には何も記されていない。）

それでは、どの方法によって、どのように条件を立てるべきかは、誰が決められるのだろうか。罪の定義によると、罪とは天法に違反するようになることである（『原理講論』121頁）から、そのための

蕩滅条件を立てる相手は神となる。つまり、どの方法によって、どのくらいの期間、どのように条件を立てるべきかは、神だけが決定権を持っていることになる。

原理によると、人間は神の命令に背くことによって墮落したのだから、墮落人間が蕩滅復帰するためには墮落と反対の経路をたどる、つまり神の命令に従う必要がある。よって、蕩滅条件の立て方を決められるのは、神のみである。しかし、その蕩滅条件を立てるのは人間自身である。この違いを混同しないように。

人間は神に対して罪を犯した。よって、神が提示する方法でなければ、罪の赦しはない。考えてみれば当たり前のことなのだが、これほど重要なことが『原理講論』には全く書かれていないのである。

さて、原理によると、神は次のような方法で蕩滅条件を立てることができると決められたようだ。

(1)「旧約時代には、神の命令である律法（旧約のみ言<sup>ことば</sup>）を守ることによって、蕩滅条件を立てることができる。」

原理は誤解しているが、モーセの律法を守ることで義とされるという教えは旧約聖書にはない。実際、モーセの律法を完全に守れたユダヤ人は一人もいない。「義人はいない。一人もいない。」（ローマ3:10）とパウロが言っているとおりである。

また、パウロが言っているとおり、旧約時代も新約時代と同じで、恵みと信仰によってのみ、人は救われた（義とされた）。律法を守ることで義とされた人は誰もいない（使徒13:38～39, ローマ3:20）。

ここでパウロについて少し触れておく。「パウロ」はラテン名で、ユダヤ名は「サウロ」。サウロはベニヤミン族の出のユダヤ人で、パリサイ人の中でも非常に優秀な人物だった。彼の師匠は、紀元1世紀最大のラビと言われるガマリエルである。サウロは旧約聖書に

精通しており、回心する前は祭司長からの信頼も得ていた。実際、サウロはラビだったと考えられる。

(2)「新約時代には、新約のみ言<sup>ことば</sup>を信じることによって、蕩滅条件を立てることができ」

新約のみ言<sup>ことば</sup>の中で、人が救われるために最も重要な内容は、第一コリント15:3~4の福音、つまり、「キリストは、聖書に書いてあるとおりに、私たちの罪のために死なれたこと、また、葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおりに、三日目によみがえられたこと」を信じることである。

この福音は旧約聖書の教えと連続している。モーセ五書（創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記）もイエスを証ししている（ヨハネ5:45~47）、旧約聖書全体もイエスを証ししている（ヨハネ5:39、ルカ24:27、使徒17:11、18:24~28など）。

原理は、旧約聖書と新約聖書の間には断絶（ギャップ）があると主張するが、それは間違っている。旧約聖書と新約聖書は連続している。

では、文鮮明氏が誕生してからはどうなるのかというと、結局、(2)の方法によって、つまり、神であり人であるイエスというお方が我々の罪のために死なれ、墓に葬られ、三日目に復活されたことを信じることによってのみ、罪が赦される（原理の言い方をすれば、蕩滅復帰できる）。

なぜなら、神ご自身がそのように決められたからである。その他の方法で蕩滅復帰はできない（罪の赦しを得られない）。

よって、文鮮明氏をメシアと信じることは、神から見たら「的外れ」なのである。なぜなら、文鮮明氏はイエス本人ではないから。新約聖書は、イエス以外の者がメシアになる可能性を少しも認めていない。

このように、原理は原理によって否定されるのである。

実際の統一教会での信仰生活では、文氏やメンバーが個人的に勝手に蕩減条件の立て方を決めている。これは完全に間違ったやり方である。つまり、神から認められない、的外れなやり方である。神に認めていただくためには、神が提示された方法を採用するしかない。

以上のことから、統一教会での信仰生活は、統一原理の観点からは全て無意味となる。原理は完全に自己破滅しているのである。

ここで、ヤコブの手紙には「人は行いによって義と認められるのであって、信仰だけによるのではない」（ヤコブ2:24）と書いてあることから、パウロの言う「人は信仰のみによって救われる」と矛盾するのではないかと考える人もいるかもしれない。

この疑問は、パウロの言う「行い」の意味とヤコブの言う「行い」の意味の違いを理解すれば、解決する。

パウロの言う「行い」とは、「律法を守り行うこと」である。一方、ヤコブの言う「行い」とは、「愛と信仰に基づく行い」である。パウロは救いの教理を論じているが、ヤコブは「死んだ信仰」と「生きた信仰」の違いを論じている。よって、両者は矛盾しない。

275頁4～5行目

「我々は数滴の水を頭の上から注がれ、洗礼を受けたという蕩減条件を立てることにより、イエスと聖霊によって新生したという立場を復帰することができる」

→人はイエスを信じた瞬間に救われ、新生するのであって、洗礼を受けることで新生するのではない。

276頁8行目

「神を慰勞してあげなければならない」

→これは神を人間的に見ている証拠。「あげなければならない」という表現は、神を自分よりも低く見なしている、神への冒瀆<sup>ぼうとく</sup>である。

## (2) メシヤのための基台

### ①信仰基台

原理によると、墮落人間が復歸していくためには、必ず「メシヤのための基台＝信仰基台＋実体基台」を造成しなければならない。そして、信仰基台をつくるためには、必ず「数理的な蕩減期間<sup>とうげん</sup>」を立てなければならないのに、聖書からは数多くの例外を見つけることができる。(あまりにも多いので、とても例外とは見なせないが。)

例えば、マタイの福音書に書かれているイエスの奇跡にあずかった者たちが、イエスに出会う前に「数理的な蕩減期間」を立てたようなことは、聖書のどこにも書かれていない。そんな数理的な期間はなかったのではないか？ つまり、彼らはメシアを迎えるために必要な数理的な蕩減期間を立てずに、メシアを迎えていることになるかもしれない。しかし、これは原理と合わない。よって、「メシヤのための基台＝信仰基台＋実体基台」という原理を肯定する根拠は明確にはない。

また、数理的な蕩減期間が存在しなければならない理由は、創造原理に基づいている（『原理講論』後編第三章第二節（四））。しかし、既に述べたように、創造原理は全て否定された。よって、数理的な蕩減期間が存在しなければならない理由は何もない。

ゆえに、信仰基台の説明は成り立たない。

## ②実体基台

原理によると、実体基台を立てるためには「墮落性を脱ぐための蕩減条件」を立てなければならない。その理由は、原理によると、人間は墮落することで墮落性本性をもつようになったからである。しかし、墮落論の所（115～116頁）で既に述べたように、墮落性本性は否定されたので、「墮落性を脱ぐための蕩減条件」が必要な理由は何もない。また、墮落した人間が、原理の言うような成長期間を全うし完成実体となるという教理は聖書にはないので、結局、実体基台の説明は成り立たない。

以上のことから、信仰基台の説明も実体基台の説明も成り立たないので、「メシヤのための基台」の説明も成り立たない。ということは、墮落人間はメシアを迎えるために何をしなければならないのか、全くわからないことになる。つまり、後編の復帰摂理の説明も根拠が何もないということ。これが統一原理である。

### （二）復帰摂理路程

原理によると、アダムからアブラハムまでの2000年を、アブラハムからイエスまでの2000年で蕩減復帰している。また、アブラハムからイエスまでの2000年を、イエスからその再臨までの2000年で蕩減復帰している。

しかし、原理によると、2000年を一度奪われたなら、それを再び蕩減条件として立てるには、より大きな蕩減条件、つまり、少なくとも2000年より長い期間を必要とするはず。しかし、2000年で蕩減復帰している。これは矛盾である。

よって、復帰摂理路程の説明は成り立たない。原理はどこまでも自己矛盾している。摂理的同時性というのも単なるこじつけにすぎない。

### (三) 復帰摂理歴史と「私」

これまで述べてきたことから、文鮮明氏は自称再臨主(偽メシア)であることが証明された。よって、「彼を信じ、彼に侍り奉り、彼と一つになることによって、彼と共に、復帰摂理歴史の縦的な蕩滅条件を横的に立て得た立場に」立つことは不可能である。このような考えはただの誇大妄想にすぎない。

一方、イエスをキリストと信じる者は、キリストによって、圧倒的な勝利者である(ローマ8:31~39)。なぜなら、神が味方だからである。



# 第一章 復歸基台摂理時代

## 第一節 アダムの家庭を中心とする復歸摂理

### (一) 信仰基台

291頁13～15行目

「この二つの中でいずれがより原理的であり，より許し得る行為であるかといえは，最初の愛による墮落行為よりも二番目の愛による墮落行為であると見なければならぬ」

→原理的に言って，二番目の行為のほうが最初の行為よりも非原理的である。なぜなら，墮落するとき，エバは間接主管圏にいた。間接主管圏にいるエバに対し，神はエバの行為の動機（心情）とは関係なく，行為の結果のみによって主管する。そうすると，行為の結果は，時ならぬ時に淫行を一回したか，二回したか，ということだけである。よって，神から見たら二度目の（アダムの）行為のほうが，より非原理的で，より許しがたい行為となってしまう。ゆえに，創造原理と墮落論を肯定するなら，この箇所の説明は間違っていることになる。

また，墮落論によると，一度目の行為では霊的に墮落しただけであり，肉的には墮落していなかった。しかし二度目の行為では，アダムのエバも霊人体と肉身を持っている以上，霊肉両方で墮落してしまったことになる。このことから，やはり二番目の行為のほうが，より非原理的で許しがたい。

さらに，次のようにも考えられる。エバは一度目の行為によって，時ならぬ時に淫行をするのは神の創造目的に反するという知恵を，天使長から得た。ならば，いくら恐怖心に駆られたからといって，

もう一度、アダムと時ならぬ時の行為をするのは、当然神の創造目的に反することだと知っていたはずである。にもかかわらず二度目の行為に及んだというのは、あまりにも愚かであろう。よって、二度目の行為のほうが、より非原理的で、許しがたいという結論にならざるを得ない。

以上のことから、二度目の行為のほうがより原理的で、より許し得ると考えるのは間違っている。

292頁5～7行目

「カインは愛の初めの実であるので、その最初につまずきであった天使長との愛による墮落行為を表徴する悪の表示体として、サタンと相対する立場に立てられた」

→上記のことから、カインは善の表示体とならねばならない。

292頁7～8行目

「アベルは愛の二番目の実であるがゆえに、その二番目の過ちであったアダムとの愛による墮落行為を表徴する善の表示体として、神と対応することができる立場に立てられた」

→上記と同様に、アベルは悪の表示体とならねばならない。

292頁13～14行目

「神はサタンが未練をもって対応するカインよりも、アベルと対応することを選び給うた」

→そのような教えは聖書にない。

原理は、その証拠として創世記4:7を挙げているが、この聖句は原理の主張を裏付ける証拠にはなっていない。創世記4:7で、神はカインの問題を指摘し、「そのままじゃダメだよ」と言っておられるのである。

神が、アベルのささげた供え物は受けられ、カインのささげた供え物は受けられなかったのは、信仰によって血のいけにえをささげたかどうかという問題であった。血を流すことなしに、罪の赦しはない（レビ記17:11，ヘブル9:22）。「血を流すこと」が、神が人間に対して提示された、罪を贖う方法だった。

原理によると、「信仰基台」を復帰するには、必ず「数理的な蕩減期間」を立てなければならない（『原理講論』緒論（一）（2）①と後編第三章第二節（四））はずなのに、アダムの家庭では何も無い。435頁の「摂理的同時性の時代の対照表」には、アダムの所に12, 4, 21, 40とあるのに、290～294頁（後編第一章第一節（一））には一つも書かれていない。聖書にもそれらしい数字は何も書かれていない。アダムの家庭での数字は後の復帰摂理の全てに影響を及ぼす重大なものなのに、なぜ何も書いていないのか？ 明らかにおかしい。

## （二）実体基台

296頁8～9行目

「必ずカイン型の存在がアベル型の存在に従順に屈伏しなければならない」

→既に述べたように、このようなカイン・アベルの関係は否定された。原理によれば、本当は、アベル型の存在がカイン型の存在に従順に屈伏しなければならないのである。

よって、これ以降の全ての復帰摂理は成り立たないことが証明された。当然、統一教会での信仰生活におけるカイン・アベルという関係も間違っている。原理的には、アベル・カインという、正反対

の関係にならねばならない。

以上のことから、「アダムの家庭を中心とする復帰摂理」は成り立たないことが証明された。

## 第二節 ノアの家庭を中心とする復帰摂理

### (一) 信仰基台

303頁9行目

「山の頂上に箱舟をつくった」

→そのようなことは聖書に書いてない。おそらく違うだろう。

304頁14行目

「アダムの家庭の八大家族」

→いったい誰のことか？

435頁の「摂理的同時性の時代の対照表」には、ノアの所の蕩滅期間が120年、40日、21日、40日となっているが、4番目の40日はどこから出て来たのか？ 聖書には全く書かれていない。

### (二) 実体基台

310頁5～9行目

原理によると、ノアが裸で寝ていたことを恥ずかしく思ったハムが、セムとヤフェテを扇動し、彼らもハムと同じように、ノアの裸を恥ずかしく思ったことが罪となったとある。

しかし、創世記9:26～27を見ると、ノアはセムとヤフェテを祝福

している。これは矛盾である。

よって、ノアの家庭における実体基台の説明は成立しない。

以上のことから、「ノアの家庭を中心とする復帰摂理」は成り立たないことが証明された。

### 第三節 アブラハムの家庭を中心とする復帰摂理

#### (一) 信仰基台

#### (2) 信仰基台を復帰するための条件物

##### ①アブラハムの象徴献祭

320頁9～10行目

「ある日、洗礼ヨハネは、イエスが歩いてこられるのを見て、『見よ、世の罪を取り除く神の小羊』(ヨハネ1:29)と言って、イエスが長成使命出発者であられることを、<sup>あかし</sup>証した」

→紀元1世紀のユダヤ人たちは「小羊」について2つの概念を持っていた。一つは過越の小羊という概念で、これは出エジプト記12章から出て来た概念。もう一つはメシア的小羊という概念で、これはイザヤ書53章から出て来た概念である。洗礼ヨハネは両方の意味で、イエスを「神の小羊」と呼んだ。(参考文献：中川健一著『クレイ聖書解説コレクション「ヨハネの福音書」』紙版、ハーベスト・タイム・ミニストリーズ、2016年、22頁。)

322頁1行目～324頁6行目

原理は、アブラハムが鳩を裂かなかったことが罪になったと言っ

ているが、聖書はそんなことは教えていない。後にイスラエルの民に与えられたモーセの律法でも、鳩は、牛や羊ややぎとは違って、切り分ける必要がないとされている（レビ記1:14～17, 5:7～10）。

よって、アブラハムは「象徴献祭」に失敗したという原理の主張は成り立たない。

## ②アブラハムのイサク献祭

325頁16行目～326頁15行目

原理はこの箇所では、アブラハムが「象徴献祭」に失敗したのち、再び復帰摂理の中心人物として立てられ得ることを説明したつもりになっている。しかし、どのように説明しようとも、『原理講論』325頁11～14行目の記述と折り合いをつけることは不可能。（『原理講論』に書いてある説明が不十分だという意味ではなく、説明しようとする自体が原理に反する、という意味。）よって、アブラハムが失敗したことにより、神は矛盾を抱えることになってしまった。神も原理原則を離れて摂理できない以上、神はこの問題を解決できない。しかし、原理では解決したつもりになっている。

### （二）実体基台

332頁6～7行目

「ヤコブは…エサウから長子の嗣業を奪ったのであるが（創25:34）」  
→ヤコブは長子の権利を奪っていない。エサウが自分の意志で売った（創世記25:33）。

332頁11～12行目

「ヤコブは…ハランに行って、21年間苦勞しながら…カナンに帰っ

てきた」

→21年間ではなく，20年間（創世記31:38）。

アブラハムの家庭における信仰基台のための数理的な蕩減期間は  
何一つとしてない。イサク献祭の3日間，ハランでの20年間は，い  
ずれも12数，4数，21数，40数ではないので，数理的な蕩減期間に  
はならない。

よって，「アブラハムの家庭を中心とする復帰摂理」は成り立た  
ないことが証明された。

以上のことから，この第一章における復帰摂理はどれも成り立た  
ないことが証明された。

この後の摂理的同時性においても数理的な蕩減期間が12数，4数，  
21数，40数以外になることがあるが，これは明らかに原理に反する。  
メンバーや元メンバーの人は，信仰生活中に立てた蕩減期間を思い  
出して欲しい。12日間の祈禱を，よく祈ったからと言って勝手に10  
日間で終わらせたりできただろうか。12日間と決めたら必ず12日間  
続けたはずであり，続けなければならなかったはずである。これは，  
行う人間が何人であろうと，決して変えることのできない原理であ  
る。蕩減期間に曖昧さなどあってはならない。

実際，文鮮明氏は「原理に外れた例外はとることができないし，  
原理を侵す者を許すことのできない先生です」（『韓鶴子女史御言選  
集 愛の世界』121頁）と語っている。

## 第二章 モーセとイエスを中心とする復帰摂理

「モーセを中心とする復帰摂理」も「イエスを中心とする復帰摂理」も、それまでの復帰摂理、つまり、アダム、ノア、アブラハムを中心とする復帰摂理が成り立つという前提で話が進められている。しかし、既に述べたように、アダム、ノア、アブラハムでの復帰摂理は成り立たないので、必然的に、「モーセとイエスを中心とする復帰摂理」も成り立たない。

### 第二節 モーセを中心とする復帰摂理

#### (二) モーセを中心とする民族的カナン復帰路程

435頁の「摂理的同時性の時代の対照表」を見れば、ノアに対する摂理とモーセに対する摂理が同時性になっている。そこで、ノアの場合とモーセの場合を比較してみる。(後編第三章第三節(三)には「モーセはノアの立場であった」とも書いてある。)

復帰原理によると、ノアの家では、ノアが信仰基台を立てることに成功しても、ハムが失敗したことにより、ノアの家での摂理はできなくなった。

モーセの場合も同様に考えると、モーセは信仰基台を立てることに成功したが、イスラエル民族がモーセを誤解したために、モーセを中心人物とする復帰摂理はできなくなるはずである。しかし『原理講論』には、第二次、第三次まで延長したと書かれている。なぜそんなことが可能なのか？ 摂理的同時性から考えれば、モーセ路



程が第三次まで延長することはあり得ないはず。

『原理講論』後編第二章第一節には、モーセ路程はヤコブ路程を見本としたものだと書かれているが、ヤコブと同時性をなすのはモーセではない。

### (1) 第一次民族のカナン復帰路程

#### ②実体基台

358頁11～17行目

出エジプト記13章17節の「近道」を通れば、10日もあればカナンの地に到着するらしい。しかし、原理では21日路程となっている。21日とする根拠はどこから出て来るのか？

### (2) 第二次民族のカナン復帰路程

#### ②実体基台

361頁10～13行目

「イスラエル民族が…エジプト苦役400年の蕩滅期間を全部満たしたにもかかわらず、その上になお、30年間に苦役されることにより（出エ12:41）」

→エジプト滞在期間が430年、その中の400年が苦役の期間。430年間の苦役ではない。

### (3) 第三次民族のカナン復帰路程

#### ②実体基台

「モーセを中心とする実体基台」では、岩（盤石）を二度打ったことが問題だとされているが、神はモーセに「岩に命じれば、岩は水を出す」（民数記20:8）と言われただけなので、岩を打つ回数（一度打ったか、二度打ったか）は、問題ではない。罪とされたのは、岩に命じるだけで水は出るという神のことばを、モーセが信頼しなかったことである（民数記20:12）。

### 第三節 イエスを中心とする復帰摂理

申命記18章18節の「モーセのような一人の預言者」とは、民数記12:5～8に記されているように、幻や夢を通してではなく、神と「口と口で語り」、ヤハウエのありのままの姿を見る預言者であるという意味である。原理の言うように、モーセのような路程を歩まなければならないという意味ではない。

ヨハネの福音書5章19節は、イエスは父なる神と同じことを行うという意味で、イエスの神性宣言（イエスは神ご自身であるという宣言）にもなっている。「父」がモーセのことばでないのは、文脈を見れば誰でもわかる。

#### （一）第一次世界的カナン復帰路程

##### （1）信仰基台

406頁3行目

「洗礼ヨハネは、このようにして『40日サタン分立基台』を立てた」  
→どこから40日という数字が出て来たのか？ 何の根拠もない。

## (二) 第二次世界的カナン復帰路程

### (1) 信仰基台

イエスにも、信仰基台としての数理的な蕩滅期間は40日間の断食しかない。他の蕩滅期間はどこへ行ったのか？

411頁5～8行目

「事実においても、洗礼ヨハネが不信に陥ったために、彼が立てた『信仰基台』にサタンが侵入したのであるが、これが近因となって、イエスは自ら洗礼ヨハネの立場で、『40日サタン分立基台』を立てることによって『信仰基台』を蕩滅復帰するために、荒野における40日断食と三大試練を受けなければならなかったのである。」

→四福音書の記事を時間順に並べてみると、洗礼ヨハネが不信仰に陥る1年以上前に、イエスは荒野で40日間断食をし、三大試練を受けられたことがわかる。

原理はここでも嘘をついている。原理は作り話と妄想を並べ立てているにすぎない。

## (三) 第三次世界的カナン復帰路程

### (1) イエスを中心とする霊的カナン復帰路程

421頁2行目

「第二イスラエルであるキリスト教信徒たち」

→クリスチャンを「第二イスラエル」と呼ぶ神学を「置換神学」という。置換神学では、教会は「不信仰のイスラエル」に取って代わ

った「真のイスラエル」で、旧約聖書の中でイスラエルに与えられた約束は教会が引き継いだと主張する。

しかし、置換神学は比喩的解釈によってもたらされた非聖書的な教えである。置換神学は、ユダヤ人迫害、十字軍、異端審問、ホロコーストといった悲劇をもたらす要因の一つになった。

原理によると、復帰というのは、墮落と反対の経路をたどることによるのである。墮落はまず、霊的に起こり、次に肉的に起こった。よって、復帰していくには、まず肉的救いの摂理がなければならない。しかしイエス路程では、イエスが「メシヤのための霊的な基台」を造成できたことにより、霊的救いの摂理が、肉的救いの摂理よりも先に達成できたことになっている。これは復帰原理の原則に反する。明らかに原理は自己矛盾している。

## (2) 再臨主を中心とする実体的カナン復帰路程

427頁13行目

「イエスは初臨のときに、彼のために召命された第一イスラエル選民を捨てられ、キリスト教信徒たちを第二イスラエルとして立て」  
→初期の教会はユダヤ人信者だけだった。そして、今までずっと、教会の中にユダヤ人信者は存在し続けている。イスラエルは捨てられていない。原理は置換神学の立場に立っている。

428頁3～4行目

「再臨主は…復帰摂理の目的を完遂できなくて、亡くなられるということはない。」  
→実際には、文鮮明氏は何一つ復帰できずに死んだ。よって、原理は嘘だと実証された。

435頁の「摂理的同時性の時代の対照表」を聖書の記述と比較してみると、以下のことがわかる。(各々の摂理的同時性の期間を計算すると、2221年、1930年、1930年となる。どれも2000年にはならないし、合計しても6000年にはならない。よって、原理の摂理的同時性は成り立たない。)

アダムの所の12, 4, 21, 40という数字は聖書の中に全く出て来ない。

アダムからノアまでの期間1600年にも明確な根拠は何もない。

アダム誕生の年をA.H. (Anno Homini) という年号を使ってIA.H. とすると、ノアの大洪水が起こったのは1656A.H.。

ノアの所の4番目の40日は聖書の中に全く出て来ない。

アブラハムがハランを出発したのは2083A.H.。これはノアの大洪水が起こってから427年後。400年ではない。

アブラハムがハランを出発して、ヤコブが長子の権利を継承するまでの期間が120年だと言える根拠はどこにもない。

ヤコブが長子の権利を継承してからハランへ行くまでの40年という期間(『原理講論』453頁12行目)にも明確な根拠はない。

ヤコブがハランにいた期間は、20年。21年ではない。

象徴的同時性時代の最後の期間は32年。40年ではない。

以上のことから、象徴的同時性時代の年数は、1656, 427, (不明), (不明), 20, 32となる。

ということは、形象的同時性時代の年数も実体的同時性時代の年数も全く成り立たない。

モーセの所の1番目は120年ではなく40年(『原理講論』356頁)。(もし120年とするなら、神はモーセが失敗することを絶対的な予定と

していたことになる。しかしこれは予定論の記述と反する。) モーセの所の3番目の21日は聖書の中に全く出て来ない。以上のことから、形象的同時性時代の年数も成り立たない。

これまで述べてきたことから、原理の摂理的同時性は原理によって否定されることが証明された。

# 第三章 摂理歴史の各時代とその年数の形成

## 第一節 摂理的同時性の時代

437頁9行目

「同時性の時代の形態が、完全な相似形をつくることができない理由は、ここにある」

→緒論に書いてある蕩減条件の立て方によると、失敗したら、蕩減期間はさらに長くなるはず。しかし、摂理的同時性の時代は同じ年数で蕩減復帰している。これは原理に反する。

## 第二節 復帰基台摂理時代の代数とその年数の形成

### (四) 信仰基台を復帰するための数理的な蕩減期間

文鮮明氏と韓鶴子<sup>ハンハクジャ</sup>女史は1960年に結婚し、1977年に完成基準に達したそうだが（本書30頁参照）が、この期間である17年は、12数でも4数でも21数でも40数でもない。彼らには個性完成のために必要な原理数が何もない。

よって、原理によって、文鮮明氏も韓鶴子女史も偽の父母であることが証明された。

447頁10～11行目と453頁1～2行目

創世記7:4は洪水が起こるまでの7日間。

448頁5～8行目

なぜ成長期間三段階を再び各々三段階に区分する必要があるのか？ そんなことを考え出したら，その区分したものをさらに三段階に区分できることになり，以下，無限に続く。科学的に考えれば，最節約原理により，各々三段階に区分する必要はない。すると四数が帰一数となり，十数を帰一数とする必然性はなくなる。それでも十数を帰一数にしたがるのは，アダムから十代目にノアを選んだという原理を正当化させるためだろう。

448頁15行目と453頁3行目

「鳩を放つまでの40日期間」

→鳩ではなくカラス。

もし，この40日をノアの所の4番目の数字にしている（435頁の対照表参照）のなら，3番目の21日と順序が逆になるはず。

### 第三節 復帰摂理時代を形成する各時代とその年数

#### （三）統一王国時代120年

457頁13～14行目

「サウル王が…神殿を建設しなければならなかった」

→そのような事実はどこにもない。そもそも，神殿建設は国家の一大プロジェクトであり，莫大な経済力が必要となる。サウルはそんなことができる器ではなかった。つまり，サウルの不信仰と神殿建設には，最初から何の関係もないのである。

#### （四）南北王朝分立時代400年



原理は、統一王国が北王国イスラエルと南王国ユダに分裂してからバビロン捕囚までが400年としている。しかし、決定的なバビロン捕囚は紀元前586年と考えられるので、それから400年前の紀元前986年を調べて見ると、まだダビデが統一王国の王だった時期となる。よって、南北王朝分立時代は400年もない。南北に分裂してからバビロン捕囚までは約346年。

#### (五) ユダヤ民族捕虜および帰還時代210年

この時代は、ユダヤ人が帰還してからの話も入っている。しかし、この時代と同時性をなす象徴的同時性時代では、ヤコブがハランへ行って帰って来るまでの話でしかない（『原理講論』435頁の対照表参照）。よって、この時代はヤコブの同時性にはなり得ない。

#### (六) メシヤ降臨準備時代400年

この時代も、ヤコブの話と同時性をなしていない。ヤコブの路程では、ハランから帰ってきてすぐの話であるが、この時代は捕囚から帰ってきて約140年たってからスタートしている。

### 第四節 復帰摂理延長時代を形成する各時代とその年数

#### (一) ローマ帝国迫害時代400年

イエスが十字架上で死なれた紀元30年から数えても、キリスト教がローマ帝国の国教として公認された紀元392年までの期間は362年しかない。また、初代教会は最初からローマ帝国の迫害を受けていたわけではない。よって、実際の期間は362年よりももっと短い。

## (二) 教区長制キリスト教会時代400年

キリスト教がローマ帝国の国教として公認された392年から、800年にチャールズ大帝が即位するまでの期間は408年。

## (三) キリスト王国時代120年

原理によると、この「キリスト王国時代」は、イスラエルの統一王国時代と同時性をなすものだから、「キリスト王国時代」の終わりはフランク王国が分裂したときになる。フランク王国が東西に分裂したのは843年（ヴェルダン条約）か870年（メルセン条約）が考えられる。よって、「キリスト王国時代」の始まりを800年とする以上、この時代はわずか43年あるいは70年となる。

東フランク王国でハインリヒ1世が即位した919年をこの時代の終わりと考えたとしても、119年。1年足りない。919年を正当化しようとして理屈をこね回しても、イスラエルの統一王国時代とは同時性をなさないので、無意味。

## (四) 東西王朝分立時代400年

919年から1309年までは390年。10年足りない。

また、神聖ローマ帝国はルターの宗教改革以後も存続している（1806年に消滅）ので、400年どころではない。

よって、どう考えても「南北王朝分立時代」とは同時性をなさない。

## (五) 法王捕虜および帰還時代210年

ローマ教皇の捕虜及び帰還は1309年～1377年までの68年。210年どころではない。

1517年までと考えても、208年。2年足りない。

#### (六) メシヤ再降臨準備時代400年

1517年に400年を足すと1917年。文鮮明氏が誕生した1920年まで3年足りない。

聖書を一貫して字義通りに解釈すると、メシア再臨の前に、まず教会の携挙が起こり、それから7年間の大患難時代がやって来る。その大患難時代の終わりにイスラエルが民族的に回心してから、メシアが地上に再臨されるという神のご計画があることがわかる。さらにその先には千年王国があり、新天新地がある。

以上の同時性を考えると、神は原理数にぴったり合わない摂理を復帰摂理として展開してきたことになる。しかし、これでは蕩減条件として成り立たない。ということは、原理の摂理的同時性は、原理原則に反していることになる。

また、第三節(五)(六)の所で述べたように、この2つの時代区分はそもそも成り立たない。そのため、第四節(五)(六)の時代区分も、必然的に成り立たないことになる。

以上のことから、原理の摂理的同時性は全てでっち上げであることが証明された。

## 第四章 摂理的同時性から見た復帰 摂理時代と復帰摂理延長時代

本書の後編第二章と第三章の所で述べたように、原理の摂理的同時性は否定された。よって、この第四章も無意味である。

ここで、イスラエルに関して少し説明しておく。

イスラエル民族（イスラエル人＝ユダヤ人）とは、アブラハム、イサク、ヤコブの肉体的子孫のこと。アブラハムの子孫であっても、アブラハム契約の継承者でない人たち（例えばイシュマエルの子孫のアラブ人）はイスラエルではない。

聖書を一貫して字義通りに解釈すると、イスラエルはイスラエル、教会は教会と、明確に区別される。教会は「第二イスラエル」ではない。聖書の中の「イスラエル」を「教会」と読み替えてはならない。

イスラエルに対する神の約束は今も有効である。イスラエルは今も「選びの民」である。この選びは、人類を救う器としての選びであって、イスラエルが優秀だという意味ではない。

マタイ21:43「御国にふさわしい実を結ぶような異邦人」（『聖書口語訳』）の「異邦人」は誤訳である。口語訳聖書で「異邦人」と訳されたギリシャ語「エトノス ἔθνος」は、マタイ21:43の文脈では「民」（英語ならa people）と訳すべきである。マタイ21:43でイエスは、「メシア的王国（千年王国）は今の時代のユダヤ人から取り去られ、実を結ぶ時代のユダヤ人（大患難時代を生き延びるユダヤ人）に与えられるだろう」と言っておられるのである。

ローマ9:6~8でパウロが述べているのは、民族としてのイスラエルの中に、少数の信仰のあるイスラエルがいるということ。

マタイ21:43もローマ9:6~8も、文脈をよく考えれば、異邦人や教会のことを言っているのではないとわかる。

## 第一節 エジプト苦役時代とローマ帝国迫害時代

### 468頁13行目

安息日の規定（出エジプト記20:8~11）に関して。

安息日規定はモーセの律法の規定である。モーセの律法はイスラエルの民にのみ与えられたもので、異邦人は最初から無関係である。

メシア（イエス）の死によってモーセの律法は無効になったので、安息日規定も無効になった。

モーセの律法にあった戒めのいくつかは、新約聖書の中で再登場している。それらは今も有効である。

しかし、安息日規定は再登場していない。つまり、現在では安息日規定そのものが存在しないのである。

よって、現在のクリスチャンが守るべき安息日というのは存在しない。

### 469頁1~8行目

「モーセがパロを屈伏させた」とあるが、パロ（ファラオ）はイスラエルの神の力に負けたのであり、モーセが屈伏させたのではない。

### 469頁15行目

教会が新約聖書の正典を決定したのではない。既に正典として認識されていた書を、教会会議で正典と承認しただけ。わざわざ公式に承認する必要があった理由は、信者が異端的教理や異教の教えに惑わされないため。

#### 第四節 南北王朝分立時代と東西王朝分立時代

第二列王記17:7～23を見ても、「神は、北王国イスラエルが永遠に選民としての資格を失うように摂理された」とは読めない。聖書をよく読めばわかるが、「永遠に」とは書いてない。

478頁1～3行目

トマス・アキナスやフランチェスコは、十字軍戦争が起こった1096年よりもずっと後に生まれているので、東西王朝分立時代の同時性は成り立たない。

#### 第六節 メシヤ降臨準備時代とメシヤ再降臨準備時代

484頁9行目

「印度教」というのは「ヒンドゥー教」の別称であり、釈迦によって生まれたのは「仏教」だから、ここの記述は明らかに誤り。

#### 第七節 復帰摂理から見た歴史発展

486頁5～6行目

「墮落した人間には、善を指向する本心と、この本心の命令に逆らって悪を指向する邪心とがあって、この二つの心が常に闘っているということを、我々は否定することができない。」

→既に創造原理によって否定された。本書81頁を参照せよ。

486頁6～7行目

「本心の命令に従う善行ぜんこうと邪心の命令に従う悪行あくぎょうとが、我々の一つの体の内において、互いに衝突しあっているという事実」

→善行や悪行は肉身が行うものであって、体の内にあるのではない（『原理講論』前編第一章第六節（三）（1）参照）。よって、そのような事実はない。

486頁12行目

「しかし、人間は、本心と邪心との執拗しつようなる闘いの中で、悪を退け、善に従おうとして不断に努力をしている。」

→必ずしも善に従おうとはしていないのが現実。

487頁2～3行目

「したがって、このような人間たちによってつくられてきた歴史は、善悪が交錯する渦の中にありながら、大局的には、悪を退け、善を指向してきたというのが事実なのである。」

→人間の努力によって地上天国が実現できるという原理の歴史観は、聖書の歴史観と全く異なる。聖書は、人間の努力ではどうにもならないと教えている。聖書は、メシアが再臨されるまで、時代はより悪い方向に向かって行くと教えている。

487頁8～9行目

「人類歴史が、神の復帰摂理によって、絶えず善と悪との分立を繰り返しながら善を指向して発展してきたという事実」

→既に述べたように、復帰摂理は否定されたので、このような事実はない。

487頁10～12行目

「ところが、人間がサタンと血縁関係を結んだことにより、サタンは、墮落した人間を中心として、将来、神がつくろうとなさるものと同じ型の世界を、先立ってつくってきたので、結果的に、人類歴史は、原理型の非原理世界を形成してきた」

→既に墮落論は否定されたので、この論理も成り立たない。

487頁15～16行目

「復帰摂理路程においては、真なるものが現れる前に、必ず偽なるものが先に、真なるものと同じ姿をもって現れるようになる」

→上記により、この原理は成り立たない。

## (二) 復帰摂理延長時代における歴史発展

### (2) 宗教史と経済史と政治史との相互関係

494頁11～12行目，512頁2～4行目

「神は元来、人間の外的な肉身を先に創造され、その次に、内的な霊人体を創造されたので（創2:7）、再創造の原則によって、復帰摂理も、外的なものから内的なものへと復帰していく過程を踏むようになる」

→しかし、現実には、外的な科学よりも内的な宗教のほうが先に復帰されている。（本書126～127頁を参照せよ。）よって、この原理も否定された。

494頁15～16行目

「経済もまた科学と同じく現実世界に属するものであり、その上、



科学の発達と密接な関係をもって発展する」

→経済発展が科学の発達と密接な関係があるのなら、経済史だけでなく、科学史も考えなければならない。しかし、原理では科学史の考察は何もなされていない。(科学史の同時性については、本書126～127頁を参照せよ。)

### (7) 共生共栄共義主義と共産主義

原理の言う「共生共栄共義主義」とは、具体的にどのような社会制度を実現することになるのか、原理は科学的に全く解明できていない。実際には文鮮明氏の一族が支配する全体主義社会にならざるを得ないだろう。それまでの歴史でやっと到達した民主主義の理念も露と消えるだろう。

508頁13～15行目

「このような真理に立脚した宗教によって、全人類が神の心情に帰一することにより、一つの理念を中心とした経済の基台の上で、創造理想を実現する政治社会がつくられるはずであるが、これがすなわち、共生共栄共義主義に立脚した、メシヤ王国なのである。」

→この記述から、原理では、メシア（文鮮明氏）を王とした王国を、象徴としてではなく、現実の国家として作ろうとしていることがわかる。

509頁の「復帰摂理から見た歴史発展表示図」

政治史も経済史も、原理数による同時性になっていない。

これまで述べてきたことから、統一原理の摂理的同時性は完全に否定された。

## 第五章 メシヤ再降臨準備時代

510頁2～3行目

「メシヤ再降臨準備時代とは、西暦1517年の宗教改革が始まったときから、1918年第一次世界大戦が終わるまでの400年間をいう。」

→ $1918 - 1517 = 401$ 。400年間ではない。

メシアとしての文鮮明氏が誕生するまでの準備期間なら、1918年までではなく、1920年までである。それでも400年にはならない。

よって、この第五章も全て無意味である。

### 第一節 宗教改革期（1517～1648）

510頁8行目

「130年の期間を、宗教改革期と称する」

→ $1648 - 1517 = 131$ 。130年間ではない。

514頁16行目～515頁2行目

「あたかもカインがアベルに屈伏して、初めてアダムに侵入したサタンを分立させ、メシヤを迎えるための『実体基台』が造成できるように、カイン型であるヘレニズムがアベル型であるヘブライズムに完全に屈伏することによって、初めて中世的指導精神に侵入したサタンを分立させ、再臨主を迎えるための『実体基台』が世界的に造成されるのである。」

→既に後編第一章第一節の所で述べたように、原理の言うカイン・アベルという関係は否定されたので、原理のこの考えも否定される。

#### （一）文芸復興（Renaissance）

515頁7～8行目

「創造原理によれば，人間は，神も干渉できない人間自身の責任分担を，自由意志によって完遂することにより初めて完成されるように創造された」

→既に万有原力の所（本書52～55頁）で述べたように，この原理は否定されたので，文芸復興に関する原理の説明も否定される。

## 第二節 宗教および思想の闘争期（1648～1789）

519頁2～3行目

「この期間は…140年」

→ $1789 - 1648 = 141$ 。140年ではない。

この箇所を要約すると，カイン型の共産主義世界とアベル型の民主主義世界が成り立つためには，カイン型の人生観とアベル型の人生観が確立されなければならない，ということである。

### （一）カイン型の人生観

原理によると，「カイン型の人生観は，中世の人々を神と信仰から分離，あるいは独立させる方向へ傾かせたが，このアベル型の人生観は，彼らをして一層高次的に神の側へ指向するように導いてくれた」（『原理講論』523頁1～2行目）とある。

では，原理の言うことが正しいかどうか，確認してみよう。

520頁10～13行目

「フランスのデカルト（Descartes 1596～1650）を祖とする理性論

は、すべての真理は人間が生まれながらにもっている理性によってのみ探求されると主張した。彼らは歴史性や伝統を打破して演繹法を根拠とし、『我思う、ゆえに我あり』という命題を立てて、これから演繹することによって、初めて外界を肯定しようとしたのである。したがって、彼らは神や世界や自分までも否定する立場に立とうとしたのである。」

→デカルトの著書『第一哲学についての省察』(Meditationes de prima philosophia, 1641)によると、デカルトは神の存在を否定するどころか、神の存在証明をしている。また、他の合理論(理性論)の哲学者たち、例えば、マールブランシュ、スピノザ、ライプニッツにおいても、神の存在を肯定しており、決して神の存在を否定するようなことはしていない。特に、ライプニッツは、カトリック教会とプロテスタント教会の統一やプロテスタント教会内部の統一(ルター派とカルヴァン派の統一)に、その終生を捧げた人である。その著作『形而上学叙説』(Discours de métaphysique, 1686)においても、イエス・キリストへの信仰を告白している。

よって、合理論をカイン型の人生観に分類するのは的外れである。

かといって、合理論をアベル型の人生観に分類することもできない。なぜなら、例えばスピノザの神観は汎神論(神即自然)であり、正統的なキリスト教の神観(有神論)ではないからである。

ゆえに、原理の言う「カイン型の人生観」「アベル型の人生観」の説明は成り立たないことが証明された。

## (二) アベル型の人生観

スウェーデンボルグは、聖書の三位一体を否定している。このような人生観が、アベル型の人生観であるはずがない。

## 第六章 再臨論

メシアが再臨される時期，方法，場所は，実は聖書にはっきりと示されている。ところが，聖書を解釈する方法が人によって異なるために，メシアの再臨に関して様々な見解が存在している。

では，どのような解釈法が正しいのだろうか。

既に述べたように，聖書は一貫して字義通りに解釈すればよいので，メシアの再臨に関する聖句も，比喩や象徴として解釈する必要がなければ，文字通りに解釈すればよい。これが全てである。

### 第一節 イエスはいつ再臨されるか

メシアであるイエス本人が再臨される時期は，まだ将来のことである。メシア再臨までのいきさつを，以下に簡単に述べておく。

メシアの再臨の前に，まず教会の携挙が起こる。（教会とは，イエスをメシアと信じて救われた人の群れのこと。）教会の携挙がいつ起こるかは，誰も知らない。父なる神だけがご存じである。教会の携挙が起こると，既に肉体的に死んでいるクリスチャンは復活し，その時点で生きているクリスチャンとともに栄光のからだに変えられて，たちまち天へ上げられ，空中で主イエスと会う。

次に，地上では，反キリスト（ローマ人の血を引く男性）がイスラエル（ユダヤ人国家）と7年間の契約を結ぶ。それが，7年間の大患難時代の始まり。大患難時代の前半の3年半の間に，戦争や災害で世界の人口は激減する。大患難時代の中にイエスを信じた者は迫害される。後半の3年半が始まるとき，反キリストはイスラエルとの契約を破棄する。そして，イスラエルを滅ぼそうと激しく迫害する。しかし，大患難時代の終わり頃（ハルマゲドンの戦いのとき）

にイスラエルは民族的に回心するので、それからすぐにメシアが再臨される。そして、メシアは反キリストとその勢力を滅ぼされる。勝利されたメシアはオリーブ山に立たれる。

これが、聖書に記されたメシア再臨のプログラムである。

原理は、聖書の文脈を無視して、めちゃくちゃな聖句の引用をしている。特にこの第六章は注意が必要である。

## 第二節 イエスはいかに再臨されるか

### (二) イエスの再臨は地上誕生をもってなされる

565頁9～10行目

「もしイエスが、聖書の文字どおりに雲に乗って、天使長のラッパの音と共に、神の栄光の中に再臨されるとするならば（マタイ24:30, 31）」

→マタイ24:30の「雲」とは、シャカイナ・グローリー（目に見える形で現れた神の栄光）のこと。

565頁11～13行目

「イエスがもし雲に乗って来られるとするならば、苦しみを受けられるとか、この時代の人々から捨てられるとかいうようなことは、絶対にあり得ない」

→原理が根拠としているルカの福音書17章25節の「この時代の人々」とは、イエス時代のユダヤ人のこと。これは十字架において成就した。

566頁12行目

「終末に近づけば近づくほど、篤<sup>あつ</sup>い信仰を立てようと努力する信徒たちが次第に増えてきつつあり」

→どこから、このような考えが出て来るのか？

聖書によると、大患難時代の迫害の激しさにより、信仰を持つ人は非常に少ないと考えられる。

567頁12～13行目

「<sup>かんなん</sup>艱難や苦痛が激しくなればなるほど、天からの救いの手をより強く熱望し、神を探し求めるようになるのが、万人共通の信仰生活の実態だ」

→いくら祈っても、祈りが聞かれないなら、不信仰に陥るものである。また、神を信じようとしなない者は、どんな苦痛を味わわされても、決して信じようとはしない。こういうことは、クリスチャンとしての信仰生活を送ったことがなければ、わからないと思う。

マタイの福音書7章21～23節は、自分を欺いている者への警告である。いくら奇跡を行ったとしても、霊的新生を体験していないなら、その人は神の国には入れない。預言したり、悪霊を追い出したり、奇跡を行えることが、救われていることの証拠ではない。

ルカの福音書17章20節以下のみことばの意味は次のとおり。

(1) 20～21節は、パリサイ人（信者でない者）の質問にイエスが回答されている。ここでの「神の国」は再臨後に出来る「神の国」のことではない。21節は、イエスのご人格とわざの中に、神の国の実体があるという意味。

(2) 22～35節は、イエスが弟子たち（信者）に教えておられる。22～24節の「人の子の日」は再臨に関すること、25節は当時のこと、26～30節は大患難時代の直前に関すること、31～35節は大患難時代

に入ったらイスラエルはすぐに行動を起こすべきだという教え。

(3) 37節は、再臨のときには、イスラエルの民（死体）が異邦人の軍勢（秃鷹）に取り囲まれていることを意味する。そして、イエスが再臨されるその場所は、ボツラ（現在のヨルダン領ペトラ）である。

ヨハネの黙示録12章1～5節はメシアの生涯の要約。

黙示録12章5節の「女」はイスラエル、「男の子」は初臨のメシア、「鉄の杖」は王権、「神のみもとに、その御座に引き上げられた」とは、メシアの昇天を意味する。

ローマ11:17の「野生のオリーブ」は異邦人信者、「折られた枝」は不信仰なイスラエル、「オリーブの根」はアブラハム契約、「ともに受けている」とは、信仰のある少数のイスラエルとともに祝福を受けているという意味。そして、イスラエルはこのオリーブの木の所有者である。

メシアの再臨に関する聖書の教えをまとめると、イエスの再臨は地上誕生をもってなされるのではなく、シャカイナ・グローリーとともに、誰もが認識できる姿で天から来られるということである。

(三) 雲に乗って来られるという聖句は何を意味するのか

黙示録1章7節の「彼を突き刺した者たち」とはイスラエル（ユダヤ人）のこと。イエス時代のユダヤ人のことでもない。この「彼を突き刺した者たち」ということばは、ゼカリヤ書12章10節に出て来ることばで、イスラエルのことを指している。



578頁11～12行目

「雲は地上から汚れた水が蒸発（浄化）して、天に昇っていったものをいう。」

→この説明は明らかに誤りである。なぜなら、「汚れた水」が蒸発したら、後に残るのは「汚れた」もの、つまり凝結核だけである。こんなものが天に昇っていても、雲にはならない。そもそも雲とは、空気中の水滴あるいは氷晶の、目に見える集まりのことである。

モーセ路程において、イスラエル民族を導いた「雲の柱」「火の柱」（出エジプト記13:22）は、ともにシャカイナ・グローリーを指す。

ダニエル書7章13節は再臨のときの様子。

（四）イエスはなぜ雲に乗って再臨されると言われたのか

イエスの話を聞いていた弟子たちは全員ユダヤ人である。イエスは旧約聖書に基づいて話され、弟子たちも旧約聖書に基づいて理解した。当時のユダヤ人は、旧約聖書を字義通りに解釈していたので、イエスが言われた「雲」ということばの意味を誤解することはなかった。（例えば、第一コリント10:1～2を見ると、パウロはコリントの信者たちに出エジプトの話をしたとき、「雲」ということばを説明なしに使っている。この「雲」は出エジプト記13:21～22の「雲」である。つまり、シャカイナ・グローリーを指す。）

580頁2～3行目

「イエスが、雲に乗って再臨されると言われたのには、二つの理由があった。第一には、偽キリストの惑わし<sup>にせ</sup>を防ぐためであった。」

→イエスは、「天の雲のうちに来る」（マタイ24:30）と言われる前に、まず最初に「人に惑わされないように気をつけなさい。わたしの名を名乗る者が大勢現れ、『私こそキリストだ』と言って、多くの人を惑わします」（マタイ24:4～5）と言われている。よって、原理の主張は成り立たない。

580頁9行目

「第二には、険しい信仰の路程を歩いている信徒たちを激励するためであった。」

→イエスは事実を話された。信徒たちを激励するために、誇張して言われたのではない。

580頁9～11行目

「イエスはこのほかに、なるべく早く神の目的を達成しようとされて、信徒たちを激励されるために、前後のつじつまがよく合わないようなみ<sup>ことば</sup>言を語られた例が少なくなかった。」

→原理が、聖書の文脈を無視した解釈をしているだけ。

581頁7～9行目

「弟子たちは…<sup>エクレジヤ</sup>初代教会を創設した」

→弟子たちがつくったのではない。復活のイエスがつくられた。「わたしはこの岩の上に、わたしの教会を建てます」（マタイ16:18）と書いてあるとおりである。

教会はギリシャ語で「エクレシアー ἐκκλησία」である。

第三節 イエスはどこに再臨されるか

(一) イエスはユダヤ民族の内に再臨されるか

マタイの福音書21章43節に関しては、本書196頁を参照せよ。

創世記32:24～32の「ある人」は天使ではなく、神ご自身。より正確に言うなら、第二位格の神、受肉前のメシア。

原理のイスラエルに対する理解は根本的に間違っている。アブラハム契約のゆえに、イスラエルが神から捨てられることはない。イスラエルは、どこまでいっても、イスラエルである。

584頁5行目

「ヤコブの子孫たちがモーセを中心として、エジプト人と戦いながらその地を出発した」

→イスラエルの民はエジプト人と戦っていない。

584頁6行目

「荒野で神に反逆したときには、もう既にイスラエルではなかった」

→こんなことは聖書に書いてない。原理のでっち上げである。

584頁9～11行目

「神の背いた十部族からなる北朝イスラエルは、もはやイスラエル選民ではなかったのもので、滅ぼしてしまわれ、神のみ旨に従った二部族からなる南朝ユダだけがイスラエル選民となって、イエスを迎えるようになった」

→北王国イスラエルも南王国ユダも、ともに偶像礼拝に陥り、まことの神に立ち返ろうとしなかったのもので、神はどちらにも捕囚という矯正的さばきをくだされた。原理は事実をねじ曲げている。

捕囚の地から帰ってきたユダヤ人は二部族だけではない。例えば、

ルカの福音書2章36～38節には、アシェル族のアンナという女預言者が登場している。つまり、他の部族の人たちも捕囚の地から帰って来ているのである。十部族は失われていない。

584頁11～12行目

「しかし、そのユダヤ人たちも、イエスを十字架に引き渡したことによって、イスラエル選民の資格を完全に失ってしまった」

→そのような教えは聖書のどこにもない。

584頁12～13行目

「そこでパウロは、彼らに対して先に挙げたようなみ言をもって、選民というものの意義を明らかにした」

→パウロは選民の意義を明らかにしたのではない。本書197頁も参照せよ。

ローマ11:11の前半には「それでは尋ねますが、彼ら（イスラエル）がつかずいたのは倒れるためでしょうか。決してそんなことはありません」とあり、12節には、「彼ら（イスラエル）がみな救われることは、どんなにすばらしいものをもたらすことでしょうか」とある。そして25～26節には「イスラエル人の一部が頑なになったのは異邦人の満ちる時が来るまでであり、こうして、イスラエルはみな救われるのです」とある。

イスラエルに対する神のご計画は今も続いている。メシア再臨の条件は、イスラエルの民族的回心である（マタイ23:39, ルカ13:35）。

イエスを信じたユダヤ人（メシアニック・ジュー）は、イスラエルでもあり、教会の一員でもある。

(二) イエスは東の国に再臨される

585頁15行目～586頁3行目

「ところで、その7章2節から3節を見ると、日の出る方、すなわち東の方から天使が上ってきて、最後の審判において選ばれた14万4千の群れの額に、小羊とその父の印を押される（黙14:1）と書かれているのである。このことから、神の遺業を受け継いで、イエスの再臨のための実を結ぶ国は（マタイ21:43）東方にあるということが分かってくる。」

→この論理は全く成り立っていない。

黙示録を書いたヨハネから見て「日の出る方」とはメソポタミア地方である。

印を押された14万4千人とは、大患難時代にイエスを信じて救われたユダヤ人のうち、福音宣教に召される人々である。彼らによって、多くの異邦人が救われることになる。

イエスが再臨される国を導き出すのに、原理はたったこれだけしか述べていない。聖書を字義通りに読めば、原理の主張は全く成り立たないことがわかる。

（三）東方のその国は、すなわち韓国である

586頁8行目

「古くから、東方の国とは韓国、日本、中国の東洋三国をいう。」  
→なぜ「東方の国」が韓国、日本、中国になるのか？ どこから見るかによって、「東方の国」は異なるはず。単に「古くから」というだけでは何の根拠も示していないのと同じ。

原理は、マタイの福音書とヨハネの黙示録に基づいて「東方の国」を主張している。しかし、マタイの福音書より後に書かれたヨハネ

の黙示録が書かれた時代（紀元1世紀末）における東方というのは、当時のローマ世界の人々から見たら、せいぜいインド辺りまでである。当時は韓国という国すらなかった。よって、「東方のその国は、すなわち韓国である」という原理の主張は否定された。イエスが再臨される国が韓国であるという原理の理屈は全く成り立たない。

そもそも朝鮮半島は古来から「朝鮮」という名称で呼ばれることが多い。紀元前2世紀初めには、箕<sup>き</sup>氏<sup>し</sup>朝鮮が滅び、衛<sup>えい</sup>氏<sup>し</sup>朝鮮が建国されたと言われている。1392年には李<sup>り</sup>氏<sup>し</sup>朝鮮が建国され、1897年に清から独立して国号が「大韓帝国」に改称されるまでの間、やはり「朝鮮」という呼び名が略称として一般的であったと考えられる。「韓国」という名称は、文鮮明氏が誕生する前は、末期の李氏朝鮮の称として用いられ、また1897年から1910年までのわずか約13年間、大韓帝国の略称として用いらただけである。よって、「韓国」という国を「古くからある東方の国」の中に含めることは、かなり無理がある。これは、後の話のための、単なるつじつま合わせにすぎない。

文鮮明氏が誕生したとき（1920年陰暦1月6日）、「韓国」という国はなく、朝鮮半島は「大日本帝国」という国の領地だった。（1910年の韓国併合と同時に、「韓国」という名称は「朝鮮」に変更された。つまり、1910年から1945年までの間、朝鮮半島は「大日本帝国」という国の朝鮮という地域」だった。そして1948年に大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国が独立するまでの約3年間は、それぞれアメリカとソ連の占領地であり、国はなかった。そのため、この間は便宜的にそれぞれ「南朝鮮」「北朝鮮」と呼んでいた。現在、朝鮮民主主義人民共和国のことを略して「北朝鮮」と呼ぶのは、このときの名残である。）「韓国（大韓民国）」は1948年に成立した。よって、

再臨される国（文鮮明氏が誕生した国）はどう考えても「韓国」とは言えない。

原理によると、イエスの初臨とは、イエスが地上に誕生されたときである（『原理講論』後編第三章第三節（六）には「イエスが誕生なさるまでの400年期間を、メシヤ降臨準備時代という」とある）。イエスの再臨の場合も同時性で考えれば、イエスの再臨とは、文鮮明氏が地上に誕生したときとなる。しかし文氏が生まれた国は、原理が「サタン側の国家」（『原理講論』586頁11行目）と呼ぶ日本であり、韓国という国ではない。（当時は「韓国」という国も地域もなかった。）よって、原理の再臨論により、文鮮明氏は偽メシアであることが証明された。

原理によれば、「再臨する」とは、文字通り人間の赤ん坊として生まれることを意味するのであって、決して、文氏が宣教を開始したとき（本書222頁参照）や、統一教会が創立されたとき（1954年5月1日）や、文氏が個性完成したとき（1977年2月23日）や、初めて「メシヤ宣言」をしたとき（1992年8月24日）をもって再臨とするのでもない。ゆえに、原理が正しければ、日本で生まれた文鮮明氏は明らかに偽メシアであることになる。

原理はどこまでも自己矛盾に陥っている。

586頁10～11行目

「中国は共産化した国であるため」

→中国が共産化されたのは1949年。文鮮明氏が誕生したとき（1920年）にはまだ共産化されていない。よって、中国を「東方の国」の候補から除く正当な理由は示されていないことになる。

(1) この国は蕩滅復歸の民族的な基台を立てなければならない

これ以降も「韓国」という名前がよく出て来るが、1910年に「大日本帝国」となる以前は「大韓帝国（1897～1910）」であり、「大韓民国」のことではない。

「韓国民族」という表現よりも、前述したように「朝鮮」という言葉を使って、「朝鮮民族」と表現した方が適切だと思う。

第一イスラエル、第二イスラエル、第三イスラエルという区別は非聖書的である。

(2) この国は神の一線であると同時にサタンの一線でなければならない

590頁3～4行目

「民主と共産の二つの勢力がここで互いに衝突しあうようになるのであり、この衝突する一線がすなわち38度線である」

→原理によると、再臨主が地上に誕生するときには、神とサタンの一線が引かれているはず。しかし、文鮮明氏が生まれたときは、原理が神とサタンの一線だという38度線はまだ引かれていなかった。38度線ができたのは1948年。つまり、文鮮明氏が28歳のとき。よって、文鮮明氏は再臨主でないことが原理によって証明された。

(3) この国は神の心情の対象とならなければならない

592頁11～13行目

「韓国民族は、一度も他の国を侵略したことはなかった」とある。しかし元寇のとき、高麗の人々は元の軍隊として対馬、壱岐を侵



略し、日本人を殺した。

応永の外寇（1419年）では、李氏朝鮮の大軍が対馬を侵略した。

朝鮮戦争のときには、北朝鮮は韓国を侵略し、韓国は北朝鮮を侵略した。（同じ民族どうし、互いに侵略しているのである。）

さらにベトナム戦争のとき、米軍と一緒に戦った国の中で最も勇敢に戦った（侵略した）のが韓国軍だと言われている。

よって、朝鮮民族は何度も他国を侵略していることになる。「サタンの第一の本性が侵略性」（『原理講論』592頁13行目）なら、上記のことから、朝鮮民族はサタンの側であることが明らかである。

また、1801年、李氏朝鮮はキリスト教徒に対する大弾圧を行った（<sup>しんゆう</sup>辛酉の獄）。1839年、1866年にも大弾圧を行っている。原理的に考えても、このような民族が神の心情の対象となるような善なる民族となり得るはずがない。（『原理講論』後編第五章第四節（二）（2）

「天の側とサタンの側との区別は何によって決定されるか」によると、「復帰摂理の立場から見れば、この摂理の目的を指向するキリスト教の行く道を妨害するものは、何でもサタン側になる」とある。）

よって、原理により、イエスが再臨される国は朝鮮もしくは韓国ではあり得ないことが証明された。ゆえに、文鮮明氏は偽メシアであることが原理により証明された。

#### （4）この国には預言者の<sup>あかし</sup>証拠がなければならない

原理によると、「イエスから始まった復帰摂理延長時代の摂理をなしてきた中心民族は、イスラエル民族ではなく、彼らがなし得なかった復帰摂理を継承したキリスト教信徒たち」（『原理講論』466頁14～15行目）なのだから、預言者はキリスト教信徒の中からのみ出て来るはず。

しかし『浅見教授の批判に答える』93頁では、「当時、南韓の地

で…仏教徒や異邦の神々を崇める雑徒たち、あるいはシャーマニズムのようなものを崇める人々で、キリスト教とは関係のない人々」とある。このような人々を『原理講論』では「預言者」と見なしている。これは矛盾である。

また、『原理講論』には次のように書いてある。「神は、幼な子のような平信徒たちを通じて、終末に関する天の摂理の新しい事実を、多く啓示によって知らせておられるのである。しかし、彼らがその内容を発表すれば、教職者たちによって異端と見なされ追放されるのでそのことに関しては、一切発表をせずに秘密にしているのが、今日の韓国キリスト教界の実情である」（『原理講論』595頁15行目～596頁1行目）とある。しかし、たとえこれが事実だったとしても、キリスト教徒以外の人々が預言者となることは、復帰原理の摂理的同時性から考えて、あり得ない。（原理によると、イエスの初臨のときの預言者マラキはイスラエル民族だった。よって、イエスの再臨のときの預言者はキリスト教信徒となる。）

『原理講論』に出て来る「鄭鑑録<sup>チョンカムノク</sup>」という本に関して。

聖書の正典はヨハネの黙示録によって閉じられた。それは主イエスが保証しておられる（黙示録22:18～19, 22:7）。つまり、ヨハネの黙示録より後に神の自己啓示が付け加えられることはないのである。ということは、「鄭鑑録<sup>チョンカムノク</sup>」は偽預言の書だということになる。

もし「鄭鑑録<sup>チョンカムノク</sup>」に書いてある預言が本当に聖書の預言と一致しているなら、韓国にメシアが来られるという思想は「鄭鑑録<sup>チョンカムノク</sup>」によって否定されるはず。

以上の考察から、「鄭鑑録<sup>チョンカムノク</sup>」に書いてある本当の預言は、聖書の預言とは全く一致しないものだと考えられる。事実、『原理講論』594頁2行目には「キリスト教が入ってきたのち、この思想は迷信として追いやられてきた」とある。

使徒行伝2章17節に関しては、本書132頁を参照せよ。

(5) この国であらゆる文明が結実されなければならない

原理によると、韓国であらゆる文明が結実されなければならない理由は、韓国にイエスが再臨されるからである。

しかし、既に述べたように、韓国にイエスが再臨されるという原理の主張は否定されたので、「韓国であらゆる文明が結実されなければならない」理由は何もない。

596頁14～15行目

「エジプトで発祥した古代の大陸文明は」

→エジプトではなく、メソポタミア。メソポタミアはユーラシア大陸に含まれる。

597頁2～6行目

なぜ「河川と海岸を中心とした文明」の中に、黄河文明やインダス文明が含まれていないのか？

597頁16行目

「人間は墮落することによって、野蛮人と化してしまった」

→アベルは野蛮人なのか？ イエスはアベルを義人と評価しておられる（マタイ23:35）。

597頁16～17行目

「人間は墮落することによって…直ちに熱帯で原始人の生活をするようになった」

→これに関しても、原理は全く科学的に解明できていない。

創世記4章（特に16節）から、カインもアベルも、エデンの園のすぐそばで生活していたことがわかる。

597頁17行目

「エジプト大陸を中心とした熱帯文明」

→「エジプト大陸」などない。

598頁2行目

「これが再びソ連に渡って寒帯文明をつくるようになった」

→ここでの移動の場所（ソ連）と、第一，第二での移動の場所（米国）は全く異なっている。

以上のことから、この第三節も全く成り立たないことが証明された。

聖書を一貫して字義通りに解釈すると、イエスはボツラ（現在のヨルダン領ペトラ）に再臨されることがわかる。

#### 第四節 同時性から見たイエス当時と今日

聖書によると、イエスの初臨と再臨との間に同時性は全く成り立たないので、同時性の観点から考察すること自体、無意味である。

600頁3～4行目

「祭司長と律法学者たちは、イエスのみ言を旧約聖書の言葉が示す範囲内で批判した」

→彼らは旧約聖書（神のことば）を正しく理解していなかった。彼

らは旧約聖書に基づいてイエスを批判したのではなく、新約聖書の中で「言い伝え」と呼ばれている口伝律法に基づいてイエスを批判した（マタイ15:1～11, マルコ7:1～13）。

ヨハネの黙示録21章以降の新天新地は、教会の携挙→7年間の大患難時代→メシアの再臨→千年王国の次に来る時代。

600頁9～11行目

「聖書の文字のみにとらわれている今日のキリスト教信徒たちは、初臨のときと同じく、再臨主の言行を、新約聖書の言葉が示す範囲内で批判するようになる」

→この理屈も、文鮮明氏がキリスト教界から異端視されている現実を正当化するためのものだろう。

イエスが王として地上に再臨される時、携挙にあずかかったクリスチャンたちはみな、栄化していて、もはや罪を犯すことがない。よって、イエスを批判することは絶対にはないのである。

ルカ17:25に関しては、本書206頁を参照せよ。

601頁3～4行目

「初臨のときにイエスの福音を受け入れた人たちが、選民であったユダヤ教の指導者ではなく、<sup>せんみん</sup>賤民や異邦人であった」

→事実に反する。イエスを信じたユダヤ教の指導者として、ニコデモ（ユダヤ教の神学校の校長）やアリマタヤのヨセフ（サンヘドリンの議員）がいる（マタイ27:57～60, マルコ15:42～46, ルカ23:50～55, ヨハネ19:38～42）。

また、大勢の祭司たちもイエスを信じた（使徒6:7）。ラビであったサウロ（パウロ）もダマスコ途上で回心した（使徒9:1～30）。

601頁12～13行目

「イエスは、彼ら（祭司長や律法学者たち）がこの使命を完遂することを期待されたので、まず、神殿を訪ねて、だれよりも先に彼らに福音を伝えられた」

→そのような事実はない。原理のでっち上げである。

602頁4～5行目

「今日の多くのキリスト教信徒たちは、各々、天国の道へと邁進まいしんしている。しかし、一步誤れば、その道は地獄へ通ずる道となってしまうのである。」

→イエスを信じて救われた人（霊的新生を体験した人）は、天国への片道切符をいただいております、永遠に救いを失うことはない。

マタイ7:21～23の人（自分を欺いている人）は、悔い改めによる霊的新生を体験していない（救われていない）ので、神の国には入れないのである。本書207頁も参照せよ。

602頁11行目

「ダニエルは『賢い者は悟るでしょう』（ダニエル12:10）と語った」

→ダニエル12:10はダニエルではなく天使が語った言葉。

イエスと文鮮明氏には同時性が成り立っていない。その証拠として、『文鮮明と統一教会』118頁によると、文鮮明氏は「平壤へ移り、1946年6月、『東洋のエルサレム』と呼ばれるこの都市で宣教を開始した」そうだが、このとき彼は26歳である。イエスが福音を宣べ伝える始められたときはおよそ30歳だから（ルカ3:23）、二人の間には同時性が成り立たない。（約4年のずれがある。）

イエスは、遅くとも紀元前4年にお生まれになった。そして、十

十字架につかれたのが紀元30年4月7日金曜日と考えられる。公生涯の間に4回、過越の祭りがあったので、イエスが福音を宣べ伝え始められたのは、紀元27年となる。そして、紀元30年の過越の祭りの日に十字架につかれた。

## 第五節 言語混乱の原因とその統一の必然性

聖書によると、人類が最初に話していたことばはヘブル語（ヘブライ語）である。なぜなら、ヘブル語でないと、創世記1～9章の話は成り立たないから。

人類が多言語を持つようになったのは、ノアの子孫たちが「地上に増え広がりなさい」という神の命令（創世記9:7）に反抗したのが原因（創世記11:4）。そして、神が彼らを地の全面に散らされた結果、諸民族が存在するようになった（創世記11:9）。

メシアであるイエスが再臨されたときには、人類は共通語としてヘブル語を使うようになると思われる。

以上のことから、原理の再臨論は完全に否定された。また、文鮮明氏はただの偽メシアにせにすぎないことも証明された。

統一原理によると、原罪は血統を通して遺伝するものだとしている。生物学的に考えれば、原罪のある両親から無原罪の子が生まれることはあり得ない。（『原理講論』264頁6～7行目には「原罪のある悪の父母が、原罪のない善の子女を生むことはできない」と書いてある。）もし本当に文鮮明氏が無原罪なら、彼の両親は共に無原罪でなければならないが、そんな話は一度も聞いたことがない。それどころか、金元弼キムウオンピル他『先駆者の道』（初版、光言社、1988年）11～12頁には「先生が十歳のとき、ご両親はキリスト教に改宗された」

とある。同様に、『文鮮明と統一教会』117頁には「文師が十歳の時、家族が長老派に改宗した」とある。つまり、文氏が生まれたとき、彼の両親はクリスチャンではなかったのだから、宗教的に考えて、彼の両親が共に無原罪であることはあり得ない。（『原理講論』161頁11行目には「キリスト教が、復帰摂理の目的を完成する中心的な宗教である」とあり、246頁15～16行目には「召命を受けた中心人物は、復帰摂理を担当した選民の一人として生まれなければならない」とある。従って、再臨のメシアはクリスチャンの中から生まれなければならないことになる。）よって、無原罪の子が生まれることもあり得ない。ゆえに、科学・宗教の両面から、文鮮明氏にも原罪がある、つまり彼は墮落人間であることが、自ら解明したという原理によって証明された。

しかも文鮮明氏のきょうだいには原罪があり、中には精神病を患っていた姉や兄がいる。精神病にかかるということは蕩滅の重い家系ということだから、なおさら無原罪の子が生まれることは考えられない。これに対して、「文鮮明氏を無原罪で誕生させるために、彼らきょうだいが代わりに蕩滅を背負ったのだ」という反論が出されることがある。しかし、文氏によると「蕩滅条件は他の人が代わりに立てることができない」（『罪と蕩滅復帰』238頁）のだから、この反論は文氏によって否定される。

また、精神病になるほどの蕩滅を背負わされたということは、統一原理により、彼らが非常に大きな使命を担った人物であった、ということになる。（『原理講論』401頁17行目には「大きな使命を担う人物であればあるほど、彼を試みる試練もまた、それに比例して大きい」とあり、434頁11行目にも「大きい使命を担った人物であればあるほど、彼に対する試練もまたそれに比例して大きい」とある。）ならば、文氏自身の話の中で、彼らがどれほど重要な使命を持っていて、どのように生きたのか、多くの証しがあってもよいは



ずである。しかし、実際には文氏は彼らに関することは何も話さない。名前すら明らかにされていない。『原理講論』には、大きな使命を担っていたという人物（モーセやイエスなど）に関する説明がしっかり書かれているのに、なぜ文氏のきょうだいに関しては何の証しもないのか？ 本当に文鮮明氏のために蕩滅を背負ったのなら、メシア誕生のための重要な礎を築いた人物として、全人類にとって非常に重要な話題となるはず。しかし、実際には全く重要視されていない。よって、「文氏のきょうだいが代わりに蕩滅を背負った」という反論も否定される。ゆえに、原理が正しければ、蕩滅の重い家系に生まれた文鮮明氏自身にも原罪があることになる。

以上のことから、文鮮明氏は墮落人間であることが、統一原理により、完全に証明された。

以上の考察により、『原理講論』の前編・後編を通して、統一原理としての独自の内容は全て否定された。

# 付録I 原理の神の非存在証明

これまで述べたことから、『原理講論』の内容は根本的に間違っており、原理は全て破棄されるしかないものであることがご理解いただけたと思う。ただ、分量が多いため、本書の全てに目を通すのは難しいとお考えの方もおられるかもしれない。

そんな方のために、もっと簡単に原理の全てを白紙にしてしまう方法を示しておく。それは、原理の神が存在しないことを、原理によって証明するという方法である。

『原理講論』（統一原理）の基本的な内容を理解しておられる方なら、この証明は非常に簡単に理解できるので、安心していただきたい。この証明を見て「なるほど、言われてみれば確かにそのとおりだ」と納得できる方は、たとえマインド・コントロールされていても、理性が正しく働いている証拠になると思う。逆に、この証明を見てもピンとこない方は、原理を正しく理解していないか、マインド・コントロールによって原理について正しく考えられなくなっていると考えられる。つまり、この証明は、原理を正しく理解しているかどうか、あるいは、原理に対して理性がきちんと働いているかどうかを判定するための一つの基準になると思う。

以下の証明は、統一思想も認めている形式論理学の「矛盾律」とか「矛盾原理」と呼ばれる基本法則を採用している。つまり、現役メンバーにとって、言い訳不可能な証明になっている。（「矛盾律」とは、『広辞苑』第七版によると、「思考の法則の一つ。『Aは非Aでない』または『SはPであると同時に非Pであることはできない』という形式で表す。この原理は、一定の論述や討論において概念の内容を変えてはならないことを意味し、同一律の反面をなす」とある。）

原理による定義：原理の神は、全知全能であると同時に全知全能ではない。

定理：原理の神は存在しない。

「原理の神が全知全能である」ことは、『原理講論』前編第二章第六節「神が人間始祖の墮落行為を干渉し給わなかった理由」の冒頭に「神は全知全能であられる」（129頁2行目）と書いてあることからわかる。また、『原理講論』前編第六章第四節「予定説の根拠となる聖句の解明」にも「神は全知であられる」（248頁6行目）と書いてある。よって、原理の神が全知全能であることは明らかである。

「原理の神が全知全能ではない」ことは、『原理講論』前編第四章第一節（五）「十字架に対する預言の両面」からわかる。この箇所には、「人間の責任分担の遂行いかんによって生ずる両面の結果に備えて、神はイエスのみ旨成就に対する預言を二とおりにせざるを得なかった」（190頁7～8行目）と書いてある。これは、神は全知ではないと言っていることになる。なぜなら、この原理を言い換えると、「人間が一度で責任分担を遂行できるかどうか、神にはわからないから、預言を二つも用意せざるを得なかった」となるからである。よって、この箇所から、原理の神は全知全能ではないことがわかる。（神が本当に全知なら、人間が責任分担を遂行できるかどうかを完全に知っているので、預言は一通りしかあり得ない。）

よって、原理の神は全知全能でありながら、同時に、全知全能ではないという結論が導かれる。これはただの論理矛盾である。ゆえに、原理の神は存在しない。

以上により、この定理は証明された。

## 付録2 韓鶴子女史に関する資料

文鮮明氏の死後、韓鶴子女史が家庭連合（旧統一教会）のトップに立っているようなので、韓鶴子女史に関しても、古い資料からおかしな点を説明しておこうと思う。（ちなみに、韓鶴子女史の両親が無原罪であったという話は、私がメンバーだったときにも全く聞いたことがない。つまり、本書223～224頁で文鮮明氏に関して述べたことが、韓鶴子女史にも当てはまるのである。）

統一教会側の資料である『韓鶴子女史御言選集 愛の世界』（初版、光言社、1989年）170頁には、姜賢実伝道師による、辻褃の合わない証言が載っている。韓鶴子女史の母親である洪順愛（洪ハルモニとも呼ばれている）は29歳まで李龍道牧師につき従ったと書かれていて、1942年3月の30歳のときに妊娠し、翌年1943年陰暦1月6日の午前4時30分に韓鶴子女史が誕生したそうだ。

しかし、李龍道牧師は1933年10月2日に33歳で死亡している。ということは、洪ハルモニが29歳の時には李龍道牧師は既に死んでいるので、29歳まで李龍道牧師につき従ったというのは嘘になる。もし洪ハルモニが29歳まで李龍道牧師につき従ったのだとしたら、李龍道牧師は少なくとも1941年まで生きていたことになるが、これは事実と反する。

このような辻褃の合わない証言が、韓鶴子女史を証しするはずの『韓鶴子女史御言選集 愛の世界』には載っているのである。実におかしなことである。

ちなみに、韓鶴子女史の両親は二人とも李龍道牧師の教会に行っていたそうだが、李龍道牧師は元々所属していたメソジスト教会連合で問題となって追放された人物であり、『原理運動の秘事』（昭和

42年12月20日初版発行，韓国書籍センター，原書：『社会悪と邪教運動』）や『韓国キリスト教史』132～135頁によると，李龍道牧師は神秘的な邪教運動をしていたと書いてあるので，まともな牧師ではなかったと考えられる。また，李龍道牧師のこの話から，韓鶴子女史の母親である洪順愛は，異端あるいは破壊的カルトのメンバーだったことがわかる。

また，『韓鶴子女史御言選集 愛の世界』を調べて見ると，韓鶴子女史に関する洪ハルモニの証しと，姜賢実女史の証しには明らかな矛盾があることがわかる。

(1) まず，母親である洪ハルモニの証しを引用する。「お産後のわかめスープを飲んで，お母様（韓鶴子女史のこと）を抱いて眠ったのですが，真っ黒な角を持ったサタンが近づいてきて，お母様を殺そうとしたのです。私は『サタンよ退け！ この娘は私にとって本当に大切な娘なのに，どうしておまえは殺そうとするのか』と叫びました」（164頁）。

(2) 次に，姜賢実女史の証しを引用する。「洪ハルモニがわかめスープを召し上がると，周囲が急に暗くなり，体がとても強い鉄のロープでしばられたように動けなくなったそうです。それで，だれかに『助けて』と声を上げようとしたのですが，声が全く出てこなかったというのです」（171頁）。

同じ状況を説明したはずの二人の証言は，明らかに矛盾している。このようなあからさまな矛盾が，同じ本の中に載っているのである。しかもこの本は，統一教会の出版社である光言社から出版された本なのである。現在，この本が販売されていないのは，統一教会（現在の家庭連合）にとって都合の悪い本だからだろう。（もし韓鶴子女史が真の母なら，この本は真の母に関する貴重な資料なのだから，販売されないはずがない。）

『韓鶴子女史御言選集 愛の世界』には、他にも不可解な記事が載っている。韓鶴子女史は、「私は先生と出会って後、教会に通いながら中学を卒業し、高校に入学しました」（20頁）と証言しているが、220頁の『女性東亜』（1986年5月号）の記事の抜粋によると、「韓鶴子嬢は春川とソウルを<sup>チュンチョン</sup>行き来したが、ソウルに定着。ソウルにある善正女子中学校を卒業した後、聖ヨセフ病院の看護補助員として働いていた。母親の洪順愛女史は一・四後退時に南下、春川を経て、文教主の追従信徒として、文教主の食事を作ったりして、先生のそば近くで働いていた。一説によると、韓嬢が新婦として選ばれた当時、某女子高に在学中であったという話もあるが確認できない」とある。卒業した中学校の名前や、その学校がソウルにあったことまで判明しているのに、入学した高校（女子高？）の名前は確認できないというのは、不可解である。しかも、中学校を卒業後に働いていた病院の名前や立場まで判明しているのに、なぜ高校の名前は全く確認できないのか？ 人類を救う再臨主の妻の経歴に、こんなにピンポイントに不明瞭な部分があるというのは、どういうわけなのか？ 実におかしな話である。おそらく、高校に入学したとか、女子高に在学していたという話は嘘なのだろう。

『韓鶴子女史御言選集 愛の世界』に書いてあるとおり、文鮮明氏と韓鶴子女史は1977年に完成基準に達したのなら、上記のようなおかしな話が1989年に出版された統一教会側の資料に載っている理由を説明できない。また、この本の223～224頁を見ると、韓鶴子女史が産んだ子女のうち、<sup>ヘジン</sup>恵進の名が記載されていないことに気づく（本書31頁参照）。彼女は、自分がお腹を痛めて産んだ子どものことも忘れてしまったのか？

以上のことから、韓鶴子女史も生まれつき原罪のある墮落人間であると結論づけられる。

## 付録3 キリスト教とは

『原理講論』や統一教会は、実際のキリスト教について、多くの間違った考えを示している。そのため、正統的なキリスト教を知らずに統一教会に入ったメンバーの中には、実際のキリスト教をひどく誤解している者が非常に多いという印象を受ける。

そこで、本書の主題からは外れるが、実際のキリスト教を正しく理解していただくために、「キリスト教とは何か」について、少しだけ、私なりにまとめてみようと思う。ただ、私はキリスト教神学の専門家ではないので、厳密な議論を要する点については、省略させていただきます。

まず、何を信じていれば「キリスト教」と呼べるのかを、以下に箇条書きにしてみる。

- (1) 神は唯一である。
- (2) 父なる神は神である。
- (3) イエスは神であり人である。
- (4) 聖霊せいれいは神である。

以上の4つの全てを信じている教えなら、それは「キリスト教」と呼べると考えてよいだろう。もし、一つでも否定するなら、その教えは「異端」である。

メシア（キリスト）が神であり人であることは、旧約聖書のメシア預言で明確にされている。この詳細に関しては、アーノルド・フルクテンバウム著／佐野剛史訳『メシア的キリスト論』（紙版、ハーベスト・タイム・ミニストリーズ、2016年）を参照されたい。

聖書の神が三位一体であることも、旧約聖書に示されている。こ



の詳細に関しても、先に挙げたフルクテンバウム博士の『メシア的キリスト論』で説明されている。

キリスト教会が使う聖書の正典は、旧約聖書39巻と新約聖書27巻の合計66巻である。これに関しては異論もあるようだが、キリストの権威を認めるなら、これ以外に正典はない。この詳細に関しては、中川健一『聖書解釈の逸脱と回復』（CD4枚組テキスト付、ハーベスト・タイム・ミニストリーズ、2018年）を参照されたい。

さて、実際にキリスト教会へ行くと、例えばプロテスタント教会では「使徒信条」と呼ばれる信仰告白文を唱えたりする。この「使徒信条」は使徒たちの作品ではないが、聖書の重要な教理をうまくまとめているので、ここに紹介させていただく。

## 使徒信条

我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず。我はその独り子、我らの主、イエス・キリストを信ず。主は聖霊によりてやどり、処女マリアより生れ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られ、陰府にくだり、三日目に死人のうちよりよみがえり、天に昇り、全能の父なる神の右に座したまえり。かしこより来りて生ける者と死にたる者とを審きたまわん。我は聖霊を信ず。聖なる公同の教会、聖徒の交わり、罪の赦し、身体からだのよみがえり、永遠とこしえの生命いのちを信ず。

アーメン

（日本福音連盟新聖歌編集委員会編『新聖歌 交読文付き』3版，  
教文館，2011年，826頁）

## あとがき

これまで述べてきた内容から、統一原理の三本柱である創造原理、墮落論、復帰原理の全てが完全に否定された。また、これらを土台とする統一原理は、それ自体の根本的な部分に致命的な矛盾を抱えているので、一つの仮説としても成立しないことが充分明らかとなった。つまり、統一原理は単なる虚構なのであり、『原理講論』から誤りを全て取り除けば、ほとんど何もなくなってしまうのである。体系としての正しい統一原理というものは文字通り存在しない。

『原理講論』が理路整然として、体系的にうまくまとまっているように思えたり、難しそうな用語や聖書からの引用によって権威づけられているように感じたりするのは、そのような魅力によって人々を惹きつけるための落とし穴であることは言うまでもない。本書のようにしっかり検討することによって、全ての偽りの仮面は剥がされるのである。

文鮮明氏や統一教会の幹部たちが多くの嘘をついていることは、他の文献等によっても明らかとされているので、ここでは改めて述べないことにした。たとえそのような情報をここで示さなくとも、これまで述べてきた内容によって、文鮮明氏が全くの嘘つきであることは、理解していただけたと思う。

これに対し、統一教会側は、「嘘を言わなければならなかった」と反論することが考えられる。しかし、なぜ嘘を言わなければならなかったのか？ 我々には嘘は嘘、論理的真理は論理的真理、証明不可能なものは証明不可能なものとして、正しく理解できる能力がある。心情的に反発して、正しい判断をしようとしなのは反対派ではなく、統一教会のメンバーではないか？ そもそも「嘘を言わ

なければならなかった」という文言自体は、嘘だろうか、本当だろうか？ 『原理講論』が完全な虚構であり、文鮮明氏自身の言葉も嘘ばかりなら、この文言を本当だと信じる根拠は何もない。

そうすると、文氏が嘘を言わなければならなかった理由はただ一つである。つまり、人々が自分（文氏）に従うようにするため、である。では、何のために嘘をついてまで従わせる必要があるのか？ それは「蕩滅復帰のため」と言うだろう。

もしこの理由が正しい（嘘でない）とするなら、蕩滅復帰のためということは、墮落と反対の経路をたどることであるから、サタンは本当のことばかり言っていたことになる。また、復帰は再創造でもあるから、神は最初から嘘ばかり言っていたことになってしまう。しかし、この結論は原理的にも受け容れられない。よって、「蕩滅復帰のため」という理由は嘘であると結論づけられる。これは最初の仮定と矛盾する。ゆえに、この言い訳は成立しない。

もし、「本当のことを言っても、誰も信じてはくれなかったから、嘘をついた」という言い訳をするなら、そもそも嘘などついていたら、いったい誰が信じるというのだろうか？ よって、この言い訳も成り立たない。結局、嘘をついてまで自分に従わせたかったのは、自分本位の妄想を実現するためにほかならない。

統一教会のメンバーの中には、私のように統一原理を否定する者に対して、「それなら統一原理を凌駕する代案を示して欲しい」と言う人がいる。しかし、これは単なる「論点ずらし」であり、少なくとも私が原理研究会のメンバーだった頃（1990年代前半）に、既に教えられていた言い訳である。つまり、代案を示してくれと言う人は、自分の頭で何が正しいのかを考えようとはしていない。それ

が問題である。

幹部など、自分で原理講義をする立場に立つようになると、原理は原理通りでないことがわかってくる場合があるようだ。しかしそれでも統一教会の中に留まる場合は、「自分にはまだ真理がよくわかっていないのだ」と本気で思っているか、あるいは、「たとえ原理が間違っているとしても、ここで得られる快感（喜び）を失いたくない」と思っているか、あるいは、外界への恐怖感や罪意識があるのではないかと思う。

もし、統一原理の根本的な誤りを発見できないなら、その人は論理的に正しく考えることができていることになる。（うまくマインド・コントロールされていると、原理に対して批判的な考えをすること自体、困難な場合がある。）もし、統一教会にいて得られる快感（喜び）——それは、人生上の複雑な問題に対して実にシンプルな解答が得られることによるのであったり、地位や権力を持っているという感覚から得られるものであったり、「自分は神に選ばれたエリートなんだ」という優越感によるものであったり、愛情で人を支配できるという感覚であったり、メンバーたちとの渾然<sup>こんぜん</sup>一体とした愛情関係によるものであったり、文鮮明氏らとの依存的な親子関係が得られることによるのであったり、性的な欲求を過度に抑圧することから生じてくるものであったり、それらが絡み合うことによって得られる感覚——によって脱会できないのなら、その人は破壊的カルト・マインド・コントロール依存症になっていると思われる。外界への恐怖感や罪意識についても同様に、破壊的カルト・マインド・コントロールによって与えられたものである。

本書では、統一教会が用いるマインド・コントロールについては主題が異なるので述べていない。その点に関しては、巻末の参考文献

献等を参照して欲しい。

また、社会心理学のマインド・コントロール理論によって明らかとされているように、統一教会は本当に破壊的カルトの一つである。特に、そのことを充分理解しないまま脱会してしまった元メンバーは、将来再び破壊的カルトに悩まされないためにも、巻末に挙げた参考文献等によってマインド・コントロール理論についてしっかり学んでいただきたい。この際、ただ客観的に理解するのではなく、自分自身の生々しい体験として理解して欲しい。なぜなら、マインド・コントロールの核心は、外面的な操作によって自然に内面を変容させる所にあるからである。

いずれにせよ、私は統一教会のメンバーには、しっかりと『原理講論』を読んで、統一原理を学んで欲しいと思っている。しっかり学ぶことで、その虚構性が明白になるからである。

## 参考文献

以下の文献も有効だが、本書を必要とした読者には、より多くの視点から物事を見られるように、(日本では、例えば放送大学で) 広く学問としての教養を身につけていただきたいとも思う。なぜなら、昨今では学問が非常に多く枝分かれし、各々が専門化している。大学でも、「隣の研究室は何をやっているのか知らない」ということが現実には起きているようである。このような状況では、スペシャリストは育成できても、ジェネラリストは育成できない。ジェネラリストが育成できないということは、自分の学問が意味する所がわからなくなり、人間関係も閉鎖的になり、人生観・世界観も狭く固定的になる、そういう人が多くなることを意味する。それは人類社会全体にとっても大きな損害となる。かといって、全ての分野に渡って専門的に学習することは、事実上不可能である。物事を多くの視点から理解するためには、専門的な細かな知識にこだわるよりも、粗く見て大局をつかんだほうがよい。つまり、その学問の方法論や考え方を最優先に学ぶことで、物事を多くの視点から広く認識できるようになる。それは我々により深い理解を与えてくれるだろうし、人生を豊かなものにもしてくれるだろう。ゆえに、より多くの視点から物事を考えられるように、広く学問を学ばれることを、私は読者の皆さんに期待したい。

統一教会側の文献は文中で示したので、それ以外の主要な参考文献を挙げておく。

ハーベスト・タイム・ミニストリーズから出されている資料

- ・ 中川健一著『クレイ聖書解説コレクション』シリーズ
- ・ 中川健一『聖書解釈の逸脱と回復』CD4枚組テキスト付，2018年

- ・中川健一『1日でわかる「千年王国論」』CD6枚組テキスト付，2017年
- ・中川健一『1日でわかる「イスラエル論」』CD4枚組テキスト付，2018年
- ・中川健一『ディスペンセーションリズムQ&A』CD5枚組書籍付，2019年
- ・アーノルド・フルクテンバウム著，佐野剛史訳『メシア的キリスト論—旧約聖書のメシア預言で読み解くイエスの生涯—』紙版，2016年

## 聖書に関して

- ・『聖書 新改訳2017』新日本聖書刊行会，2017年
- ・『聖書 口語訳』日本聖書協会，新約：1954年，旧約：1955年
- ・『聖書 新共同訳—旧約聖書続編つき』日本聖書協会，1987年
- ・『聖書 聖書協会共同訳—旧約聖書続編付き』日本聖書協会，2018年
- ・『新聖書辞典』いのちのことば社，1985年
- ・『新実用聖書注解』いのちのことば社，2008年
- ・榊原康夫著『旧約聖書の生い立ちと成立』増補改訂版，いのちのことば社，1994年
- ・ミルトス・ヘブライ文化研究所編『創世記 I』オンデマンド版，ミルトス，2014年
- ・古代語研究会編，谷川政美著『聖書ヘブライ語—日本語辞典 聖書アラム語彙付』初版，ミルトス，2018年
- ・名尾耕作著『旧約聖書ヘブル語大辞典 付・アラム語』改訂3版，教文館，2003年
- ・織田昭編『新約聖書ギリシア語小辞典』教文館，2002年

## マインド・コントロールに関して

- ・ スティーヴン・ハッサン著，浅見定雄訳『マインド・コントロールの恐怖』初版，恒友出版，1993年
- ・ 西田公昭著『マインド・コントロールとは何か』紀伊國屋書店，1995年

## 論理学・哲学に関して

- ・ 岩崎武雄著『哲学のすすめ』講談社現代新書，1966年
- ・ 岩崎武雄著『正しく考えるために』講談社現代新書，1972年
- ・ 野矢茂樹著『哲学の謎』講談社現代新書，1996年
- ・ 量<sup>はかり</sup>義治著『西洋近世哲学史』改訂版，放送大学教育振興会，1999年

## 心理学に関して

- ・ 小此木啓吾<sup>おこのぎ</sup>著『日本人の阿閼世<sup>あじゃせ</sup>コンプレックス』7版，中央公論社，1995年
- ・ 杉田峰康著『こじれる人間関係 ドラマ的交流の分析』第1版，創元社，1983年
- ・ 岸見一郎著『アドラー心理学入門 よりよい人間関係のために』初版，KKベストセラーズ，1999年

## 科学哲学に関して

- ・ 熊澤峰夫・伊藤孝士・吉田茂生編『全地球史解説』初版，東京大学出版会，2002年

## 科学史に関して

- ・ H・バターフィールド著，渡辺正雄訳『近代科学の誕生』講談社学術文庫，1978年



## 数学に関して

- ・高橋昌一郎著『ゲーデルの哲学—不完全性定理と神の存在論』講談社現代新書，1999年
- ・隈部正博著『数学基礎論=ゲーデルの不完全性定理=』改訂版，放送大学教育振興会，1999年
- ・野矢茂樹著『無限論の教室』講談社現代新書，1998年
- ・合原一幸著『カオスの数理と技術=カオス，そしてフラクタル，複雑系への序章=』放送大学教育振興会，1997年

## 化学史に関して

- ・竹内敬人著『化学史』放送大学教育振興会，1993年

## 生物科学に関して

- ・新井康允・近藤洋一著『人間の生物学』放送大学教育振興会，1999年
- ・森脇和郎・岩槻邦男編著『生物の進化と多様性』放送大学教育振興会，1999年
- ・日高敏隆著『動物の行動と社会』三訂版，放送大学教育振興会，1996年

## 世界史に関して

- ・亀井高孝・三上次男・林健太郎・堀米庸三編『世界史年表・地図』第11版，吉川弘文館，2005年



# 著者紹介

●加藤 裕（かとう・ゆたか）●

1974年：三重県に生まれる。

1992年：新潟大学理学部地質鉱物学科在籍時，原理研究会に入会。

1994年：原理研究会を正式に脱会。

1996年：新潟大学理学部地質鉱物学科退学。

2001年：放送大学教養学部自然の理解専攻卒業。

2011年：地元のプロテスタント教会で受洗。

これが統一原理だ

---

発行：2002年11月20日第1版

2019年 7月31日第7版

著者：加藤 裕

発行者：加藤 裕

---

© 2019 Yutaka Kato